社会教育課

富田遺跡群
西大室遺跡群
清里南部遺跡群

土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報

1980
前橋市教育委員会

目　　次

序
例　言
序　章
1. 調査に至る経過……1
2. 前橋市土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査団組織……2
3. 調査団の目的……2

富田遺跡群
（Ⅰ）概　要……3
（Ⅱ）発掘調査の経過……3
（Ⅲ）古　墳……6
（Ⅳ）中世古墓群……11
（Ⅴ）住居跡……25
（Ⅵ）まとめ……32

西大室遺跡群
Ⅰ 所在地……41
Ⅱ 遺跡の位置と環境……41
Ⅲ 発掘調査の概要……42
Ⅳ まとめ……54

清里南部遺跡群
Ⅰ 遺跡の位置と環境……65
Ⅱ 発掘調査の概要
1. 発掘調査の方法……66
2. 地　層……66
3. 遺　構……66
4. 遺　物……82
5. 結　び……87

序

前橋市土地改良事業（富田南部・西大室・清里南部）によるほ場整備に伴い 国庫・県費補助金及び各土地改良区より委託を受け 富田遺跡群，西大室遺跡群，清里南部遺跡群の発掘調査を実施しました。

調査の結果，鎌倉時代末期～戦国時代と推定される墓域（古墓約60基），地下式土壙や墓前祭祀の場と推定される「前庭」つき古墳等検出し，前橋の歴史の解明に また一資料を得ることが出来ました。特に，西大室遺跡群の古墳2基は地元土地改良区の協力により現状保存されたことは 喜びに堪えません。

ここに記録保存のための埋蔵文化財報告書の発刊のはこびとなり， 本報告書にもられた遺構・遺物は私達の祖先の生活や歴史を探求する重要な資料となり得るものであります。

富田南部，西大室，清里南部各土地改良区，農政部土地改良課の担当者及び 酷暑・酷寒の中で直接発掘調査に携さわった調査担当者，調査員，作業員の方々に対して厚くお礼を申し上げます。

本調査報告書が文化財保護の一助として活用されれば幸甚であります。

昭和 55 年 3 月 31 日

前橋市教育委員会

教育長 金 井 博 之

例　　言

1. 本報告書は，前橋市土地改良事業実施地区（富田南部，西大室，清里南部）内の埋蔵文化財発掘調査についての概報である。
2. 調査主体者は，前橋市教育委員会，前橋市土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査団である。
3. 調査担当者及び調査期間等

○富田遺跡群（12,000㎡）

所 在 地　前橋市富田町中前　他21筆

調査期間　54. 5.21 ～ 54. 9.19

担 当 者　木部日出雄，井野　誠一，飯塚　　誠

調 査 員　飛田野正佳

○西大室遺跡群（10,000㎡）

所 在 地　前橋市西大室町大稲荷340—7　他５筆

調査期間　54. 8.10 ～ 54.10.13

担 当 者　福田　紀雄

調 査 員　松村　親樹，杉浦つや子

○清里南部遺跡群（9,320㎡）

所 在 地　前橋市青梨子町480　他29筆

調査期間　54.10.11 ～ 54.12.27

担 当 者　池田　茂則，唐沢　保之，川崎　　始

4. 本書の執筆，遺物，図面整理，図版作製遺物写真等は，調査担当者，調査員及び整理作業員が分担した。
5. 発掘調査にあたっては，担当者，調査員の他に多勢の発掘作業員の協力があった。

序　　章

1. 調査に至る経過

土地改良事業（富田南部・西大室・清里南部）に伴う埋蔵文化財について前橋市教育委員会との事前の調整・協議の経過及び結果の概要については下記のとおりである。

昭和52年11月　土地改良事業の原案の提示があり，これに対して前橋市教育委員会として計画の段階で埋蔵文化財を考慮して計画策定するよう申し入れた。

昭和52年12月　各土地改良事業実施予定地区に対して，遺構・遺物の散布状況等の調査を実施し，その結果を土地改良事業計画策定に再検討を申し入れた。

昭和53年４月　再度各土地改良事業計画の内容変更について検討を行い，現状保存する遺構について調整をはかる。

昭和53年９月　各土地改良事業について道路・水路等の取り付けについて再検討を申し入れた。

昭和53年11月　各土地改良事業の全体計画と年度別計画について全体的な調整を協議の上決定した。

昭和54年１月　各土地改良区と前橋市教育委員会との協定書が取り交わされた。

協定書の主な内容

- 昭和54年度より土地改良総合整備事業の工事計画地区に係る文化財の調査は前橋市教育委員会が実施するものとする，なおその実施にあたって土地改良総合整備事業の事業実施に支障が生じないよう調査に努めるものとする。
- ○○土地改良区は，前橋市教育委員会の実施する文化財の調査に全面的に協力するものとする。
- 事前調査を実施した結果，特にすぐれた遺構であることが判明した場合，改良区内に現状保存をする。

昭和47年　月　国・県補助金申請書提出（文化財保護部局）

昭和54年４月　西大室・富田南部土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査依頼を受ける。

昭和54年５月　前橋市土地改良事業実施地区（富田南部・西大室・清里南部）内埋蔵文化財発掘調査団結成（調査団組織は，別掲）

昭和54年５月　各土地改良区と発掘調査委託費について契約する。

昭和54年５月21日～９月19日　富田遺跡群発掘調査実施

昭和54年８月13日～10月16日　西大室遺跡群発掘調査実施

昭和54年10月11日～12月27日　清里南部遺跡群発掘調査実施

昭和55年３月　各土地改良区へ発掘調査委託費の決算報告書の提出をする。

2. 前橋市土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査団組織（S54. 5.現在）

顧問	高橋 藤治	助役		
〃	金井 博之	教育長		
〃	吉田 弘	教育次長（指導担当）		
団長	佐藤 寅雄	教育次長（管理担当）		
副団長	鎌塚 正	農政部長		
〃	藤沢 守夫	社会教育課長（兼務調査団事務局長）		
幹事	吉田 実	土地改良課長		
〃	本間 怜	教委・総務課長		
発掘担当者	相沢 貞順	社会教育課	文化財保護係長	（富田・西大室・清里遺跡群）
〃	福田 紀雄	〃	文化財保護係	主任社会教育主事（〃）
〃	中村 宮夫	〃	〃	主任（〃）
〃	木部日出雄	〃	〃	〃（富田）
〃	池田 茂則	〃	〃	主事（清里南部）
〃	唐沢 保之	〃	〃	〃（清里南部）
〃	井野 誠一	〃	〃	主事（富田）
〃	飯塚 誠	〃	〃	〃（富田）
〃	川崎 始	〃	〃	〃（清里南部）
調査員	福田 充裕	〃	〃	主任
〃	松村 親樹	〃	〃	主事
〃	富沢 敏弘	〃	〃	〃
〃	田口 正美	〃	〃	主事補
〃	入内島裕美	〃	〃	〃
〃	杉浦つや子	〃	〃	〃

事務局員　教委・総務課次長　社会教育課次長　土地改良課次長　及び社会教育課管理係職員　土地改良課指導係職員

参与	小林 竹二	富田南部土地改良区理事長
〃	萩原弥惣治	西大室土地改良区理事長
〃	松下 雅輔	清里南部土地改良区理事長

3. 調 査 団 の 目 的

土地改良事業実施地区内の埋蔵文化財を発掘調査し，遺構・遺跡の全容を明らかにするとともに現状保存または記録保存し，もって文化財保護に資することを目的とする。

富田遺跡群

(I) 概　　要

1. 遺跡の位置と環境

富田遺跡群は，前橋市富田町に所在する。ここは，前橋市の東部，市街地より東へ約7kmの距離にあり，赤城山南麓に位置している。赤城山南麓には，利根川から分かれたり，赤城山山頂付近から流出したりする大小いくつもの河川が，北西から南東にかけて流路を刻んでいる。本遺跡地は，そのうちの2河川である荒砥川と桃木川によって東と西を挟まれ，全体的に南東方向にゆるやかに傾斜する荒砥川西岸の台地上にある。標高は，海抜100～120m内外で，ほぼ平坦な土地である。

本遺跡地周辺の遺跡の分布を見ると，縄文時代以来多くの生活が営まれてきたことが分かる。縄文時代の遺跡としては，後期前半に属すると思われる笂井遺跡が発掘調査された記録がある。富田町地内においても，縄文早・前・中・後期の土器が多数散布しており，当時の生活の足跡を今日に伝えている。弥生時代の遺跡としては，荒砥川左岸にある荒口町・前原遺跡が部分的にではあるが，発掘調査されており，3世紀初頭に比定される壺・甕等の良好な資料を持った竪穴住居跡が検出されている。古墳時代の遺跡としては，新屋遺跡において，石田川式土器を伴う住居跡が調査されている。また，古墳の分布を見ると，荒砥川左岸及び旧荒砥村北部に特に密であり，荒砥古墳群を形成している。『上毛古墳綜覧』によると，荒砥川流域では富田町・荒口町・今井町合わせて64基があったとされている。

しかし，その後，開墾や土地改良事業等によって削平され，おうとか山古墳や今井神社古墳等を残すほかは，数多くの古墳が原形をとどめていない。

奈良・平安時代の遺跡としては，寺畑・諏訪西・前田・荒子小学校校庭・荒砥保育所の各遺跡において，土師器・須恵器を伴う住居跡が調査されている。

鎌倉・戦国時代の様相を伝える遺跡・遺物も数多く散在する。富田町の正法院境内にある弥陀三尊のほか，泉沢町・荒子町・二之宮町の寺院に残る石仏を始めとして，板碑・宝塔・輪廻塔等仏教にかかわる遺物が多い。また，本遺跡で発見された古墓と類似する例を大胡の茂木にみることができる。なお，今井城跡や上泉城跡は，この時期に赤城南麓地帯を支配した大胡氏の勢力の範囲を物語るものである。

本遺跡地南方及び荒口町・荒子町の南には，東西に走る浅い帯状の窪跡「女堀」がある。荒砥川，神沢川で分断されているこの遺構は，開穿年代等詳細は明らかでないが，中世社会の政治・文化を理解する上で見逃せない遺構として注目されている。

以上のように，本遺跡地を含むこの台地上には，古代より数多くの集落が営まれ，現在にいたっている。

(II) 発掘調査の経過

本調査は，前橋市富田南部土地改良事業に伴う道・水路建設予定地及び水田転換予定地の内，マッピング調査によって遺物が濃密に散布すると認められた地域について，工事着工前に記録保存を図るために行ったものである。3箇年計画の調査であり，本年度における調査は，富田遺跡群の内，

挿図1　地　　図

1 富田遺跡群	2 笂井遺跡	3 前原遺跡
4 新屋遺跡	5 おとうか山古墳	6 今井神社古墳
7 権現山古墳	8 諏訪西遺跡	9 前田遺跡
10 荒子小学校校庭遺跡	11 茂木古墓	12 大胡城跡
13 今井城遺跡	14 上泉城遺跡	15 女堰跡

字中前（ナカマエ）・東曲輪（ヒガシクルワ）・細田（ホソダ）・東原（ヒガシハラ）の各地区を対象として行った。

調査対象地は右図の如くであり，便宜的に，次の３地区に分けて行った。

- ○A　区　おとうか山古墳周辺
- ○B₋₁区　正法院東の東西道・水路部分と南北道・水路の北側及び水田転換予定地の北側
- ○B₋₂区　南北道・水路の南側及び水田転換予定地の南側

以上の３地区における調査の方法と概要は次のとおりである。

○A　区　おとうか山古墳の墳丘は，現状保存の方針の下に，周堀の有無・形状及び古墳の規模の確認を目的として，墳頂を中心にして周囲にほぼ等間隔に８本の放射状トレンチを設けて試掘を行った。その結果，玦状を呈する周堀の存在が確認された。尚，古墳の東側に接して南北に延る道・水路部分は全面発掘を行った。

○B₋₁区　東西道・水路部分は全面を発掘調査し，水田転換予定地の北側部分は，墳丘の削平された古墳が三基推定できたので，規模確認のために，周堀を全面発掘調査することにした。

○B₋₂区　ローム層直上まで表土を除去，南北道・水路については，東端に約１ｍの幅で南北を貫いてトレンチを設け，さらに，東西には約５ｍ間隔に幅約１ｍのトレンチを設けて試掘を行った。その結果，古墳の周掘，住居跡，井戸，溝等の遺構を確認できたので，拡張して調査することにした。

水田転換予定地については，東西に約10ｍおきに幅約1.5ｍのトレンチを設けて試掘を行った。その結果，古墳，墳丘を削平された古墳，住居跡，井戸，溝，ピット等の遺構を確認できたので，拡張して調査を行った。

挿図２　発掘調査地区

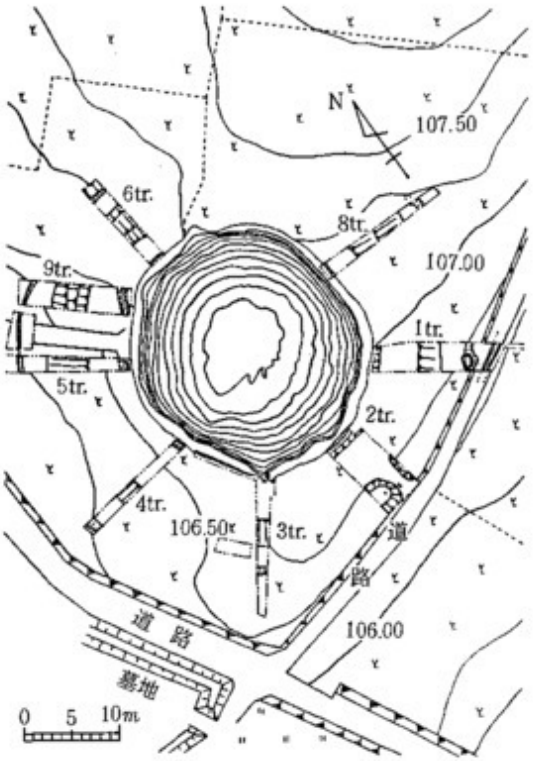
（Ⅲ） 古　　墳

今回の調査で，おとうか山古墳（『上毛古墳綜覧』荒砥344号墳）に加え富田町字東原（ヒガシハラ）地内において新たに７基の古墳を検出した。いずれも耕作により平夷されてしまっており，周堀の確認のみに留まってしまったが，その概要は表１に示す如くで，５世紀後半から６世紀に構築されたものと考えられる。（以下，字名に従って「東原何号墳」と呼ぶ。）

(1) 遺　構

○おとうか山古墳（挿図３，図版１－１，２）

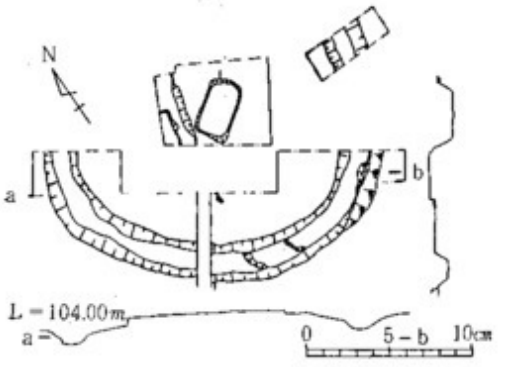
本古墳は，今回発掘調査した６基の内，最北に位置する古墳であり，現状保存を前提として，墳丘実測と規模の確認を行なった。調査前墳丘は，東西径23m，南北径26m，現地表よりの高さ2.5mのいびつな円墳であった。９本の放射状トレンチと，墳裾を廻るトレンチにより，後世の堆積土や流出土を除去した結果，径28～29.5m，幅３～3.5mの周堀を確認した。周堀は，東側部分に幅３mほどの「渡り」状遺構を持ち玦状を呈する。また，ボーリング調査の結果，墳丘上には葺石の使用が認められたが，墳裾が「ホッキリ」（掘切り）と呼ばれる耕作のために攪乱されており，葺石根石列は検出し得なかった。さらに第６トレンチの周堀覆土中において，堀底より30cmの高さにF.Aを確認している。



挿図３　おとうか山古墳墳丘実測図

○東原１号墳（挿図４，図版１－３，４）

本古墳も他の６基と同様に耕作により墳丘を削平されていたが，中央部において小粒の河原石と粘土の混じった埋葬主体部の残骸を確認した。加えて，この直下より3.6m×2.2m，深さ1.5mの矩形の掘り込みを検出し，埋葬主体部築造に関して興味ある資料を得た。掘り込み内には，黒色土とローム土の互層による版築がなされており，石室構築に際しての地形と思われる。なお，長辺の走向はN-54°-Eである。



挿図４　東原号墳墳丘実測図

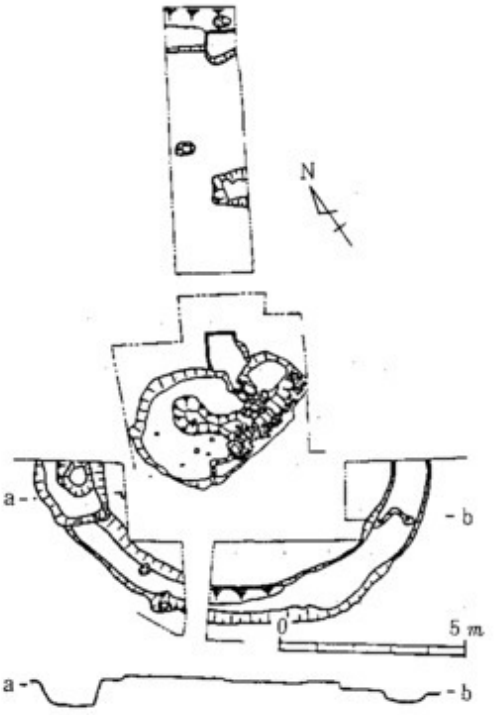
○東原２号墳（挿図５，図版１－５，６）

本古墳の埋葬主体部は，30cm×15cmほどの河原石を小口積みにして築造した竪穴式石室である。攪乱が著しいために南壁の一部しか検出し得なかったが，舗石と粘土床を確認した。墓壙の規模は

1.5m×2.7mの矩形と推定され，この中に小粒の河原石と粘土で石室裏込めがなされ石室が築かれていた。長辺の走向はN-81°-Eである。

表1

名称＼項目	形状	規模（高/堤幅）	埋葬主体部	埴輪 円筒	埴輪 朝顔	埴輪 人物	埴輪 家	埴輪 その他の形象	備考
おとうか山古墳	円形	29m……3.5m	未調査						葺石の存在は確認したが，埴輪は使用していないと思われる。周堀の外側の立上りは明確だが，内側については，ダラダラと上ってくる。
東原1号墳	〃	22m……2.4m	不明	○		○	○	○	埋葬主体部の粘土分布範囲等は，後世の削による攪乱が著しいためにはっきりとしなかった。周堀は約半分を完掘した。
東原2号墳	〃（？）	11m……1.1m	竪穴式石室	○	○	○			北側に入れたトレンチでは，周堀を明確につかむ事ができなかった。
東原3号墳	〃（？）	18m……1.5m	未調査						調査区の関係で周堀の¼程しか掘れなかったので詳細は不明。
東原4号墳	〃	16.5m……1.4m	不明	○				○	墳丘の西よりの所に1.6×2.2m程の掘り込みがあったが，埋葬主体部とは考えられない。
東原5号墳	〃	28m……2m	〃	○					西側を残して，墳丘の¾程が古墓及び道路によって削り取られてしまっていた。葺石の残りは比較的良好であった。
東原6号墳	〃	26m……2.2m	〃	○					墳丘の南半分を古墓によって削り取られていた。埋葬主体部の確認はできなかった。葺石を使用。
東原7号墳	〃	21m……1.6m	〃	○	○	○		○（馬？足？か）	低丘後の南斜面に築造されたもので，南側の残りはあまり良くなかった。葺石を使用。



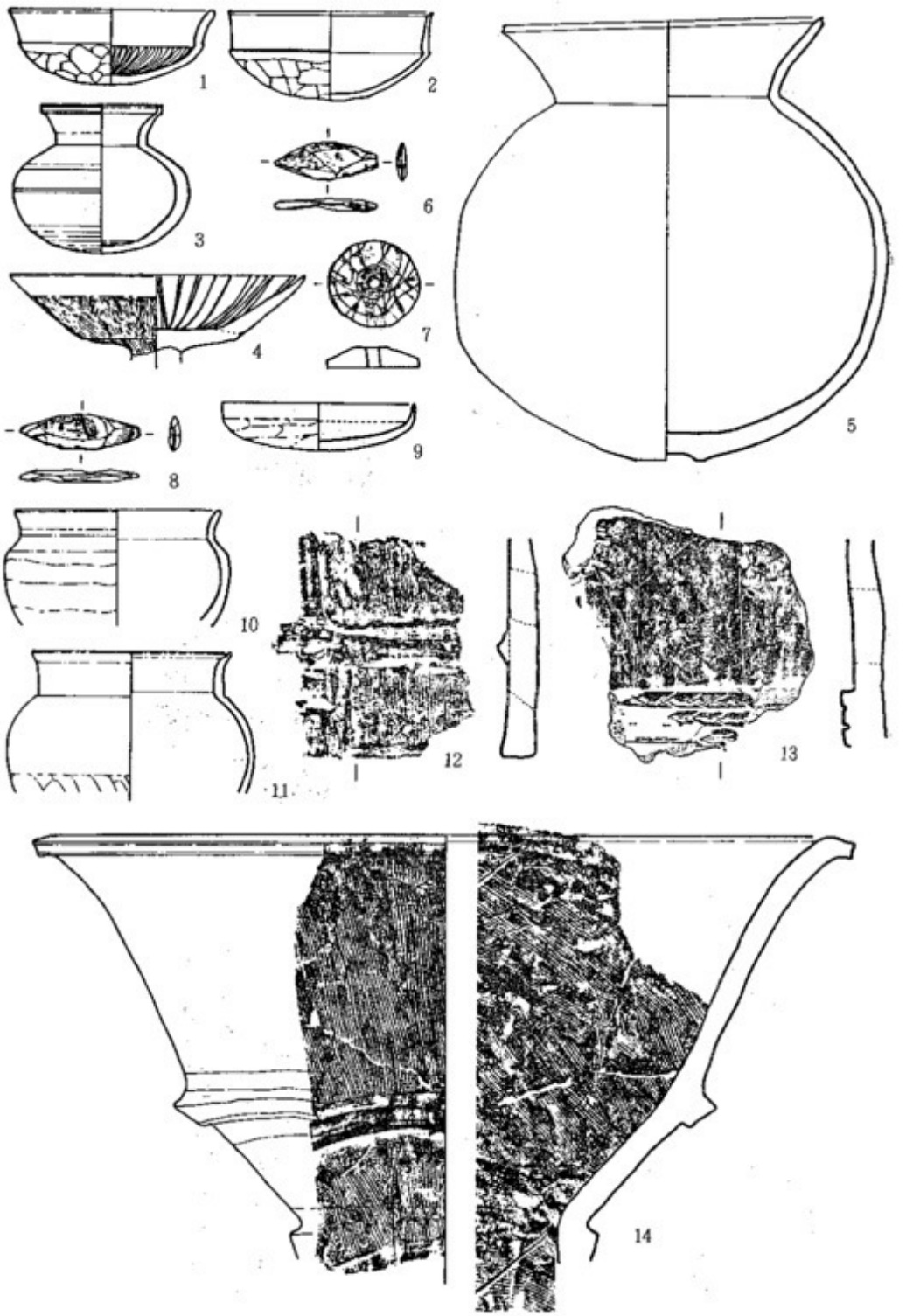
挿図5　東原2号墳墳丘実測図

(2) 遺　物

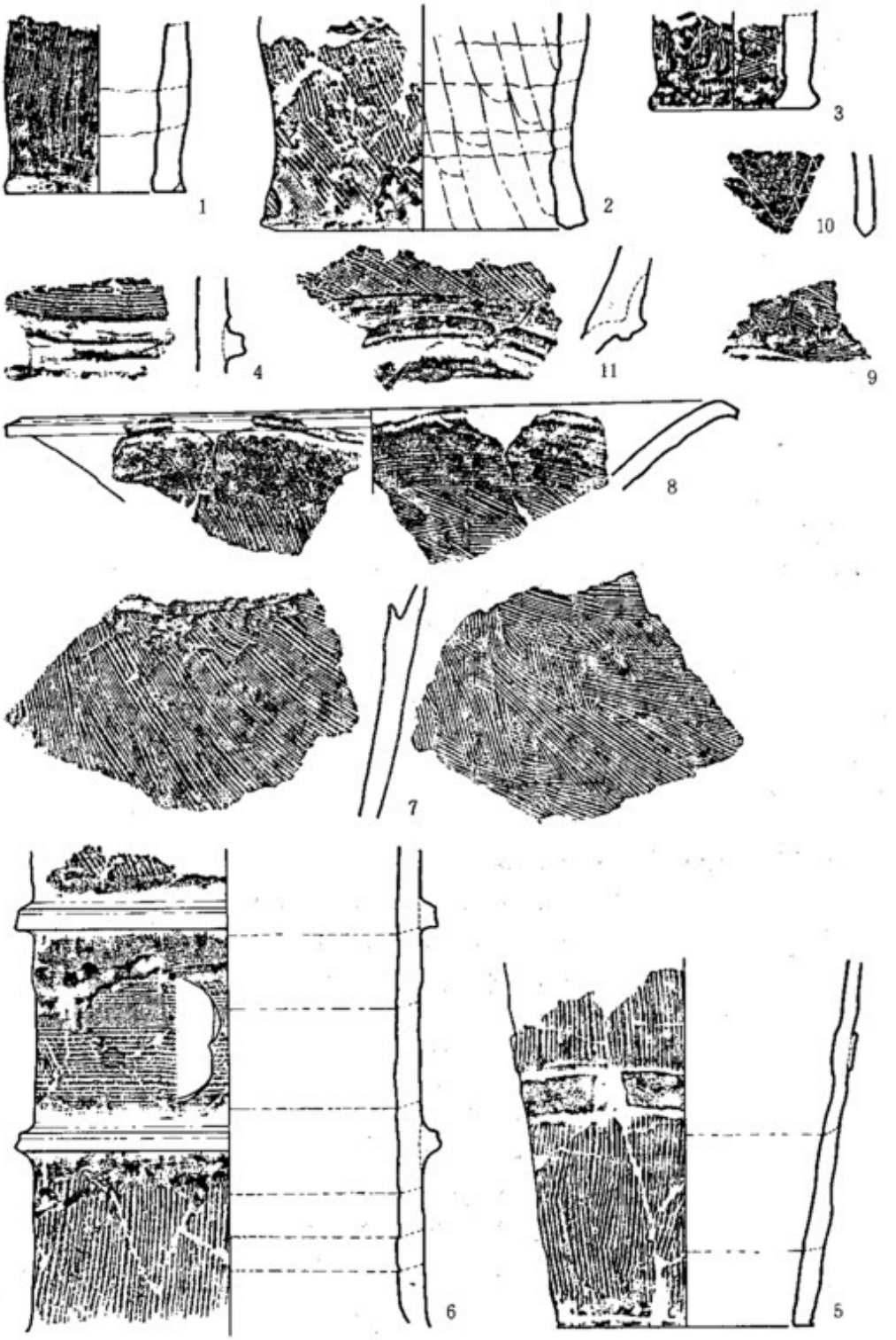
本調査で採集した古墳に関係する遺物は，プラスチック製パン箱7箱分で，その大半が埴輪片である。しかし，5・7号墳では紡錘車や剣形模造品等の石製品も出土している。主なものの概略は次表のとおりである。

表2

No.＼項		種類	法量(cm)	技法等	胎土	備考
1	挿図6—1 図版—1	土師器・坏	器高 4.6 口径12.4	口縁部横ナデ→。底部は不定方向のヘラ削り。内面は横方向のヘラナデ後，底部に放射状ヘラナデ。	砂粒を少し含む。	色調は赤褐色。焼成良好。完形2号墳周堀中。
2	挿図6—2 図版—2	土師器・坏	器高 5.4 口径12.2	口縁部横ナデ→。底部は不定方向のヘラ削り後周縁部のみ横ヘラ削り→。	緻密。雲母片を含む。	色調は赤褐色。焼成良好。60%。4号墳周堀中。
3	挿図6—3 図版—3	須恵器・小型壺	器高 9.0 口径 7.4	底部ヘラ削り→。底部内面にはヌタ目痕が残る。	緻密	色調は青灰色。焼成良好。完形。4号墳周堀中。
4	挿図6—4 図版—5	土師器・高坏	口径17.8	内外面とも横ナデ→後，縦方向のヘラナデ（外面は余り明瞭でない。）〈図版—7も同様〉	砂粒を多く含む。	色調は茶褐色。焼成良好。5号墳。
5	挿図6—5 図版—6	土師器・鼓	器高 口径			
6	挿図6—6 図版—8	滑石複製形模造品	長さ 6.2		重さ49.9g	5号墳墳頂部付近表採。
7	挿図6—7 図版—9	滑石複紡錘車	底径 5.6		重さ49.9g	〃
8	挿図6—8 図版—10	滑石複製形模造品	長さ 7.2		重さ13.8g	〃
9	挿図6—9 図版—11	土師器・坏	器高 3.0 口径11.6	口縁部横ナデ→。底部は不定方向のヘラ削り後周縁部のみ横ヘラ削り→。	緻密	色調は赤褐色。焼成良好。40%。7号墳周堀中。
10	挿図6—10	土師器・壺	口径12.3	口縁部横ナデ→。胴部には粘土紐巻き上げ痕が残る。内面はきれいにナデられている。	砂粒を多く含む。	色調は淡褐色。焼成良好。50%。おとうか山古墳周堀中。
11	挿図6—11	土師器・壺	口径12.0	胴部上半は横ヘラ削り→。下半は↘ヘラ削り。口縁部横ナデ→。	緻密	色調は茶褐色。焼成良好。40%。おとうか山古墳周堀中。
12	挿図6—12 図版—12	家型埴輪				



挿図6　東　原　古　墳　出　土　遺　物　実　測　図



挿図7　東原古墳出土遺物実測図

○1号墳の埴輪（挿図6，7）

12（図版　—12）は家型埴輪の破片であり，縦方向のハケ調整・下部板押えの後に凸帯を貼り付けている。内面も雑なハケ調整を行っているが，接合痕を消しきっていない。家の造りは不明。1（図版　—1）及び③（図版　—3）は円筒埴輪片である。1は家型埴輪とほぼ同様な造り・胎土であるが，③はハケ目が細く内面の調整も縦方向の指ナデである。9（⑩），10（⑬）は形象埴輪片で，9は馬の鞍部とも考えられる。10は人物。

○2号墳の埴輪（挿図6，7）

13（図版　—14）は人物埴輪の胴部，14（図版　—15）は朝顔型埴輪片である。両方ともしっかりした造りであるが，14は淡黄褐色を呈する。⑭（図版　—14）は人物埴輪片。

○4号墳の埴輪

4号墳の埴輪はいずれも小破片であり，実測・写真撮影は省略した。造りや胎土を観察した結果では，2号墳のものと同様なものが多かった。

○5号墳の埴輪

5号墳の埴輪も4号墳と同様に小破片であり，出土量も少なかった。胎土・色調は7号墳のものに良く似ていた。

○6号墳の埴輪（挿図7）

いずれも円筒埴輪片であったが，造りや胎土にバラエティーが認められる。2（図版　—2）・6（図版　—7）は，淡赤褐色で似かよった色調を呈するが，6の胎土中には砂粒が多く含まれ，焼成もあまくてポロポロとした感じを受ける。また，穿孔の形も巴形のようにも見えるが，聊か疑問な点が残る。5（図版　—6）は赤褐色を呈し，凸帯の形に最大の特徴を示す。胎土は緻密で焼成も良い。また，穿孔（→印部分）も小さいようである。

○7号墳の埴輪（挿図7）

3（図版　—4）は埴輪馬の足と思われる。4（図版　—5）は，横ハケ調整痕を持つ円筒埴輪であるが，6号墳のものよりも良質である。8（図版　—9）・11（図版　—8）は共に朝顔型埴輪片であり，前者の胎土は緻密で赤褐色に焼き上がっているが，後者は砂粒を多く含み，燻んだ赤褐色を呈する。7（図版　—11）・9（図版　—15）はいずれも形象埴輪片（人物か？）であり，7の胎土は緻密で表面は燻んだ赤褐色，内面は鮮かな黄褐色をしている。

(6) 小　結

今回の調査で明らかになった遺構・遺物の概要は上述のとおりであるが，これらの資料から古墳の時期を考えてみたい。まず「おとうか山古墳」については，周堀の覆土中に F・A（榛名山二ツ岳降下火山灰）の一次堆積が認められたこと及び，第3トレンチ西のグリット中より出土した2つの壺型土器の肩の張りや整形技法等から，古墳時代中期（和泉期）に比定することができよう。また「渡り」状遺物を持つ鉄状の周堀は，赤城村・五日牛24号墳等でも確認されているが，その性格を解明するような積極的資料は得られなかった。次に「東原1号墳」については，土器は出土していないが，2次調整を欠た埴輪及びその伴出関係等から6C～7C前半の築造と考えられる。埋葬主体部の矩形の掘り込みは，石室の構築方法や走向（N—54°—E）が6号住居跡のそれと似ていること等，多くの検討を要する問題を含んでいるが，今は充分な資料がない為に後日に期したい。ちなみに掘り込の長さと幅の比は，約1.6となり横穴式石室を有する古墳とすれば，7C前半の時期に当る。「東原2号墳」からは，周堀の覆土中から挿図6—1の土師器坏が出土しており，体部に若干稜を残し口縁部がやや開きぎみに立ち上がること及びヘラ削り，ヘラ磨き等の技法から，鬼高Ⅱ期に対応すると考えられる。出土レベルが周堀底からあまり離れていなかったので古墳の築造時期とそれほど隔っていないと考えられる。

「東原4号墳」からは，挿図6—2・3の2個体の土器も出土している。この土師器坏は，鬼高Ⅱ期に3の須恵器・壺も第Ⅲ期に相当すると思われるので，7世紀代の築造と考えられる。「東原5号墳」の土器は，（挿図6—4）高坏と壺（挿図6—5）があり，ともに和泉Ⅱ期の特長をよく保っているので，5世紀代と考えられる。「東原6号墳」からは，土器は出土しなかったが，特長のある埴輪が多く出土した（挿図7—2・5・6）。

（Ⅳ） 中世古墓群

(1) 概　要

本遺構は，東原5・6号墳墳丘の南に造られた中世の火葬墓群である。遺構全体は北から西に曲ったL字形をしており，北側は6号墳墳丘の南斜面を幅約4m・長さ約27mにわたってテラス状に削平し，西側は東への自然斜面を幅約2m・長さ約25mにわたって削平して墓域を構成している。

古墓群は大きな3群により構成されており，その内に19小枝群が認められる。墓壙と考えられる遺構は59（骨片を伴うもの53）で，板碑・五輪塔・骨蔵器等の遺物が出土している。

東西に延びる一群の残存状態は良好で，板碑や五輪塔地輪部が比較的良く原位置を留めていた。南北に延びる群では極めて悪く，南端も削り取られてしまっていた。小枝群の形状はおおむね矩形

挿図8　古　墓　群　遠　景

を呈しており，二重の区画を持つものや一区画の内に複数の埋葬施設を持つもの等があった。

本古墓群は，その規模の大きさと共に，区画にバラエティが有り，その区画が相互に切り合い関係を持つこと等によって，中世墓の諸形態と推移の過程が辿れる貴重な資料である。

⑵　遺　構

ここでは，遺構図を掲載したものについて概要を記す。その他の遺構については別表「古墓群一覧表」を参照されたい。

○１号墓

古墓群全体の西側寄りに位置し，西に41・35号墓が50cmの間隔を持ってほぼ一直線上に並ぶ。径約50cm，深さ20cm程の円形の土壙内に，骨蔵器（挿図　―　）が納められており，器内には多量の火葬骨片を認めた。

骨蔵器には，底部を欠失するまで使用した軟質陶器の擂鉢を使用している。また外槨施設は，不明であるが付近に径10cm～15cmの偏平で丸い川原石（以下平石と呼ぶ）が散乱していた。

○２号墓

全体の中央よりやや西側，28号墓の南に隣接している。北側の石敷面より約40cm程低い斜面上に位置している。30cm×30cmの方形に近い土壙内が，比較的小型の壺形骨蔵器（挿図○—○）が，蓋と思われる平石を伴って出土した。2号墓付近は，後世の破壊が著しく，不明な点が多い。

○3号墓

墓域の広がりが，東側で一端止まる位置より西へ2.7m，石敷面の南限付近に位置している。径30cm，深さ30cm程の方形の土壙内に壺形の骨蔵器（挿図○—○）が納められていた。器内には，多量の火葬骨片が入っており，足部から頭部へと順を追って納骨されていた。

3号墓は，径2～3cm程度の小石（以下玉石と呼ぶ）が，厚さ10cm程敷き詰められている石敷面（R区）を破壊して構築されている。

○9号墓

径40cm，深さ20cm程の円形に近い土壙内に，径10cm程の川原石が6個，底石として敷かれていた。南側が多少破壊されていたが，覆土中には火葬骨片が認められた。

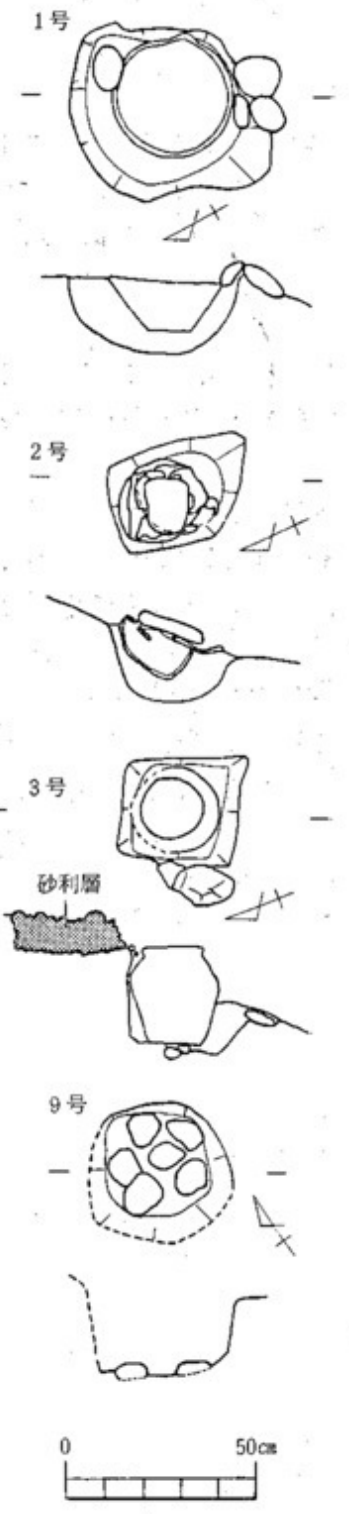
○10号墓

墓域の東側，I・J区の東端に位置する。玉石敷の面を数cm程削り，20cm程の盛土を平石によって葺いた板碑を直立させている。盛土の中には火葬骨片を伴っていた。また，板碑は納部のみであるが，幅20cm，厚さ2cmの緑泥変岩製である。

○12号墓

西の限界から5m付近の石敷区画（D区）の中央に位置し，西に9号墓が，東に50号墓がある。墓拡は，底に径20cm，厚さ10cmの丸い川原石を用い，壁は玉石を粘土質のロームにぎっしり貼りつめて，「小石室」を築いている。底石の直上に，僅かな骨片を認め，墓壙の掘り方は，径40cm・深さ35cm程の円形であった。

12号の墓壙は，径20cm程の長円の川原石（以下区画の外枠の石を「転石」と呼ぶ）による方形の区画内に位置している。断面（遺構全体図参照）によれば，転石の区画内は，黄褐色土（2次的ローム）の上に5～6cmの厚みで玉石を敷き詰め，さらに平石で全面を覆っている。（墓壙の部分には方形に平石はない）また，区画の北側には平石の面より10cm程低い玉



挿図9

石敷の面があるが，この面の広がりは，転石による区画の東西線と平行で，そのコーナーも12号墓壙を中心に据え，二重の区画を呈したと想定できる（19・50号造立の際に区画が侵食されている)。

12号は，転石による正方形の区画内に単独でその墓壙を持ち，さらにその周囲に玉石敷の二重の区画を持っていたと考えられる。また，この区画は北側のローム切断面とも対応している。

○16号墓

12号墓と同様に，玉石による円形の「小石室」を持つ。墓壙は，径30cm，底径20cm，深さ25cmを計る。12号墓のように大きな底石は持たず，底も玉石を敷いている。

○31号墓

径25cm，深さ15cmの素掘りの円形墓壙に，径20cmの平石を蓋として用いている。覆土中に，比較的多量の火葬骨片層を認めた。

○33号墓

2号墓の北東1.3m付近，21号墓西の平石敷の区画（F区）内に位置する。墓壙は，平石による立石の囲いを持つものであり，30cm×25cmを計る。ほんの僅かな骨片を認めるのみであった。

○43号墓

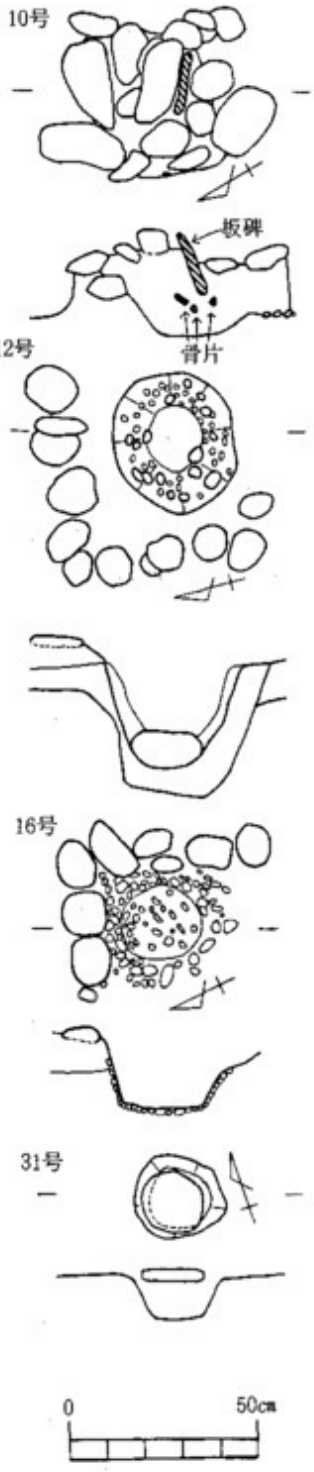
墓域の最も西側の南端に位置している。凝灰岩製の地輪直下に40cm×30cm，深さ約15cmの楕円形の土壙を持ち覆土中に火葬骨片を認めた。

○44号墓

43号墓の北側約60cm，西側のローム切断面を背にして，43号墓と南北に並んでいる。44号墓も，43号墓と同様に凝灰岩製の地輪直下に，長さ35cm，深さ15cmの方形に近い墓壙を持つ。覆土中に比較的多量の火葬骨片を認めた。43・44号は，大きな転石による区画（L区）から外れており，区画外の墓であるが，二基とも遺構の形態が似ており，関係が深いと思われる。

○47号墓

安山岩製の水・地輪下に，径40cm，深さ25cmの円形の墓壙をもっていた。地輪下10cmの所に径20cmの平石を蓋として用い，その平石下に少量の火葬骨片を認めた。



挿図10

○48号墓

凝灰岩製の地輪直下に長さ40cm，深さ20cmの方形の墓壙を持つ。少量ではあるが火葬骨片を認めた。

○49号墓

凝灰岩製の地輪下に，石組みによる墓壙を持っている。墓壙は，平石を底に敷き，径10cm程の丸みを持った石を積み上げて壁を築いている。地輪の底から墓壙までは10cm間があり，地輪下に一つの平石を置いている。地輪は，多少小さめの転石による区画の中央に位置し，区画は平石敷とその下位にあるやや偏平さに欠ける丸石で構成され，正方形を呈していた。49号墓は，五輪塔とその埋葬施設及び区画が最も良好に捉えることができた。

○50号墓

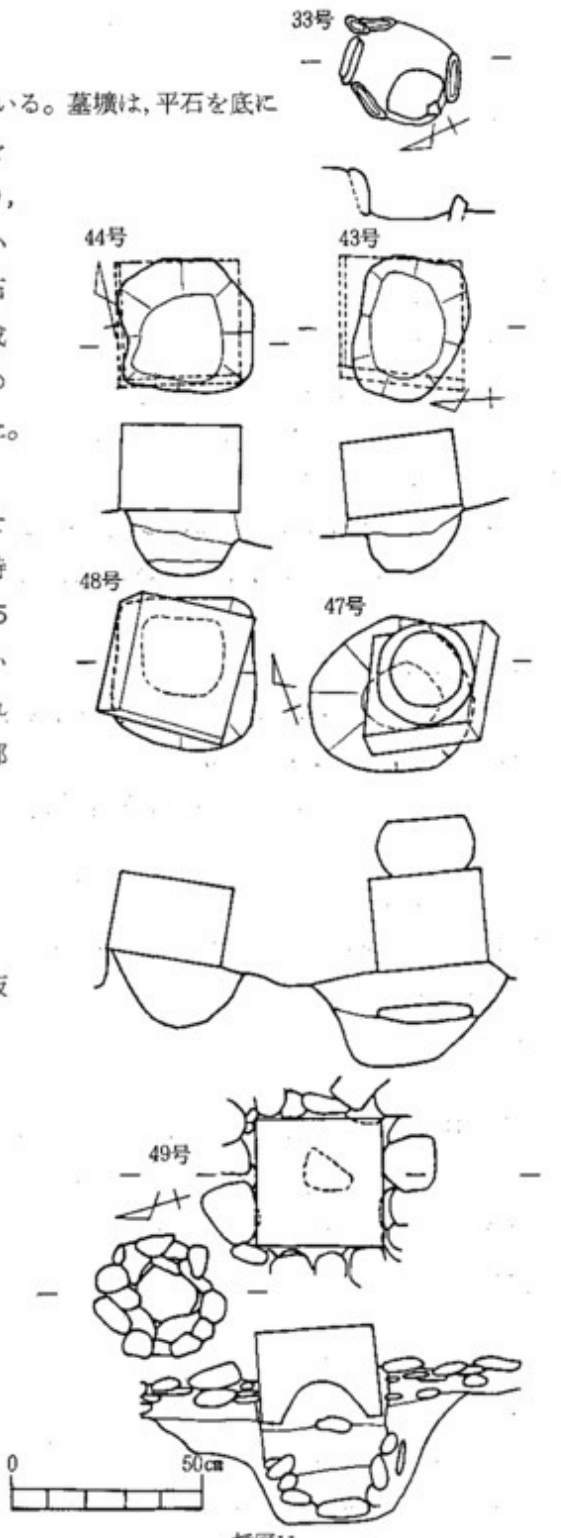
凝灰岩製の小型の地輪下に，平石を敷き詰め，その下位に径35cm，深さ35cmの円形素掘りの土壙を持つ。土壙内には，軟質陶器製の壺形骨蔵器（挿図15—1）が，孔を有す鍋片を蓋にして納められていた。骨蔵器中には，ほんの僅かな骨片しか認められなかった。50号墓は，12号墓の区画（D区）の一部を破壊して造られていた。

○51号墓

高さ20cm程の盛土を持ち，盛土の北側に板碑が，前後を平石によって固定され南向きに立っていた。盛土は平石によって葺かれていると考えられる。板碑は，その南から出土した「貞和二二年四月日」銘挿（図16—3）のものと接合し，紀年銘と遺構の関係が明らかな唯一のものである。また，盛土中にもその近辺にも，関連づけられる骨片は認められなかった。

○52・55号墓

この二基は，最も西側の転石による区画（A区）内に位置している。東側が52号墓，西側が55号墓であり，両者とも板碑が直立し，しかも南北に一部分重なりあって出土した。52号墓は，板碑の南側に径25cm，深さ20cm程の円形の墓壙を持ち，覆土中に火葬骨片を認めた。ま



挿図11

た，板碑（挿図16—6）には，「□□九年五月日」の銘があり，南を向いていた。55号墓の板碑は，52号墓の板碑の南側に数枚重なって出土し，その南側からは軟質陶器製の壺形骨蔵器（挿図15—3）が出土した。板碑と骨蔵器は，円形の素掘りの土壙内にあり，径40cm，深さ25cmを計る。土壙の壁には，部分的に玉石が貼りつけられていた。板碑は柄部のみで塔身部下半の刻線を僅かに残す。また，骨蔵器中に骨片は残っていなかった。52号墓に伴うと思われる骨片が，55号墓の骨蔵器の肩に乗っていたが，また51号墓との関係から52号板碑の年号（九年五月日）は，文永九年（1272），弘安九年（1286），正平九年（南朝1354）のいずれかが該当すると思われる。

○53号墓

49号墓の地輪の南西50cmに位置し，A・B区を壊して造られている。施設は，区画に用いる転石や平石を東西60cm，南北64cmの方形の石囲いを思わせる配列の東辺の南側に，板碑を直立させている。板碑は，角閃石安山岩製の台石を持ち，前後を丸石が支えていた。柄部のみ残存し，南向きに出土している。

○54号墓

東西76cm，南北64cmの転石による方形の区画が25号，54号の区画と想定できる（P区）。円形の浅い墓壙内に，骨片を持ち，板碑を直立させている。板碑は，前後を平石によって支えており，前方の平石は墓壙の蓋石を兼ねている。

○56号墓

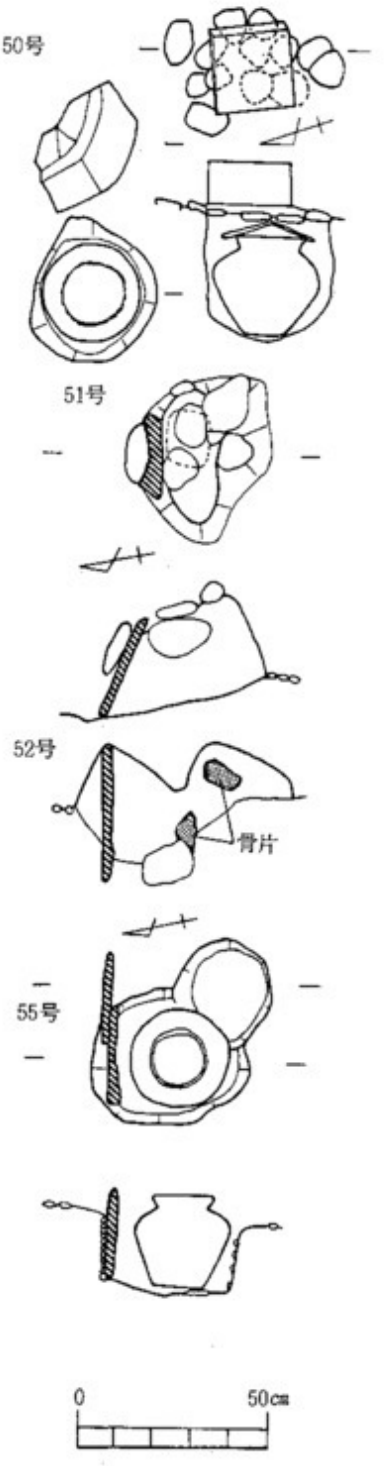
40cm×30cmの浅い楕円形の墓壙の南に，板碑を直立させている。墓壙内には，骨片は認められなかった。板碑は，柄部のみの小片で南向きに出土した。

(3) 遺　物

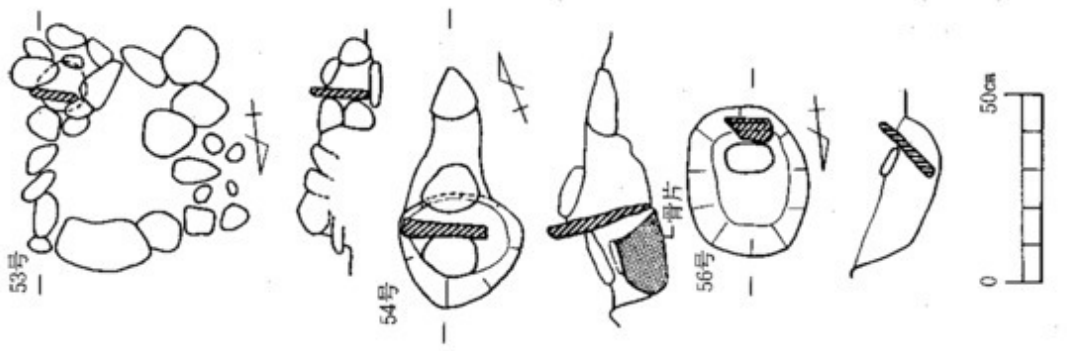
○出土土器

陶磁器類からハニワ片に至るまで出土をみたが，図版に掲載したもののみをここでは取り上げた。

1号墓骨蔵器（挿図14—1）　軟質陶器製鉢で，糸切り後のヘラ調整を認める。内外面とも磨耗が激しく，特に底部内面は同心円状に4cm近い幅で磨り減っている。



挿図12

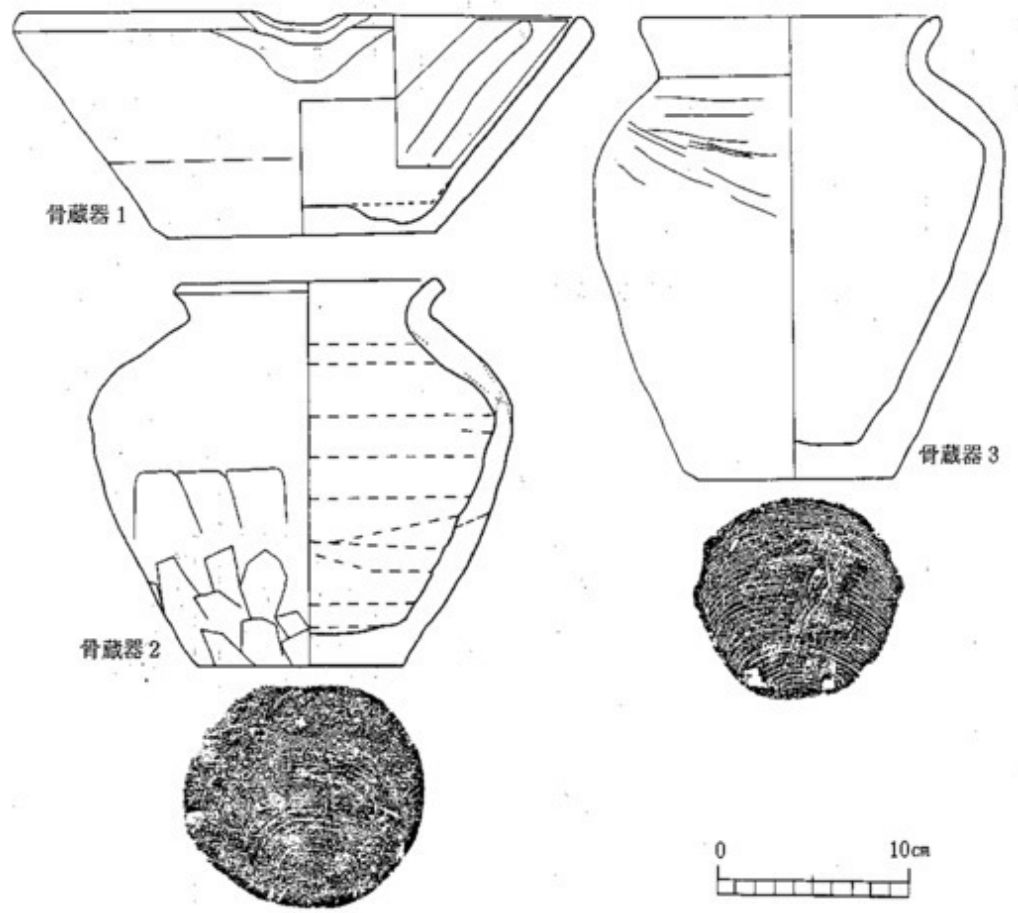


挿図13

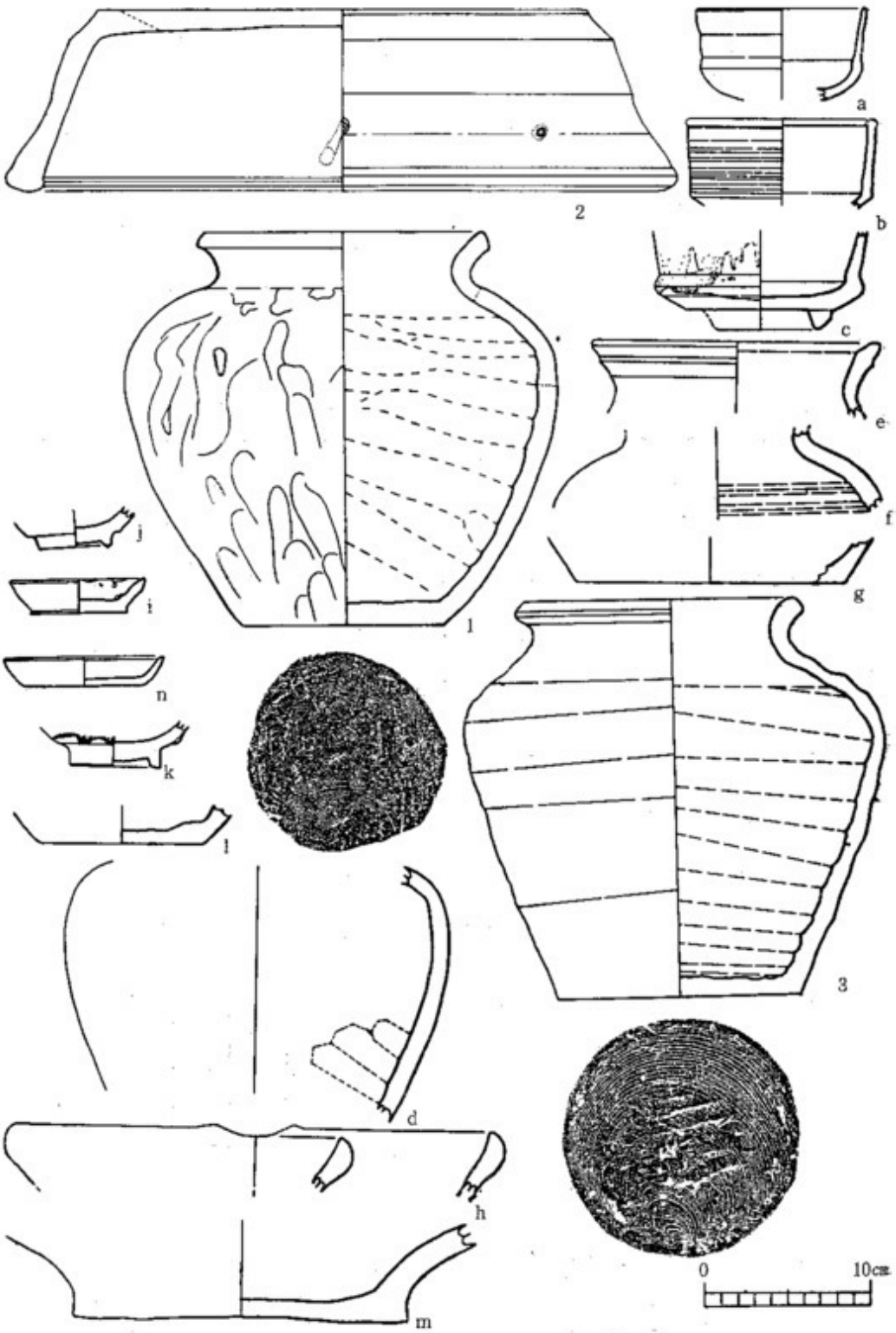
表3 古 墓 群 一 覧 表

	墓拡 石組	墓拡 素掘り	墓拡 その他	規模 (cm)	遺物	骨	備考		墓壙 石組	墓壙 素掘り	墓壙 その他	規模 (cm)	遺物	骨	備考
1		円形		径50深20	骨蔵器	有		20			骨片布分	東西60南北40の広がり	なし	有	平石敷の方形の空間部分と骨片の広がりが重複する
2		方形		30×30 深20	〃	有		21	○?			径45深25	なし	有	玉石と骨片が散乱していた破壊が激しい
3		方形		35×35 深20	〃	有		22		円形		径25深10	なし	有	破壊が進み詳細不明
4		方形		40×40 深20	なし	有		23		円形		径25深25	なし	有	土壙を平石玉石が淵取っている
5		方形		30×30 深20	なし	有		24		方形		30深5	なし	有	玉石が方形に空間をつくる
6		円形(?)		径25深10	なし	有	三角形の形状を思わせる	25		円形		径25深15	なし	有	
7		円形		径25深20	なし	有	安定した造りである	26		楕円形?		径65深20	なし	有	付近より「皇宋通宝」(1039年)が二枚出土
8		楕円形		径40×30 深15	なし	有	プランが明確でない	27		円形		径30深15	なし	有	
9		円形		径40深20	なし	有	5石の底石を持つ	28			骨片布分	径60の広がり	なし	有	付近より「文□三年四月日」銘板碑出土
10			盛土板碑	20の高さの盛土	板碑	有	直立板碑	29		方形?		30×?深25	なし	有	骨片の他炭化物も含む
11	○			内径25×30深20	なし	有	墓壙を中心に平石を方形に並べた空間を持つ	30		方形		30深20	なし	有	
12	○			径35深20	なし	有		31		円形		径25深15	なし	有	平石による蓋をもつ
13		円形		径25深15	なし	有	破壊が激しく玉石による「小石室」とも考えられる	32		楕円形		径20×30 深15	なし	有	しっかりした造りである
14		方形	石囲い	内径40×?深20	なし	有	転石の石囲い内に方形の土壙を持つ一部破壊される	33			石囲い	径30深10	なし	有	平石を立てている
15			骨片分布	径50の広がり	なし	有	骨片炭化物の分布範囲	34		円形		径25深15	なし	有	
16	○			径30深25	なし	有		35		円形		径35深25	なし	有	深さが一定でない
17		円形		径20深15	なし	有	土壙を5石の石が淵取る安定した造り	36		円形		径20深20	なし	有	
18		円形		径25深10	なし	有	土壙を平石がとりまいている	37		方形		?深15	なし	有	破壊が激しい
19		円形		径40深10	なし	無	区画される玉石敷内にある	38		方形		30深12	なし	有	
								39		楕円形		径25×30 深10	地輪	有	地輪下の墓壙である
								40		方形		25×25 深20	なし	有	
								41		楕円形		径30×40 深20	なし	有	

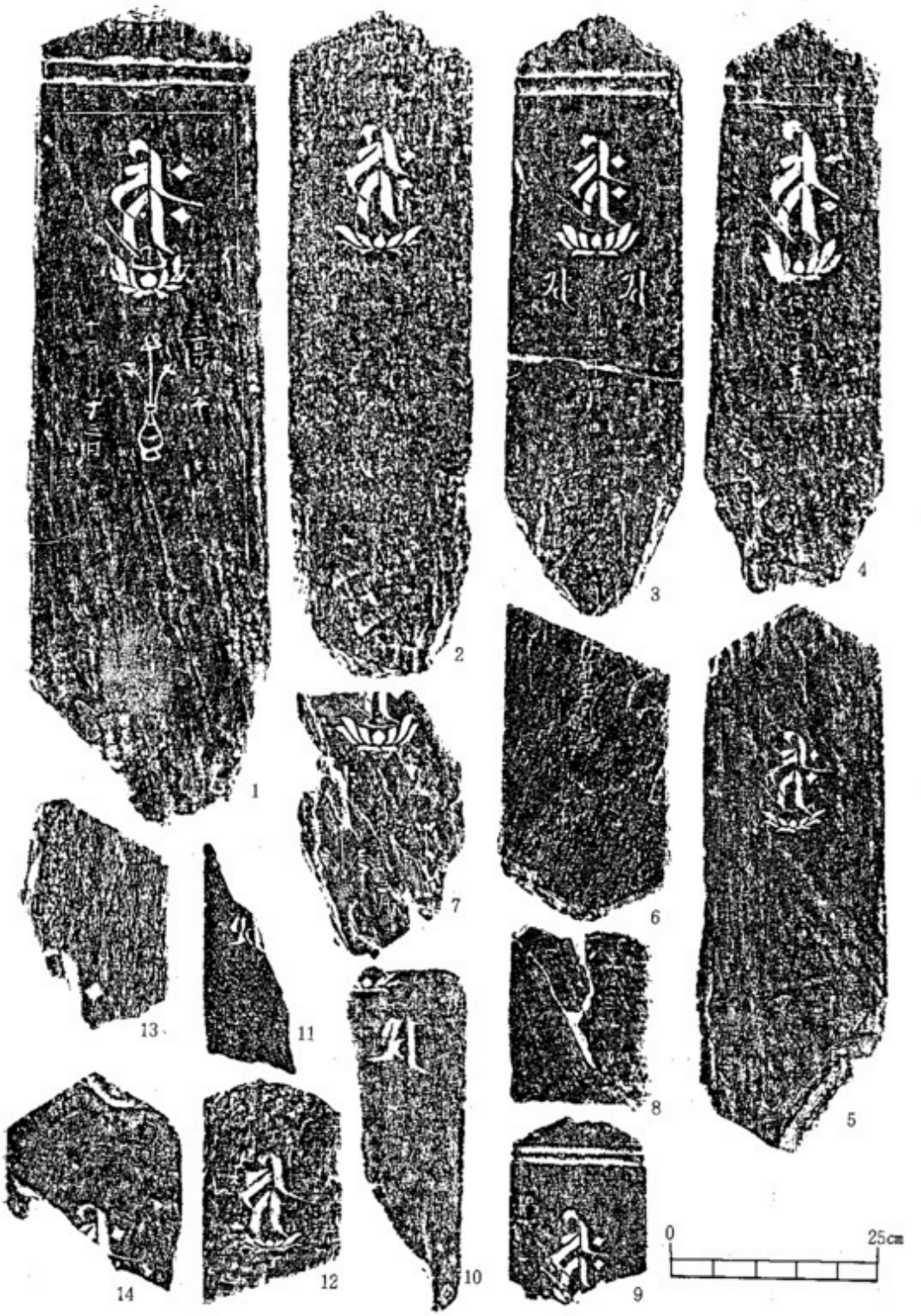
	墓壙			規模	遺物	骨	備考
	石組	素掘り	その他	(cm)			
42		楕円形		径30×40 深50	なし	有	
43		楕円形		径30×40 深15	地輪(擬)	有	地輪下墓壙
44		方形		35×35 深15	地輪(擬)	有	地輪下墓壙
45		円形		径30深8	地輪(安)	有	
46					地輪(擬)	無	墓壙，骨片その他は認められていない
47		円形		径40深25	水・地輪(安)	有	水・地輪下，墓壙
48		方形		35深15	地輪(擬)	有	地輪下墓壙
49	○			内径30 深25	地輪(擬)	有	地輪下石組み墓壙
50		円形		径35深35	地輪・骨蔵器	有	地輪下骨蔵器＋墓壙
51				高さ20の盛土＋平石葺	板碑	無	板碑に（貞和二十二年三月日）銘
52		円形	板碑	径25深15	板碑	有	板碑前に土壙（九年五月日）銘
53			板碑	方形の石囲い	板碑	無	
54		円形	板碑	径30深20	板碑	有	土壙内に板碑を立てる
55		円形	板碑	径40深25	板碑	無	同一土壙内に板碑骨蔵器をもつ
56		円形	板碑	径50深15	板碑	無	土壙に板碑を立てている
57			骨片分布	径30の広がり	なし	有	墓壙を持たない
58			配石		なし	無	転石等による配石，性格不明
59		円形		径20深10	なし	有	



挿図14 骨 蔵 器 実 測 図



挿図15 中 世 古 墓 群 出 土 遺 物 実 測 図



挿図16　板　　碑　　拓　　影

外面は，ヘラ削り後横ナデによって整形し，色調は黄褐色を呈している。器高は，一定でなく雑なつくりで，底部が一部欠失している。

2号墓骨蔵器（挿図14—2） 一般に金井焼と言われているものに近似し，左回転のロクロ使用。肩部に接合痕が認められる。肩までは，内外面とも丁寧にロクロ挽きされているが，肩から下半外面はヘラ削り痕を，内面はロクロ目の凹凸を残す。色調は，灰褐色で若干燻しを持つ。底部に糸切り痕を認める。

3号墓骨蔵器（挿図14—3）の，胎土中に夾雑物の多い軟質陶器製壺である。内外面とも磨耗が激しく，口縁部は一部欠損している。底部に糸切り痕，口縁部内外面にわずかにナデ整形を認める。他の骨蔵器に比して，胴長で器肉も厚い。色調は，淡褐色を呈し，一部黒味を持っている。

50号墓骨蔵器（挿図15—1）は，左回転のロクロ使用。口縁部内外面は丁寧にロクロ挽きされ，口縁下外面は縦方向のヘラ削りを行っている。内面は，荒いロクロ痕を認める。全体に黒灰色を呈し，燻し味を持つ。また，糸切りによる離しを行っている。50号墓骨蔵器の蓋として（挿図15—2）の軟質陶器製の鍋がある。$\frac{2}{3}$程欠損するが，八個の孔が相定できる。口唇部から内面は，丁寧にロクロ挽きされ，外面胴部はナデ，底部直上は横方向のヘラ削りを行っている。孔は，内面から下向きに棒状工具によって穿ち広げている。色調は黒褐色，底部に簀の子状の板目痕がある。

（挿図15—3）は，55号墓骨蔵器（軟質陶器）である。黒味を帯びた灰褐色で，燻しがきいている。外面整形は，口縁から肩までが横ナデ後縦方向にナデ，その下半は不充分な縦方向のナデを行っているため凹凸が激しい。内面は，荒いロクロ目を持ち，底部に糸切り痕を認める。巻き上げ作り後，左転回のロクロを使用している。(1)，(3)は，2号骨蔵器と同質の焼である。

（D，E，F，G，H）は軟質陶器に包括されるものである。（D）は，内外面とも摩耗が著しいが，内面に指頭によるナデ，ロクロ目が僅かに認められる。淡褐色を呈し，砂粒を含み，$\frac{1}{4}$程の壺片である。（E）は，口縁に段を設け，ロクロ挽きしている。内面はナデを施している。淡褐色で（D）の胎土に近似しており同一固体の可能性がある。（F）は，紫色を帯びた暗褐色を程し金井焼とは異質である。外面は，丁寧にロクロ挽きされているが，内面は荒いロクロ目を残す。夾雑物が多い灰色の素地を持つ。（G）は，擂鉢底部小片で，内面は摩耗している。外面はヘラ削りを認め，黄褐色である。（H）は，片口を持つ鉢の口縁部小片である。器表面の剝落が激しい。黒褐色を呈し，夾雑物を多く含んでいる。

（I）は，一般に土師質土器と言われる焼の小皿である。内外面にロクロ挽きの痕跡を持ち，底部は糸切り後，ヘラ削り調整している。灯明皿として使用したらしく，内面に煤を認める。$\frac{1}{2}$程欠失し，淡褐色である。

（a，b，c）は，施釉陶器の香炉である。（a）は，白灰色の素地で内外面に黒釉を施している。（b）は，鉄釉と思われる黄褐色の釉を内外面に施し，素地は白褐色である。（c）は，織部焼に似ている。琥珀色透明の釉を基調とし，外面は緑色に発色した部位があり，素地は白褐である。これらは，全て小片である。

（J，K）は，施釉陶器茶碗底部片である。（J）は，白色の素地に黒釉を施し，（K）は，内面に黒色と暗茶色の釉が斑状に発色している。素地は白色で，両者とも硬質である。

（N）は，白磁小皿で約½程欠失している。素地は純白で硬い。口唇部内側は，摩耗して素地が表出し，その部分に煤のようなものが付着している。

（L，M）は，いずれも常滑焼と考えられる。（L）は，壺底部小片で，良く焼き締まっている。底内面は，指頭による押え，ナデを行い，外面はヘラ削りである。色調は，くすんだ紫褐色で，素地は夾雑物が多い。（M）は，内面紫褐色で外面は茶褐色を呈し，素地は，夾雑物が多い。全体に雑なつくりであるが，良く焼き締まっている。

○その他の遺物

古銭は，26号墓東より出土。皇栄通宝（初鋳1039年北宋銭）で，裏面を背に二枚が癒着（ゆちゃく）している。

表4　板　碑　一　覧　表

No.	種　子	銘　文	寸　法 (cm)	備　考
1	キリーク	元亨一年十一月十三日	99×26，29.5	
2	キリーク	——	80.5×22.5	
3	キリーク・サ・サク	貞和二年四月	72×20.5，21.5	51号墓に伴うもので，原位置を留める。
4	キリーク	徳治元年七月日	69×19.5，22	
5	キリーク	——	66×21.5，23	
6	——	□九年五月日	39×20，21	55号墓に伴うもので，原位置を留める。
7	キリーク	貞和三年二月日	32.5×20	
8	——	文(ぶ)治二年二月□日	22×17	
9	キリーク	——	25.5×16.5	
10	キリーク・サ	——	41.5×14.5	
11	サ	——	27.5×11	
12	キリーク	——	28×16.5	
13	キリーク	——	28×18	
14	キリーク	——	26.5×21	

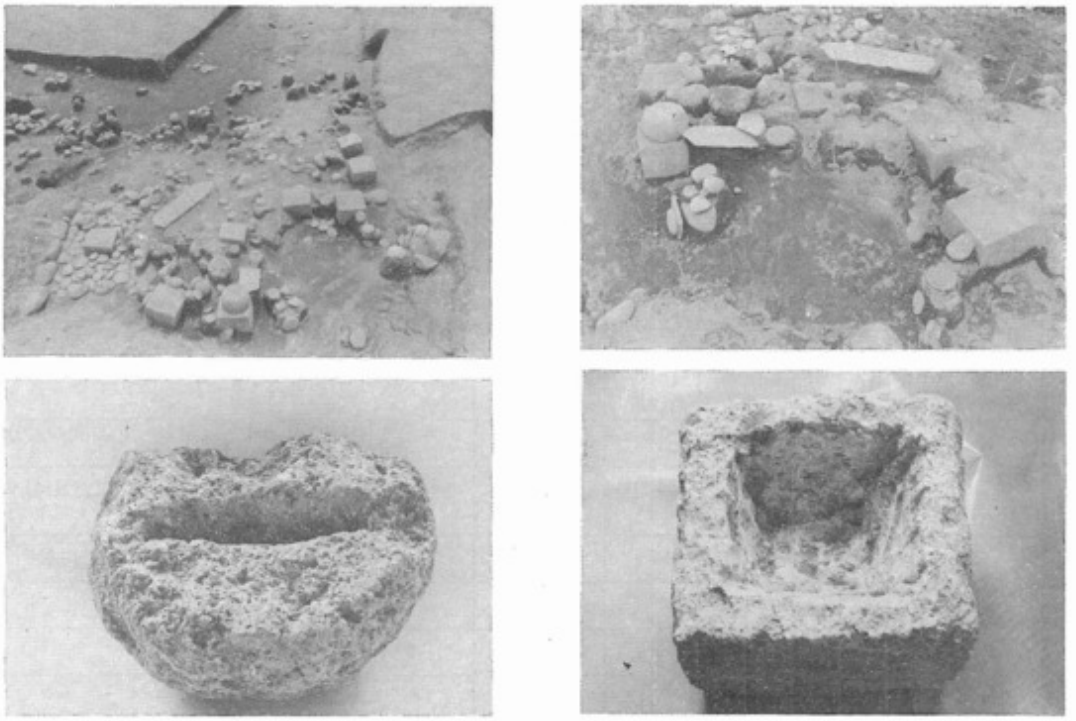
（寸法は，全長×額部幅，下幅）

小　結

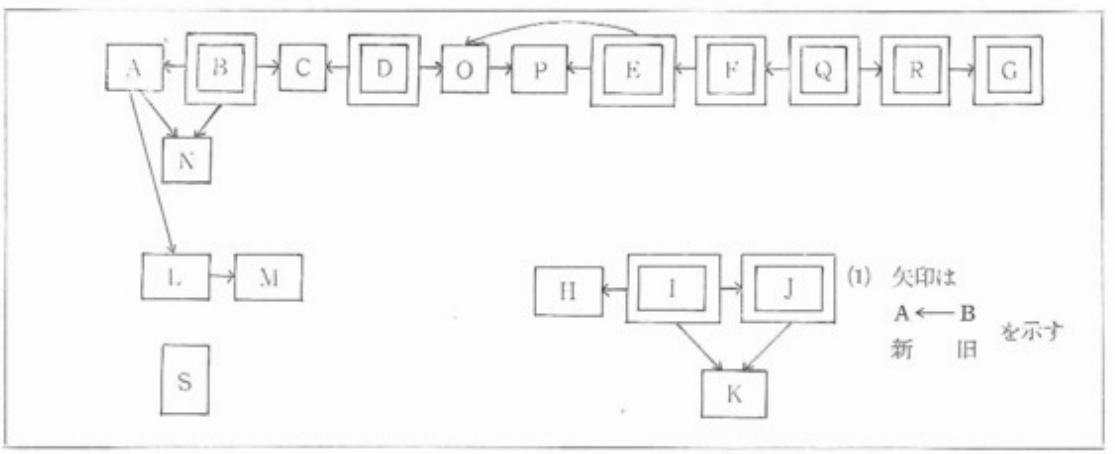
今回の調査により，中世古墓の埋葬形態の多様性と，埋葬区画の規格性及びその変遷を知ることができた。整理途上であり充分な検討は行ない得ないが，以下がその成果である。

①個々の埋葬施設についてみると，従来言われてきた，「板碑は主として供養塔である」との考え方に対して，ここでは，板碑を墓壙の直上に立てて「墓標」として用いたと思われる例（10号・51号・54～56号・58号墓）が認められた。また，五輪塔を「墓標」にしたと考えられるものも多くあった。さらに，1300年代頃を中心にして板碑が墓標として使われていると思われるのに対して，五輪塔はその前後の時期に使用されている傾向が認められた。

②埋葬施設は，石組みをして小石室を作った二重の正方形区画を持つものから，素掘りの土壙による埋葬施設を複数持つ長方形のものに移って行く傾向が認められた。また，長方形で複数の



挿図17 中 世 古 墓 群 の 遺 物



区 画 新 旧 関 係

埋葬施設を持つものは，埋葬施設の配列に規則性が認められ，区画を作る時点において複数の埋葬施設を意識して設計されたと考えられる。（区画内における埋葬箇所は，一基のものは区画中央に，複数のものは区画の南北の中間に等間隔に並んでいる。）

③骨蔵器５点は全て，新しい区画ないし区画外より出土しており，比較的古い区画の埋葬施設は小石による小石室のものが多い。

④遺物の点から古墓築造の年代をみると，板碑は，疑問の残る一点を除くと，いづれも1300年代のものである。五輪塔は多く出土しているが，動いていない地輪はA区・L区外に多い。紀年

表5

区＼項目	規模（外区の数値）	奥行＼幅	構造 石組	構造 石敷	使用石材 転石	使用石材 平石	使用石材 玉石	構成墓	後設墓	備考
A	★ 215×105		○	○	○	○		4，52		石組列，掘り方により設定。51号墓に伴って，貞和四年（1348）銘を有する完形の板碑が出土。
B	★ 118×122		○	○	○	○		49		外区は不詳。石敷，層序により設定。49号墓は内側りのある地輪8の下に位置する。
C	112×128		○	○	○		○	19		石組列，北側の掘り方により設定。
D	142×149 (212×266)		○	○	○	○	○	12		石組列，北側の掘り方により設定。O区のものとは質を異にするが，他よりも長めの転石を用いる。
E	★ 96×144，190 (—×266)		○	○	○	○		7，20		石組列，平石の範囲，北側の掘り方及びF区との切り合い関係により設定。転石列に曲がりがあり，そこからE₋₁・E₋₂区に区別することも可能。
F	(272×324)			○		○	○	33		33号墓を中心になる墓と仮定し，北西隅の掘り方により設定。
G	184×176 (260×252)					○		22，34		石敷，掘り方により設定。平石の上には山石が積まれており，北群の東西の石列をなしていた。
H						○				
I	(—×232)		○	○		○	○	11，24		
J	(—×232)						○	10，37		
K							○			
L	★ 260×140		○	○	○	○		14，29 32，40		石組列と4基の配列により設定。
M								1，35 41		3基の配列により設定。
N	60×64				○	○		53		平石及び小ぶりの転石を積み上げて区画している。骨片は伴わないが，板碑が直立していた。
O	148×156		○	○	○	○	○	50		石組列，石敷により設定。地輪9と骨蔵器4から成る。
P	★ 76×64		○	○	○	○		25，54		石組列により設定。54号墓は，骨片を含むピット上に板碑が直立していた。
Q	— (—×332)			○		○	○	21		
R	—×144 (—×296)			○		○	○	13		13号墓が主体。G区とは平石敷の並びに違いが見られる。G・Q区とは北の掘り込みが異なる。
S				○		○	○			

（注） ● ★印は，区画を構成している転石の内側で計測したもの。これは，大ぶりの転石による区画では，石の外側よりも内側の方がより直線的であるため。
● 123……アンダーライン付の数値は，A・B区を例にして，古墓の土壙が区画の中央に位置すると仮定して設定した数値である。
● 使用石材の区別は，やや細長い川原石を「転石」，扁平な円形の川原石を「平石」，直径3㎝以下の川原石を「玉石」とした。

銘は無いが，南北朝から室町時代のものの特徴を留めるものが多い。五輪塔の用材については，安山岩のものは区画外に多く，凝灰岩のものは区画内に多く残っていた。また，多数の五輪塔残片も多くは凝灰岩であった。

⑤古墓群築造の年代を，区画の切り合い関係と紀年銘のある板碑（51号墓の貞和四年—1349）を中心にみると，51号→A区→B区の順に古くなる。逆に，51号←A区→L区→M区とL区外の五輪塔の順に新しくなる。区画の概要と新旧関係は以下のとおりである。（23ページ参照）

（V） 住 居 跡

9軒の竪穴住居跡が検出された。そのうち，縄文土器を伴うものは1軒，土師器を伴うものは8軒であった。しかし，土師器を伴うもののうち2軒は，調査区域外にかかるため，完掘していない。

(1) 竪穴住居跡

本遺跡地より検出された竪穴住居跡は，下表のとおりである。

表6

住居番号	規模（m）〈東西×南北〉〈壁高（cm）〉	形状	壁名・走向	竈	遺物 土師器	遺物 須恵器	遺物 その他	備考
1	3.26×4.26 〈46〉	矩形	西壁・N—1°—E	東壁南寄り二つ有	甕 脚付甕			甕は竈内
2	2.86？×2.62 〈16〉	矩形	東壁・N—4.5°—W	東壁南寄り	坏 甕			貯蔵穴有
3	？×3.60？ 〈20〉	？	東壁・N—4°—W	東壁南寄り	坏 甕			貯蔵穴有 甕は竈内
4	4.60？×4.70？ 〈30〉	矩形？	西壁・N—15.5°—W		坏 甕		砥石	
5	3.70×？ 〈26？〉	？	西壁・N—6.5°—W	東壁？（痕跡）	坏 甕	蓋 提瓶	砥石	7号住居跡と重複
6	？×3.36 〈36？〉	？	西壁・N—47°—E					
7	？ 〈26？〉	？	西壁・N—6.5°—W		甕			5号住居跡と重複
8	3.80？×2.88 〈14〉	矩形	西壁・N—9.5°—E					
9	2.92×2.88 〈24〉	矩形	西壁・N—5°—W				縄文土器 石器	炉跡無

(2) 遺 物

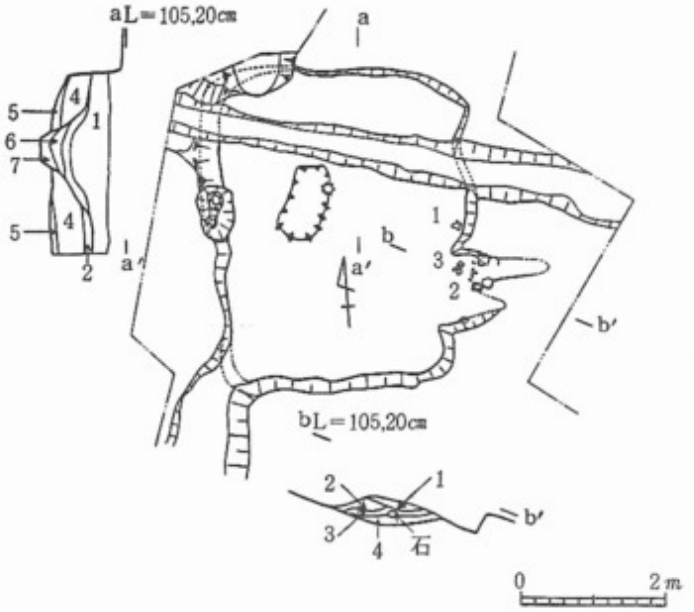
本遺跡地の竪穴住居跡より出土した遺物のうち，各住居跡の床面付近から出土したものは，下表のとおりである。なお，6号及び8号住居跡からは，遺物が出土しなかった。

表7

	遺物番号	器種	法量（cm）	技法等	胎土	備考
1号住居跡	1 挿図19—1 図版7—1	土師器・脚付甕	底径 8.0	底部は，ロクロによる横ナデ整形 体部は，縦方向のヘラ削り整形	砂粒含有	色調は薄茶色焼成良好，体部の上半にススト付着
	2 挿図19—2 図版7—2	土師器・甕	口径12.2	口縁部及び体部上半はロクロによる横ナデ整形，体部下半は縦方向のヘラ削り整形，全体に歪みを持つ。	砂粒含有	色調は茶褐色焼成良好
	3 挿図19—3 図版7—3	土師器・甕	口径18.0	口縁部はロクロによる横ナデ整形 体部はヘラ削り整形	若干の砂粒含有，緻密	色調は赤褐色，焼成普通，ススト付着
2号住居跡	1 挿図20—1 図版7—4	土師器・坏	器高 4.6 口径12.3	ロクロによる横ナデ整形 口縁部は内弯する	緻密 少し砂利含有	色調は茶褐色焼成良好
	2 挿図20—2	土師器・坏	器高 4.8 口径14.1	口縁部はロクロによる横ナデ整形 不安方向のヘラ削り整形	若干の砂粒含有	色調は茶褐色焼成良好
	3 挿図20—3 図版7—5	土師器・甕	口径20.3	ロクロによる横ナデ整形 内面はヘラによる整形	小砂粒含有	色調は暗褐色焼成良好，表面，部分的に黒味を帯びている
	4 挿図20—4 図版7—6	土師器・甕	口径16.4	口縁部はロクロによる横ナデ整形 体部外面は縦方向のヘラ削り整形，内面は縦方向のヘラ整形	緻密 小砂利含有	色調は茶褐色焼成良好
3	1 挿図21—1 図版7—7	土師器・甕	口径22.4	口縁部は内外面ともロクロによる横ナデ整形，口縁部下半は，荒いヘラ削り整形	砂粒含有	色調は赤褐色焼成良好

	遺物番号	器種	法量 (cm)	技法等	胎土	備考
号居住跡	2 挿図21—2 図版7—8	土師器 ・坏	器高 3.7 口径12.6	底部は，不定方向のヘラ削り整形 若干の歪みを有す	砂粒及び石英，雲母質含有	色調は赤褐色焼成良好
	3 挿図21—3	土師器 ・坏	口径12.6	口縁部はロクロによる横ナデ整形 底部はヘラ削り整形	緻密細砂粒含有	色調は黄味を帯びた茶褐色焼成良好
	4 挿図21—4	土師器 ・甕	口径22.2	口縁部は内外面ともロクロによる横ナデ整形，特に内面はていねいなナデ 体部はヘラ削り整形	砂粒含有	色調は淡茶褐色焼成良好
4号住居跡	1 挿図22—1	土師器 ・甕	口径23.0	口縁部はロクロによる横ナデ整形，特に内面はていねいなナデ。体部は，外面斜方向ヘラ削り整形，内面はヘラ整形	砂粒含有	色調は外面茶褐色，内面赤褐色，焼成良好
	2 挿図22—2	土師器 ・甕	口径19.6	口縁部は内外面とも，ロクロによるていねいな横ナデ整形，肩部はヘラ削り整形	砂粒，細砂粒含有	色調は灰色を帯びた茶褐色，焼成良好
	3 挿図22—3	土師器 ・甕	底径 3.8	底部は内面ナデ，外面ヘラ削り整形	砂粒を多く含有	色調は灰褐色焼成良好
	4 挿図22—4 図版7—9	土師器 ・甕	口径19.0	口縁部はロクロによる横ナデ整形，内外面とも部分的にヘラ痕有。体部外面は斜方向にヘラ削り整形	砂粒含有	色調は灰褐色焼成良好
	5 挿図22—5 図版7—10	土師器 ・甕	器高 3.1 口径10.4	口縁部は横方向ヘラ削り整形，底部は外面ヘラ削り整形，内面ナデ	砂粒含有	色調は茶褐色焼成良好，全体に器面の摩耗がはげしい
	6 挿図23—2 図版7—11	砥石	長さ 6.6	三面にわたって，よく使いこんでいる。 小型で携帯用？	色調は灰白色 凝灰岩質の砂岩？	
	7 挿図23—3	石製模造品	長さ 3.1+α 刃幅 0.8 柄幅 0.4 厚さ 0.2～0.3	刃先はするどい。使用痕らしい刃こぼれ有。全面研磨されている。	色調は暗緑色	
5号住居跡	1 挿図22—6 図版8—1	土師器 ・甕	口径22.0	口縁部はロクロによる横ナデ整形，頸部にヘラ先による痕跡有，体部は，内面にヘラ痕有。外面縦方向ヘラ削り整形	砂粒含有	色調は淡褐色焼成良好
	2 挿図22—7	土師器 ・甕	口径21.0	口縁部は内外面ともロクロによる横ナデ整形，体部外面は縦方向ヘラ削り整形	砂粒，細砂粒含有	色調は茶褐色焼成良好
	3 挿図22—8 図版8—2	土師器 ・甕	底径 5.8	体部は内面横ナデ整形，外面縦方向に荒いヘラ削り整形，底部内面に指先で押えた跡有	細砂粒を少し含有	色調は暗褐色焼成良好
	4 挿図22—9	土師器 ・甕	口径25.6	口縁部から体部上半にかけて，内面ていねいな横ナデ，口縁部外面横ナデ，体部外面は縦方向ヘラ削り整形，内面は荒いナデで凸凹有	砂粒，細砂粒含有	色調は内面灰褐色，外面暗褐色，焼成良好
	5 挿図22—10	土師器 ・坏	器高 3.9 口径11.0	口唇部はていねいな横ナデ，底部は不定方向のヘラ削り整形	細砂粒含有	色調は茶褐色焼成良好
	6 挿図22—11	土師器 ・甕	口径15.4	体部外面は縦方向のヘラ削り整形 横方向に幅約1cmの帯状の凸凹有	砂粒，細砂粒含有	色調は内面灰褐色，外面暗褐色，外面にススが多く付着，焼成良好
	7 挿図22—12	土師器 ・坏	器高 4.0 口径12.8	口縁部は内外面横ナデ整形，体部は内面横ナデ，外面ヘラ削り整形	砂粒少し含有	色調は茶褐色焼成良好
	8 挿図22—13	土師器 ・甕	口径13.4	口縁部は内面ナデ，外面横ナデ，体部は内面ナデ，外面ヘラ削り整形	砂粒含有	色調は茶褐色焼成良好
	9 挿図22—14	土師器 ・坏	器高 3.4 口径11.2	内面はナデ，ヘラ痕跡有。外面は不定方向にヘラ削り整形	砂粒含有	色調は茶褐色焼成良好
	10 挿図22—15	土師器 ・甕	口径22.8	内面はナデ，外面口縁部は横ナデ，体部は横方向ヘラ削り整形	砂粒含有	色調は茶褐色焼成良好
	11 挿図21—16 図版8—7	灰釉陶器	底径5.4	ロクロによる横ナデ整形 底部内面に若干緑色を帯びた黒褐色の釉がかけられている。	白色の陶質粘土	色調は緑色を帯びた黒褐色 (5号住居付近堆土中出土)

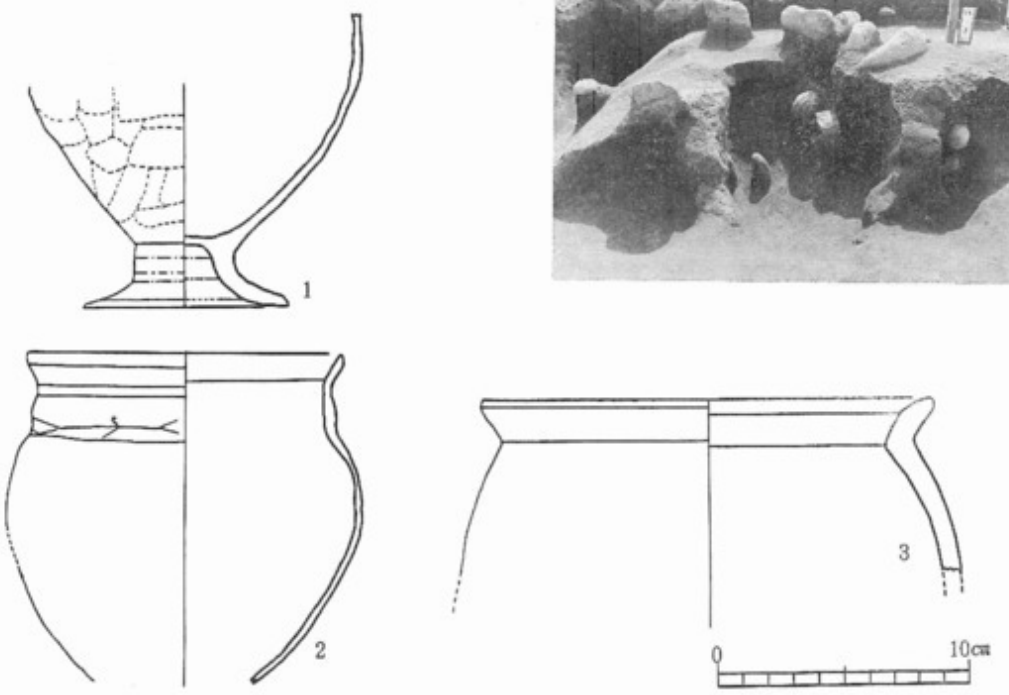
	遺物番号	器種	法量 (cm)	技法等	胎土	備考
居跡	12 挿図22—17 図版8—6	須恵器 ・提瓶		口縁部はナデ，口縁部接合は，ハケ目及びたたき整形後に行っている。体部は，内面にたたき目が残る。外面はロクロによるナデ及びヘラ使用。	砂粒，細砂粒含有	色調は淡青灰色焼成良好
	13 挿図22—18	土師器 ・甕	口径20.8	口縁部内面はていねいなナデ，外面は横ナデ。体部内面は横ナデ，外面は縦方向に荒いヘラ削り整形。全体に器面が荒い	砂粒，細砂粒含有	色調は茶褐色焼成良好
	14 挿図22—19	土師器 ・甕	口径22.6	口縁部はロクロによる横ナデ整形，体部は外面縦方向ヘラ削り整形，内面にヘラ痕跡有	砂粒含有	色調は灰褐色焼成良好
	15 挿図22—20 図版8—13	須恵器 ・蓋	口径23.2	外面にヘラ削り痕有 内面に不連続の凸凹有，若干歪み有	砂粒含有	色調は淡灰色
	16 挿図22—21 図版8—4	土師器 ・坏	器高 6.6 口径17.2	口縁部は横ナデ底部，内面はヘラ整形，外面は横方向のヘラ削り整形	砂粒含有	色調は茶褐色底部にスス付着，焼成良好
	17 挿図22—22	土師器 ・甕	口径17.0	口縁部は横ナデ整形，頸部にヘラ先による段差有，体部は縦方向ヘラ削り整形	砂粒，細砂粒及び小石少し含有	色調は暗褐色焼成良好
	18 挿図22—23	土師器 ・坏	器高 3.5 口径13.8	内面はナデ，外面は，口縁部から体部上半にかけてナデ，体部下半は不定方向にヘラ削り整形	細砂粒含有	色調は淡茶褐色焼成良好
	19 挿図23—1	砥石	長さ 4.1+α	三面に使用痕有，小型，われていて小片のために元の長さ不明	色調は灰白色 (5号住居跡付近黒土中出土)	
7号住居跡	1 挿図23—4 図版8—5	土師器 ・甕	口径23.0	口縁部及び体部内面はロクロによる横ナデ整形，体部外面は斜方向ヘラ削り整形，頸部にヘラ先による整形痕有	砂粒，細砂粒含有	色調は暗灰褐色焼成良好
	2 挿図23—5 図版8—8	土師器 ・甕	口径22.6	口縁部内面はロクロによる横ナデ整形，外面にはヘラ痕跡有，体部は縦方向ヘラ削り整形，体部内面はなだらかな流状形	砂利含有	色調は暗黄土色，スス付着，焼成良好
	3 挿図23—6	土師器 ・甕	口径22.6	口縁部はロクロによる横ナデ整形 体部は斜方向ヘラ削り整形	砂粒含有	色調は暗茶褐色土焼成良好
9号住居跡	1 挿図24—5 図版8—9		石斧	先端に使用痕有		頁岩
	2 挿図24—6 図版8—19		剝片石器	へりの部分にトリミングを加えて，使用している		頁岩
	3 挿図24—7 図版8—11		剝片			頁岩
	4 挿図24—8 図版8—12		剝片			頁岩
	5		縄文土器 (小片)			胎土に繊維含有，色調，暗褐色



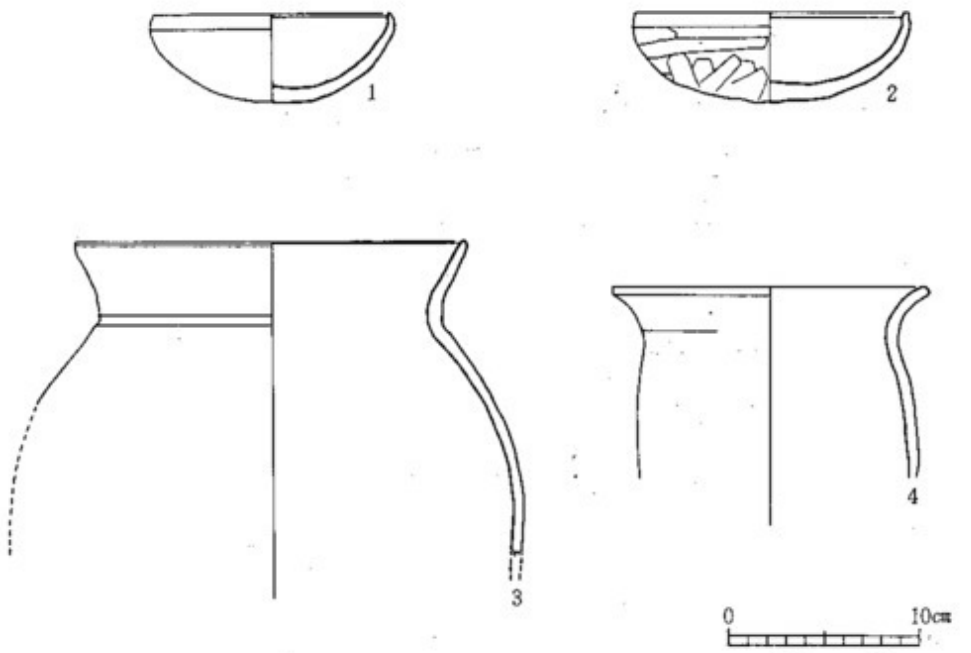
1層　褐色土，砂，質，C二ツ岳系軽石を含む。
2層　黒色土，砂質，B軽石を含む。
3層　2層とほぼ同じ，2層よりよごれていない。
4層　黒色土，C，二ツ岳軽石を含む，少し粘性あり。
5層　黒，褐色土，C，二ツ岳系軽石，ローム粒を含む少し粘性あり。
6層　淡褐色土，ローム粒を若干含む。
7層　黄褐色土，C軽石，φ5mm位のロームブロックを含む，粘性あり。

挿図18

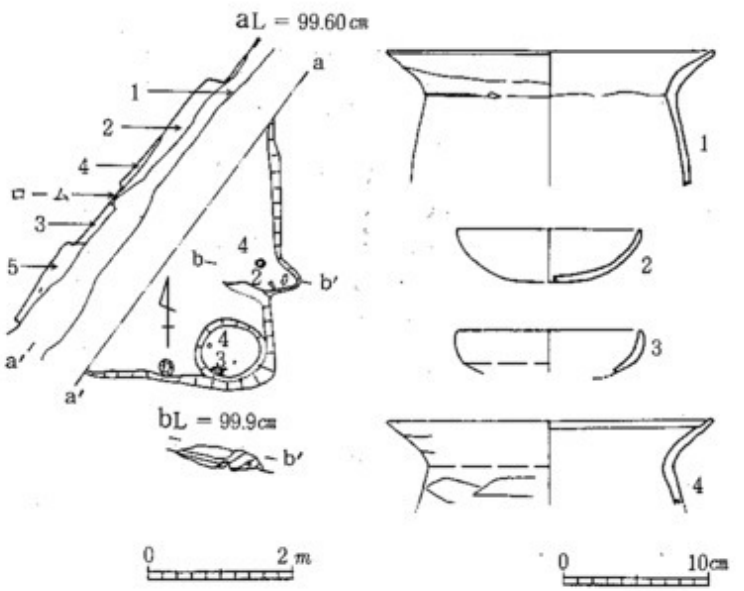
竈断面　1層　淡褐色土，焼土粒，C，二ツ岳系軽石を含む。
2層　1層にローム粒を含む。
3層　2層よりもやや焼土粒を増す。
4層　赤褐色土，焼土とローム粒の混土層。



挿図19



挿図20

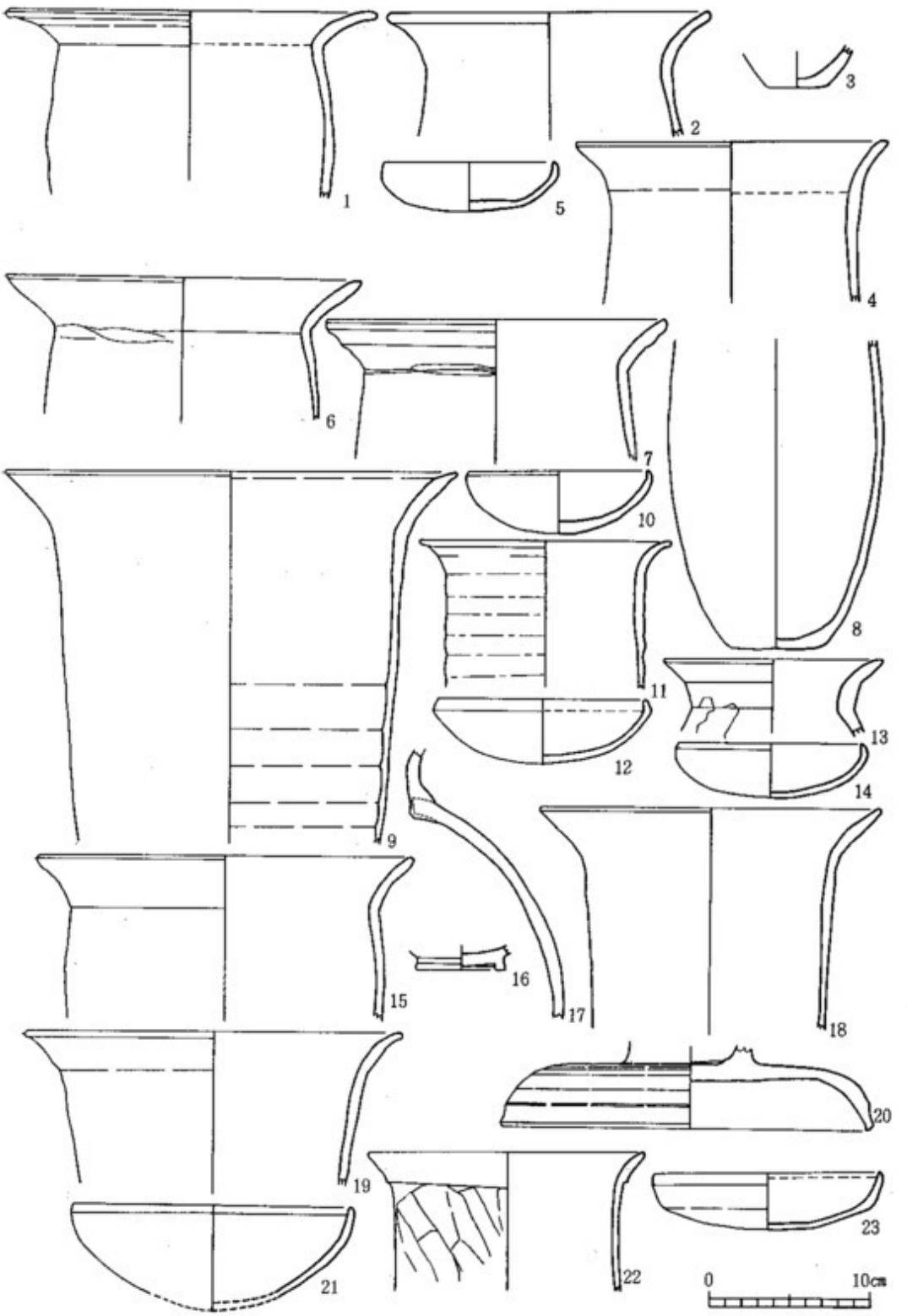


3号住居跡

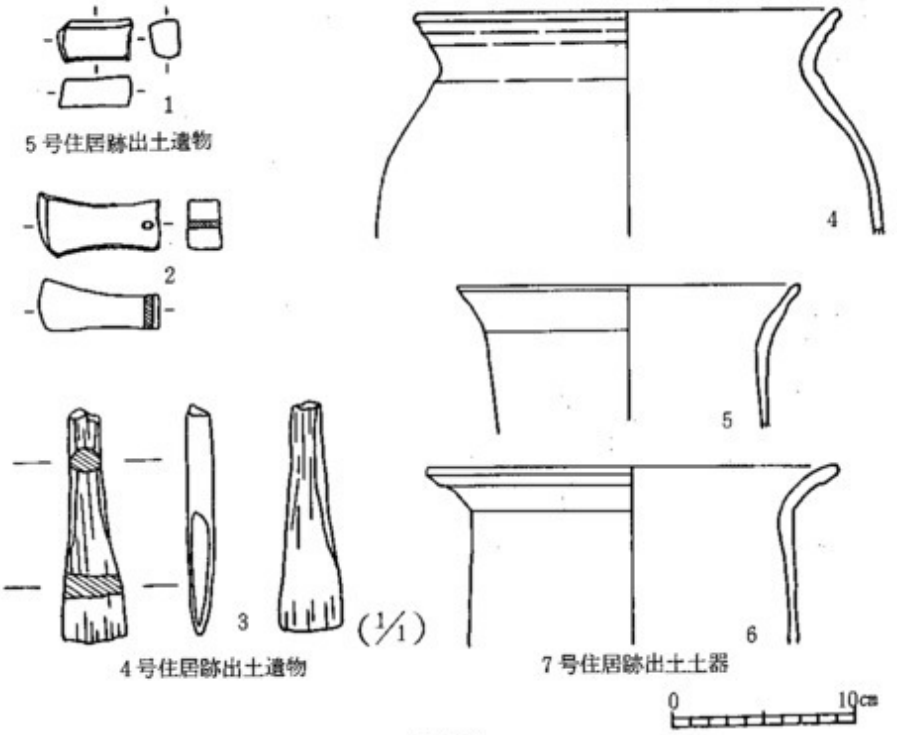
I層　表土
2層　黒褐色土，C軽石を含む。
3層　黒褐色土，C軽石，ロームブロック，焼土炭化物を含む。攪乱されている。
4層　黒褐色土，焼土，炭化物を多く含む。
5層　表土の攪乱，ロームブロック，ローム粒を多く含む。

挿図21

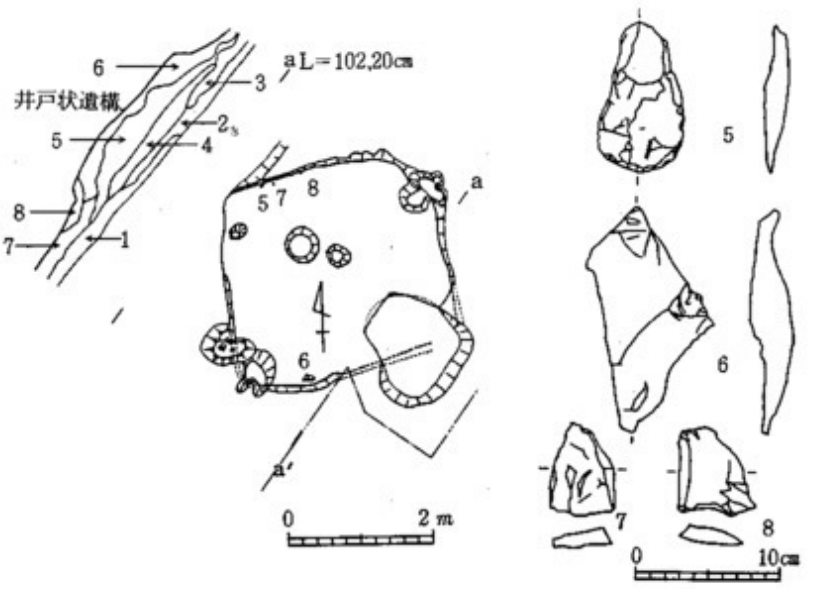
竈断面　1層　淡黄褐色土，粘土に近いローム，上層に焼土をかぶる。
2層　朱色，焼土塊を含む。最も焼けている。
3層　赤褐色土，2層ほどではないが，焼土塊，焼土粒を多く含む，二ツ岳系軽石を含む。
4層　二ツ岳系軽石を含む黒色土に焼土塊，焼土粒を含む。
炭化物を多く含み，灰の存在を思わせる。



挿図22



挿図23



挿図24　9号住居跡

1層　表土
2層　表土より黒味を帯び，C，二ツ岳系軽石を含む。
3層　灰黒色土，C，二ツ岳系軽石を含む，粘性あり。
4層　黒色土，二ツ岳系軽石を含むが，C軽石は認められない，粘性強い。
5層　黒色土，二ツ岳系軽石を含む，やわらかく粘性あり。
6層　褐色土，軽石は含まず，焼土，炭化物を少し含む。
7層　褐色土，ローム粒子を含む，攪乱されている。
8層　褐色土，ローム粒子，ロームブロックを含む。

小　結

前述のように，今回の調査では，竪穴住居跡９軒が検出された。このうち，９号住居跡は縄文時代前期に属するもので，７号墳の周堀によってその一部が破壊されていた。他の８軒の住居跡はいずれも奈良時代以降のものであり，古墳との切り合いは認められない。

これら８軒のうち，竈は，はっきり検出された１号～３号住居跡でみると，ともに東壁南寄りに位置し，いずれも壁より外部に造り出されているものである。また，その分布をみると，１号住居跡は古墓群の西方に，２号～８号住居跡は，古墳群の南方に位置している。これら住居跡は，古墳との切り合いがないこと，古墳が密集する北の方には確認できなかったことなどから，奈良時代以降，主に古墳群の南から西の地区にかけて，集落が営まれていたものと推定できる。

しかし，今回の調査は，遺跡のひろがる台地の東端部に限定され，畑地が道路として変改される部分及び田への転換予定地についてのみの調査であったため，竪穴住居跡の検出も９戸にとどまった。集落は，地形及び土器の散布状況等によると，調査対象外である西の台地中央部にかけてひろがっているものと考えられる。

(Ⅵ)　ま　と　め

富田遺跡群の一部である本調査対象地区内には，従来４基の古墳の存在が知られていたが，現在では，おうとか山古墳（『上毛古墳綜覧』・荒砥344号墳）が確認されるのみで開墾により桑畑と畑となっていた。しかし今回の発掘調査により本遺跡地は，古代，中世，近世の各時代に及ぶ遺構，遺物を有する複合遺跡であることがわかり，次のような成果を収めることができた。

(1)　縄文前期の土器を伴う竪穴住居跡１軒を検出し，約6000年前の生活の跡を実証した。

(2)　おうとか山古墳の規模・形状が確認されるとともに，７基（この内，３基は上毛古墳綜覧に記載されているものと推定される）の古墳を検出し，古墳の密集地帯であることが判明した。

(3)　土師器及び須恵器を伴う竪穴住居跡８軒を検出し，奈良・平安時代頃の集落の存在が推定されるようになった。

(4)　鎌倉時代末から戦国時代頃と推定される古墓の存在が明らかとなった。

(5)　この他，生活，生産に関係する，溝，井戸，ピットの存在が明らかになった。

これらの成果のうち，特に(2)は，前橋市の歴史の中に，新たに富田古墳群を加えて歴史を組み立たせる素材を提供するものと考えられる。さらに，(4)の古墓の調査は，群馬県の中世の仏教文化究明上，とりわけ石造文化と葬制とについて，今後大きな役割を果たすものと思われる。

なお，遺物が本調査地周辺の西側及び南側においても多量に散布していることから，遺跡は，この台地の西側から南側一帯にかけて，大規模な範囲で存在していると考えられる。

図版1　おとうか山古墳，東原1・2・3号墳

1　おとうか山古墳遠景（調査前南より）

2　おとうか山古墳周堀(東側の「渡り」部分)

3　東原1号墳（南東より）

4　東原1号墳埋葬主体部

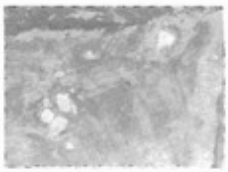
5　東原2号墳（南東より）

6　東原2号墳埋葬主体部

7　東原3号墳周堀（北西より）

8

9



10

8　おとうか山古墳遺物出土状況
9　東原1号墳遺物出土状況
10　東原2号墳遺物出土状況

図版２　東原４・５・６・７号墳

1　東原４号墳（南より）

2　東原４号墳上の石組み（北より）

3　東原５号墳（北西より）

4　東原４・６号墳の開堀（手前が４号墳）

5　東原６号墳（北より）

6　東原７号墳（北より）

7　２号墳の周堀外東側にあった石組み

8

9

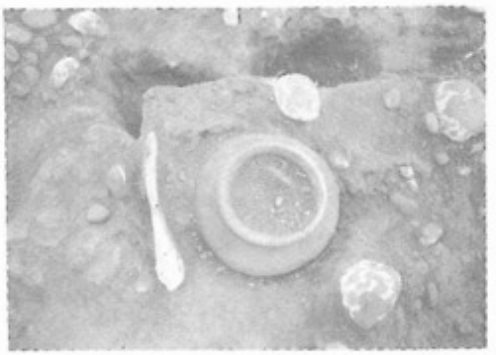
10

8　東原４号墳遺物出土状況

9　東原５号墳遺物出土状況

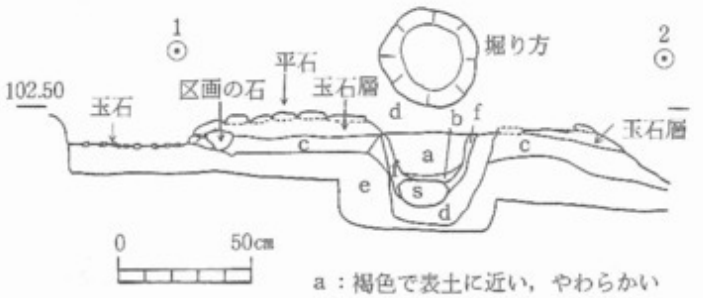
10　東原６号墳遺物出土状況

図版3



骨蔵器5と伴出板碑出土状態（55号）

骨蔵器3出土状態（3号）



a：褐色で表土に近い，やわらかい
b：粘土質の黄褐色，骨片を多く含む
c：黄褐色土，粘性
d：黒味のある褐色土ローム
e：粘性の強いローム　f：小石で小石室を作っている

D区　　O区　C区

B区（12号）

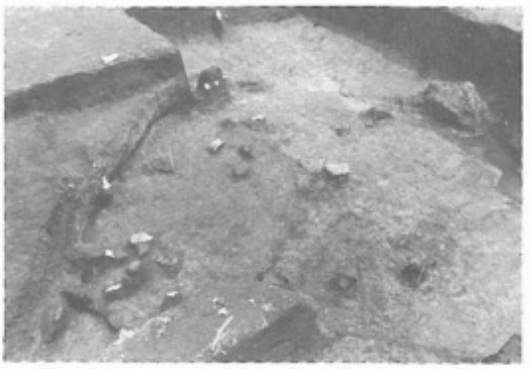
図版 4

1 号住居跡（西より望む）

2 号住居跡（東より望む）

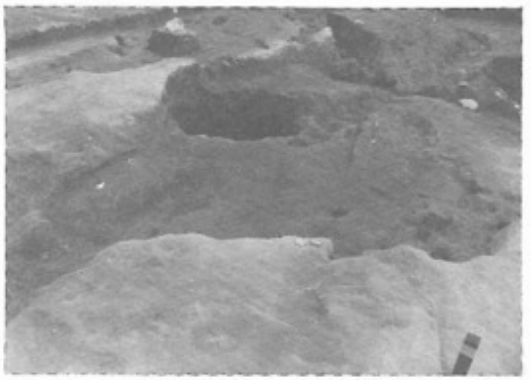
3 号住居跡（南より望む）

4 号住居跡（東より望む）



5 号（左），7 号（右）住居跡（西より望む）

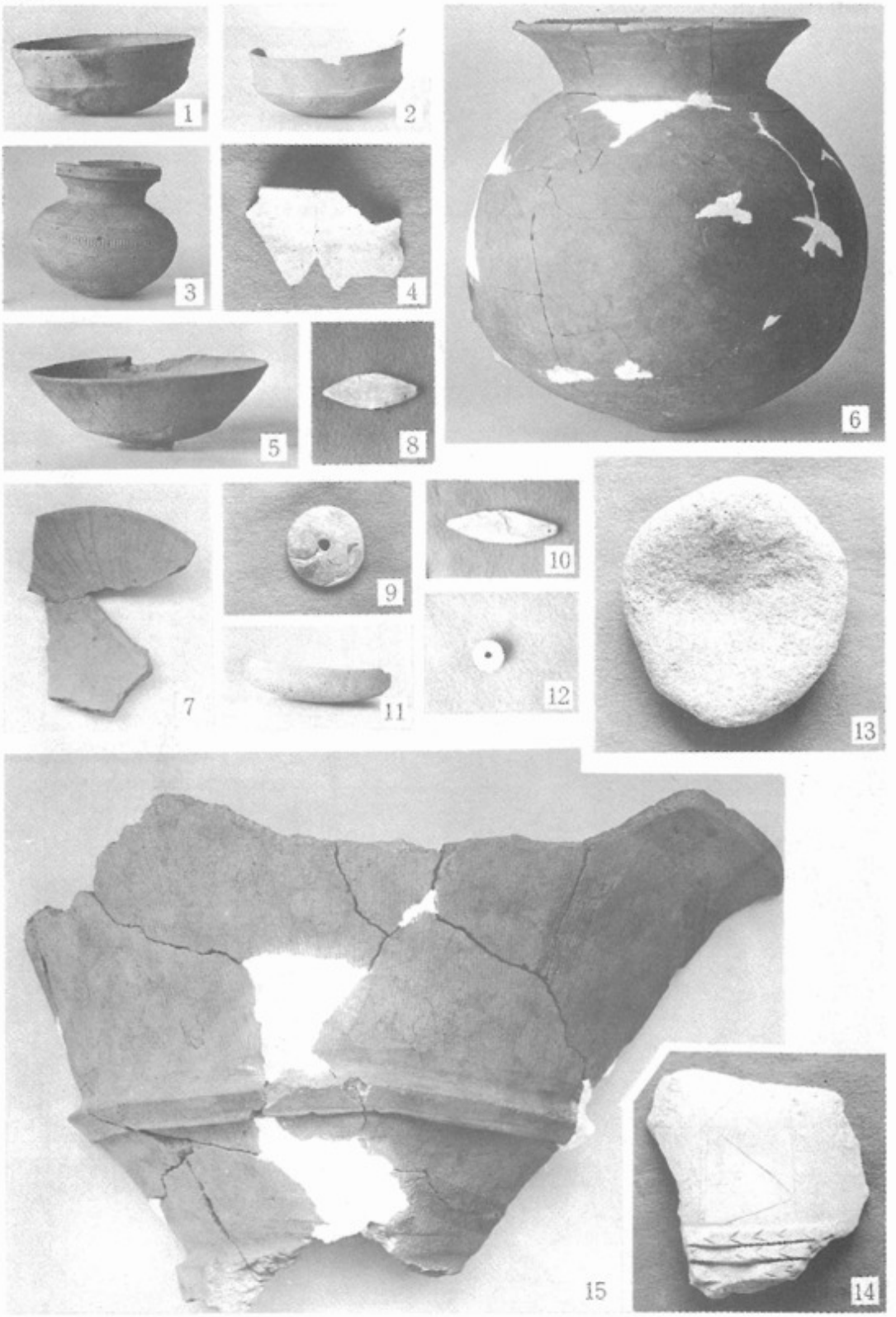
6 号住居跡（北より望む）



8 号住居跡（西より望む）

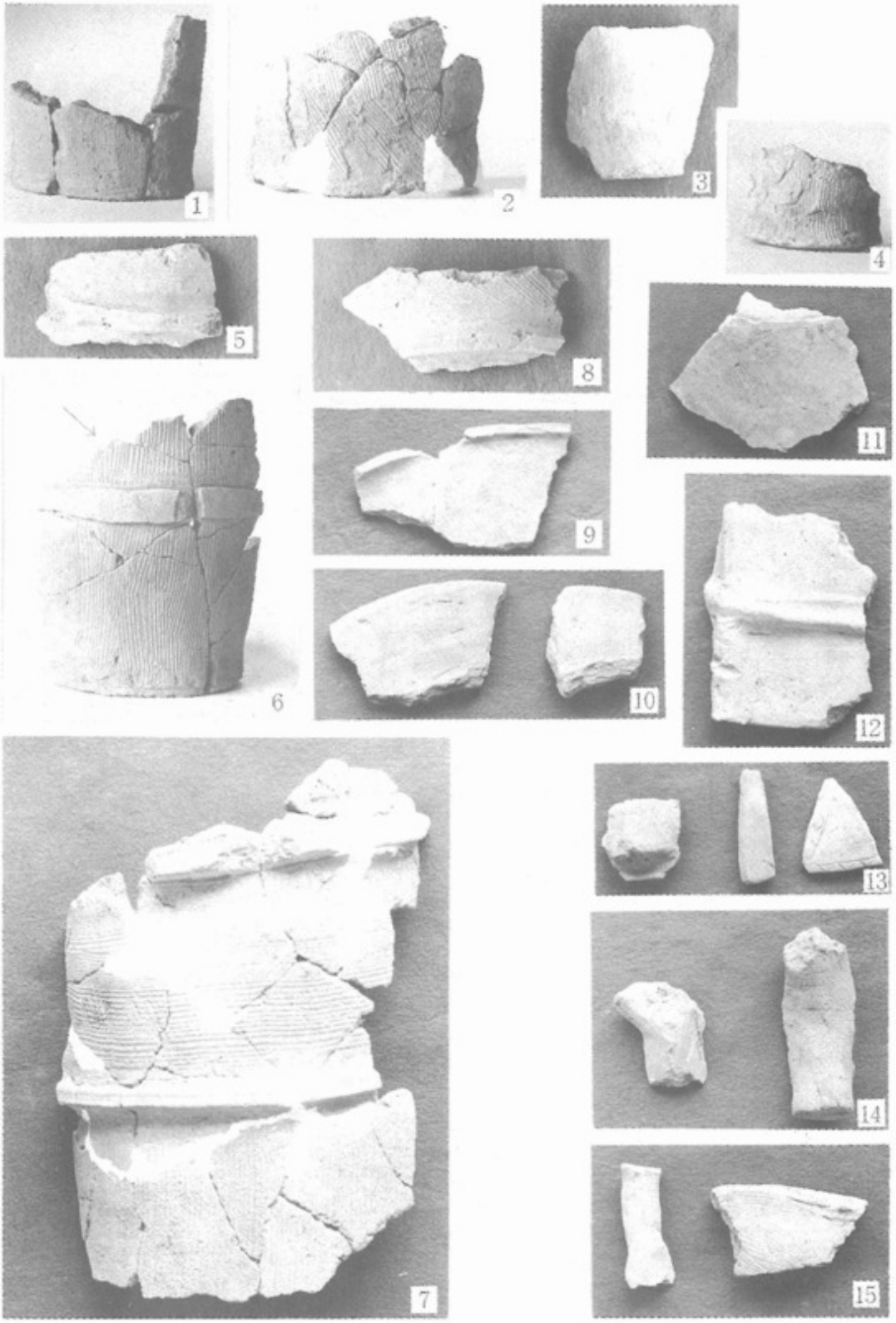
9 号住居跡（西より望む）

図版 5



東原古墳出土遺物（おとうか山古墳13，2号墳14・15）

図版 6

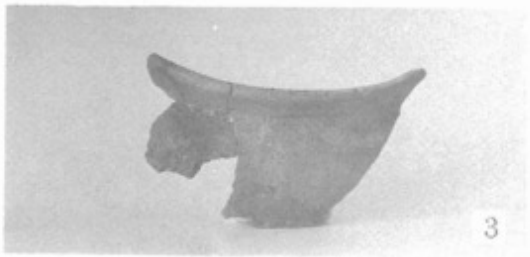


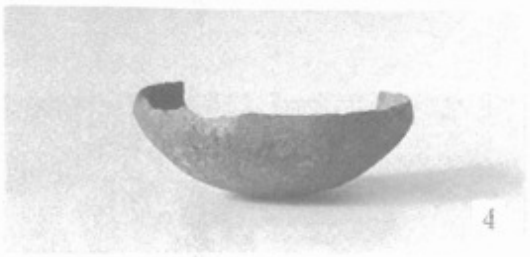
東原古墳出土遺物（1号墳 1・3・10・12・13，2号墳14，6号墳 2・6・7，7号墳 4・5・8・9・11・15）

図版7

1

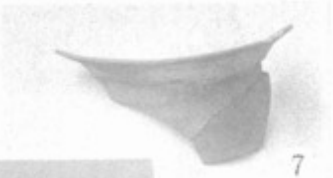
2

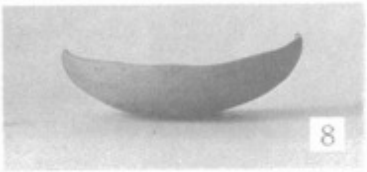

3

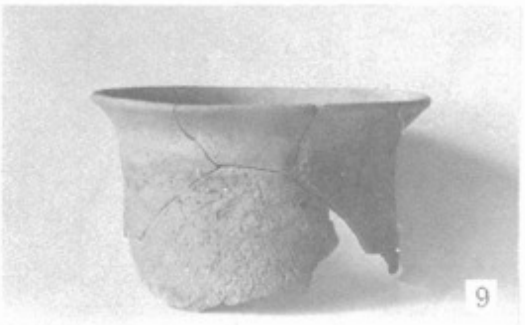

4

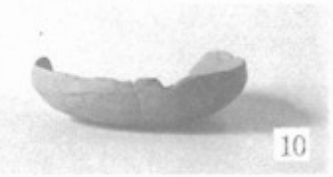
5

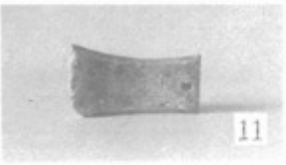
6


7


8

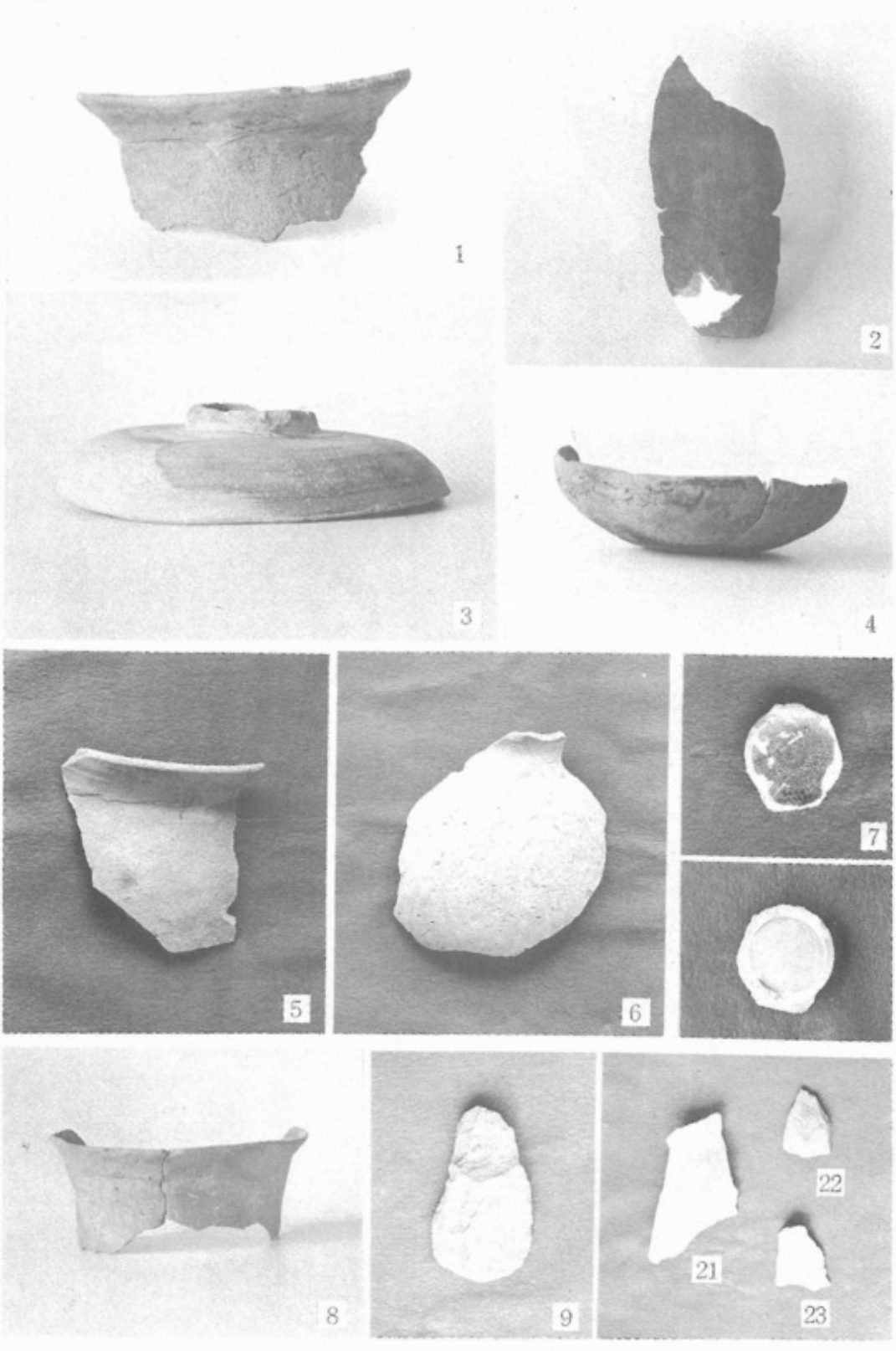

9


10

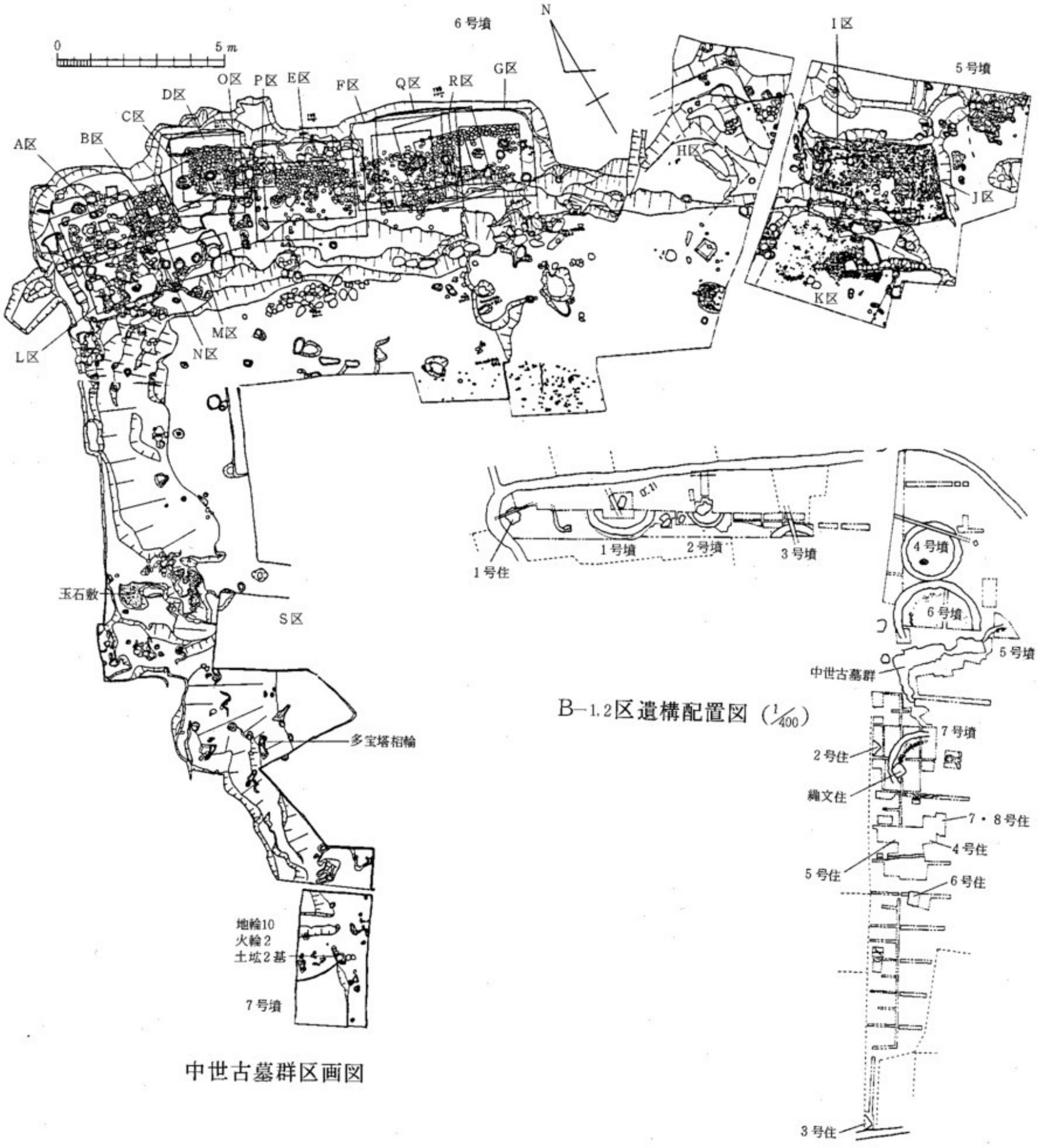

11

竪穴住居跡出土遺物

図版8



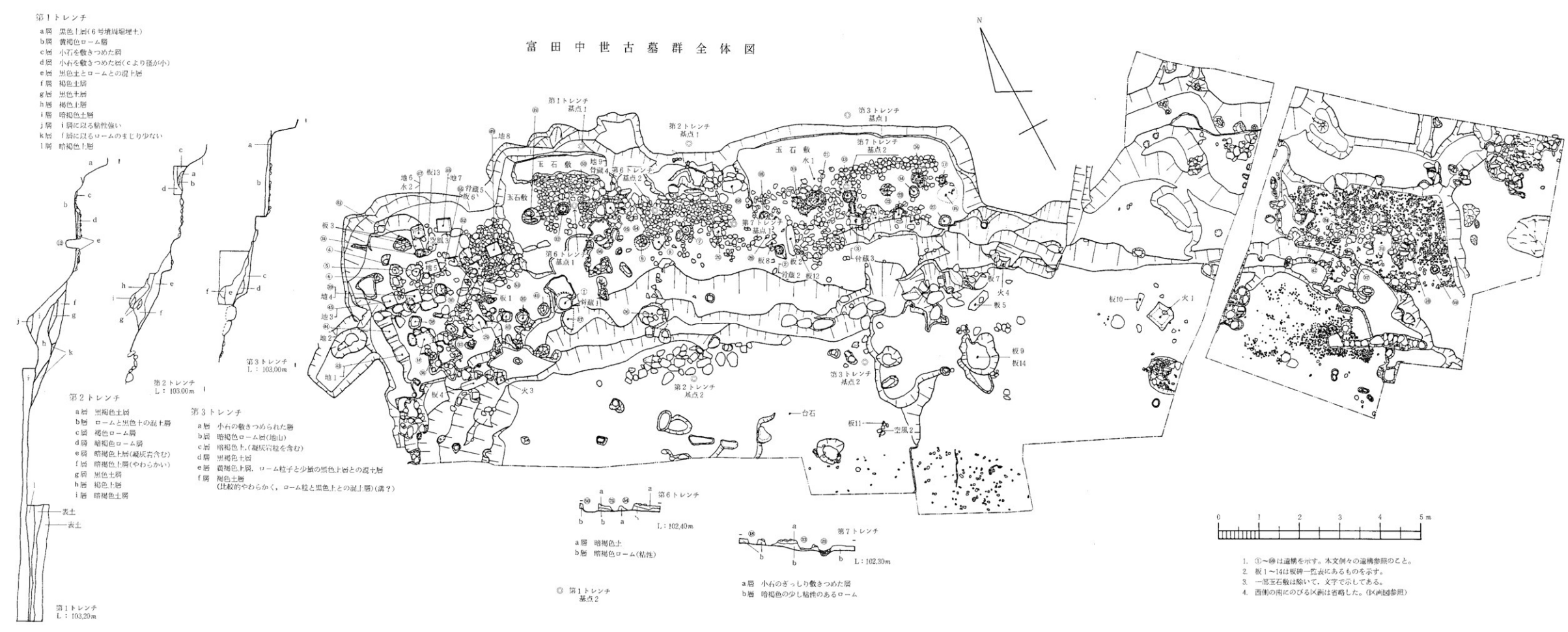
竪穴住居跡出土遺物



中世古墓群区画図

B—1.2区遺構配置図 (1/400)

富田中世古墓群全体図



1. ①～⑩は遺構を示す。本文例々の遺構参照のこと。
2. 板1～14は板碑一覧表にあるものを示す。
3. 一部玉石敷は除いて，文字で示してある。
4. 西側の南にのびる区画は省略した。(K画図参照)

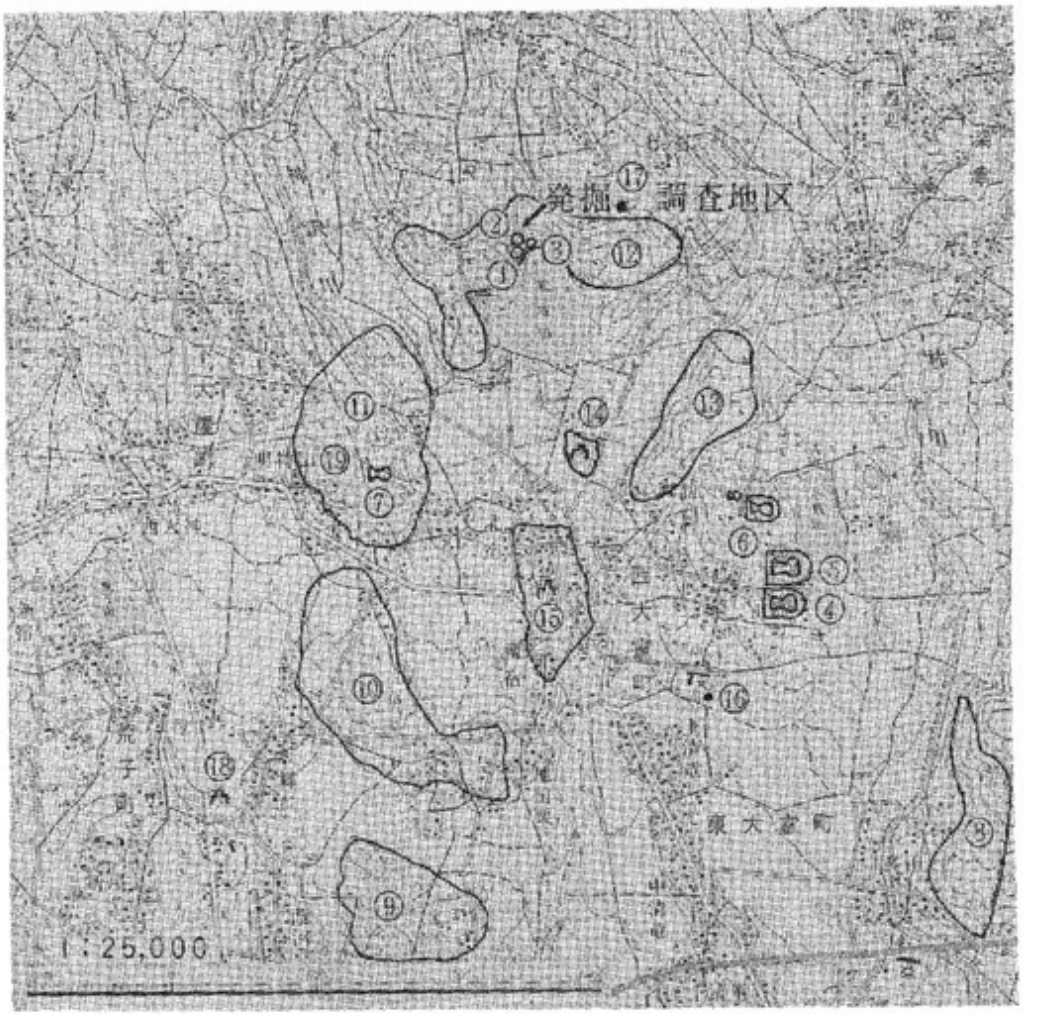
西 大 室 遺 跡 群

Ⅰ 所 在 地

前橋市西大室町大稲荷340—7，340—2番地

前橋市西大室町七ツ石324番地　他2筆　　計5筆　　10,000㎡

Ⅱ 遺跡の位置と環境



図版1

1　荒砥68号墳（大稲荷古墳）　2　荒砥70号墳　3　荒砥72号墳　4　前二古墳（国・史跡）　5　中二子古墳（国・史跡）　6　後二子古墳付小古墳（国・史跡）　7　伊勢山古墳　⑧　多田山古墳群　⑨　阿久山古墳群　⑩　天神山古墳群　⑪　伊勢山古墳群　⑫　七ツ石古墳群　⑬　下諏訪古墳群　14　大室小校庭遺跡　15　七ツ石祭祀遺跡　16　大室元城跡　17　大室城跡　18　荒子の砦　19　産泰神社

本地区は，赤城山南麓の標高170m～130mにわたる。北から南にかけての緩傾斜地を荒砥川，神沢川，粕川が南流し本支流が縦谷をつくり浸蝕している。これら，各縦谷の間にはさまれた舌状地の先端部及び台地の頂上部に古墳が群在している。

本遺跡地周辺には，国指定史跡である前・中・後二子墳（中二子古墳は東大室町）の3基をはじめ前方後円墳5基を含む178基が上毛古墳綜覧に記載されており（旧荒砥村では365基）古墳の豊庫といわれている前橋市荒砥地区の中でも著しく多く，古墳を抜きにしては本地区の特色を語ることができない。

前・中・後二子古墳と相並ぶ100mを越える3基の前方後円墳はほぼ同時代のものと考えられる。他にまれをみないものであってこの地に上毛野国第一級の権力者，財力者がいたことが想像される。しかしながらこの地の古墳の大部分は，第2次世界大戦中・後の開墾によって削平されたものも少なくない。この地の古墳の多くは，6世紀の中頃から7世紀の中頃にかけてつくられたものと思われる。この時期の住居跡の調査例としては，現大室小校庭から多数発見されている。

また，本遺跡地には中世末期の遺跡である大室元城跡，大室城跡がある。大室城跡においては，本丸の北側に壕をめぐらした櫓台が見られる。

Ⅲ　発掘調査の概要

1　調査地区（図版　2）

2　遺構・遺物の量

イ　遺構数

縄文時代　　ピット　1

古墳時代　　古　墳　5
- 円墳　横穴式両袖型石室，3（内前庭付設　2）
- 墳丘・主体部不明　周堀の一部発掘　1
- 墳丘なし，箱式棺状竪穴石室　1

ロ　遺物量

縄文時代　　なし

古墳時付　　墳丘上，周堀内，前庭部より出土。
土師器（坏）須器器（甕・高坏・提瓶・平瓶等）円筒埴輪，人骨，歯，鉄製品（直刀，刀子，馬具，棺飾，くぎ，鉄鏃等）遺物整理箱15

3　調査経過（主な経過）

8上旬　プレハブ設置　器材等を準備する。

8　13　西大室遺跡群発掘調査開始に伴う現地説明会実施　68号・70号墳篠刈開始する。

8　14　調査地区設定，70号墳・72号墳篠刈り，抜根。

8　15～22　現形測量，調査地区表土はぎ実施する。

8　24，25　68号墳周堀部分排土。

8　28　　68号・70号墳周堀排土，72号墳羨道部，石室内排土。

8　29　文化庁稲田調査官，県松本調査員，教育次長，課長，係長視察。

9　1～12　68・70・72号墳周堀排土及び地層断面実測，写真撮影，石室内排土等を行う。

9　13　72号墳　天井石落石及び70号墳羨道天井石バックフォーにより排除する。
群馬大学教授　新井房夫氏地質調査，県史編さん室　松島，石川氏視察。

9　14～29　68，70，72号墳　石室内精査，前庭部精査・平行して遺物出土状況実測，写真撮影。

10　1　72号墳の石室内精査。

10　2～8　七ツ石Ⅰ号・七ツ石Ⅱ号墳　発掘調査，遺構，遺物出土状況調査，実測，写真撮影等実施する。

10　9　68，70号墳　石室内床面下断面図作成，全域，写真撮影。
現地説明会の実施（小中学生　住民等　100人以上参加する）。

10　11～13　図面注記（未記入の図面等）遺物洗浄，発掘調査で確認すべき箇所検討し不足部分の補足調査，残務整理等実施。

10　14　プレハブハウス解体，器材撤出，運搬等実施。

4　層　序

調査地が農耕によりかく乱及びその後の堆積土が少なくはっきりしない。古墳の周堀内の下層位からB軽石の純層があったり，古墳構築の基盤層からＦＰとC軽石の混土した層があったりする。しかし，それらがはっきりした層序として発見された地区はなかった。

そこで，古墳構築の基盤層と周堀の地層でよく表われた層序を記す。

1　層
2　層
3　層
4　層
5　層

1層　表土　黒色土さらさらとしている。

2層　浅間山B軽石　（周堀の下層部から純層で発見される）

3層　黒褐色土でねばり気は少ない（ＦＰ　Cの混土層）
68，70，72号墳の基盤層

4層　ローム の漸移層

5層　ローム層（茶褐色土）

5　第68号墳（上毛古墳綜覧荒砥村第68号墳）

イ　墳丘及び外部施設

通称「大稲荷古墳」と呼ばれている本古墳は墳丘盛土が墳頂付近を除いて 周囲から削り取られて

おり，篠笹に覆われてこんもりとした墳頂部とそのまわりの桑畑との間に段差がある。発掘前は天井石の一部が露出しており，石室内には土砂が流れ込んでいた。「綜覧」には大サ165尺，高サ33尺とあり，かなり大きな円墳である。

発掘調査の結果，古墳は東側に傾斜する斜面に構築されたもので，二ツ岳軽石を含む黒色土層の上につくられている事が判った。盛土の範囲は石室奥壁中央から墳丘の北側で15.5m～16.5m，東側で17.5mあった。

石室開口部前に南北に長軸をとる長円形に堀り込んだ前庭状遺構があり多数の遺物を出土した。前庭状遺構の低部と羨道入口部との比高は約1mであり，緩い傾斜をもつ。大きさは長軸方向で約14m，短軸方向は羨道入口部前で約4m。全体を調査し得なかったためにはっきりした形状は不明だが隅丸の台形状が想定できる。

墳丘の周囲には前庭状遺構に連続しない形で周堀がめぐっている。周堀の規模は墳丘の西側で上巾7.5m～8m，下巾3m～3.5m，深さは現地表下で1.5mあり，断面は鍋底状を呈する。墳丘北側では上巾6m，下巾1.5m，深さ現地表下で1.2mであった。東側ではその直下を北流する大正用水のため周堀外側の立ち上がりが確認できなかったが，西側同様かなり広い巾をもっていたようである。

古墳の規模は周堀内側が東西方向で44m。石室奥壁中央から北側の周堀内側まで23.5m，周堀外側で30m，墳丘の直径は推定で約34mであった。

周堀内からの遺物の出土はなく，葺石及び埴輪は特に認められなかった。

ロ　内部施設

主体部は輝石安山岩使用の自然石乱石積の横穴式両袖型石室で，主軸をN—24°—Eにとっている。

石室各部の寸法は次のとおりである。　（単位cm）

全長	玄室長			玄室巾			玄室高		羨道長			羨道巾		羨道高	
	左	中央	右	奥	中央	入口部	前	後	左	中央	右	袖部	入口部	前	後
880	575	585	580	上巾 140 下巾 280	285	210	260～265	320	?	295	295	?	90	?	?

石室の石は戦後開墾された時に墓地の石垣用として抜き取られて，羨道部はほとんど崩されていたが，玄室左袖部の根石がはっきりしない事を除けば，玄室は完全に旧状をとどめていた。

石室は地山まで掘り込んだL型の掘り方の中に構築したものであるが，その床面は流れ込んだ土砂によってかく乱されており，また石室が開口されていて人の出入りがあったために多数の拳大程の転石が出たにもかかわらず，敷石の状態ははっきりしなかった。

この石室の奥壁はヨコ210cm×タテ170cmという巨大な石を根石に据え，その上にヨコ170cm×タテ150cmの石を乗せて2石で構成しており，巨石巨室の傾向を示している。側壁も130cm×130cm前後の大きな石を2ないし3段に積み上げて構築し，中に立つ人を圧倒する大きさをもっている。天

井石は奥壁寄り2石を残すのみであるが，側壁がしっかり残っており，また天井石の傾斜からみても羨道部で一段低くなる2段構築と考えられる。

玄室入口部及び羨道部はかく乱されており，玄門の有無，巾や高さについては不明であるが，羨道部入口右壁には長形の石を横積みにして用い，羨門を意識しているかに見受けられた。また，その羨道部入口右壁から右へ1.6mのところに20cm×20cm程の石が4石前庭状遺構へ突き出すような形で伸びていたが，入口左側には発見されず，どのような遺構であるかは不明である。

ハ　出土遺物（第2，3図）

石室はすでにかなり荒され、副葬品の一括出土は望むべくもなかったが，玄室を精査したところ，耳環（金環）7個の他，帯金具，鉄鏃等が出土した。

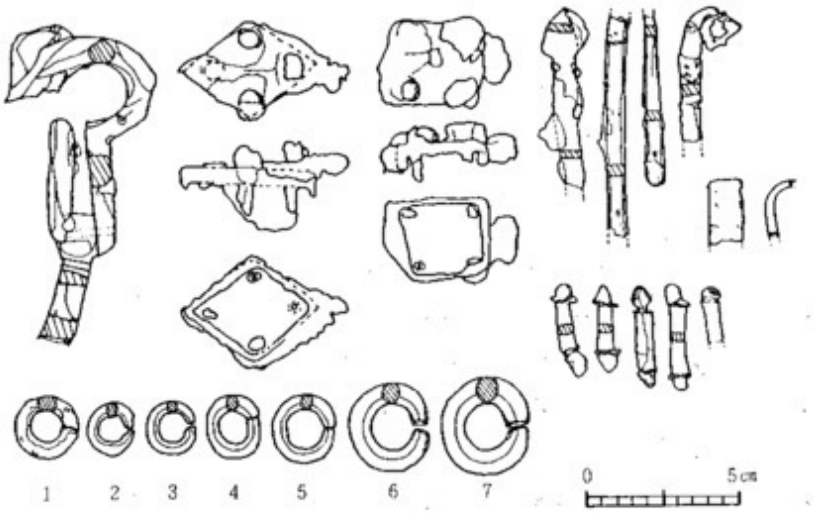
出土した耳環のうち4個は対になって，2個は各1個づつ，1個は排土中から出土したものである。対になって出土したのは，第2図にかかげたもののうちNo.2・3及びNo.4・5の2対である。このうちNo.5・6の1対は出土した7個のうちの最小（径1.7cm×1.5cm）のもので，奥壁から2.5m，東壁から0.7mのところ，すなわちやや東壁寄りから出土し，もう1対のNo.2・3は7個のうちでは中位の大きさで（径2.3cm×2.1cm，2.1cm×1.8cm），奥壁から1.9m，西壁から0.5cmのところ，西壁寄りから出土している。No.1及びNo.4は各1個づつ出土したもので，いずれも大きい。No.1（3.2cm×2.9cm）は奥壁から1.0m，東壁から0.5mのところに，No.4（2.9cm×2.6cm）は奥壁から3.95m，西壁から0.3mのところにあった。これらは第　図にも見るように，東西両壁に沿った場所にそれぞれ分散して出土しており，その周辺には骨粉の散布（第　図点線内）も多いことから，これら耳環の出土位置はほぼ原位置であり，この位置に遺体を置いたものと考えられる。他の1個（No.7）は排土中から出たもので，その出土位置は明らかでないが，玄室内から100本余の歯も出土していることと合わせて，本石室には少くとも4体～5体が葬られていたものと考えられる。

他の出土遺物の確認は少量であるが，東壁寄りに出土した1対の耳環の近く，東壁に接したところに鉄鏃及び棺金具とみられるものが，西側では奥壁から3.1mのところ西壁に接して帯金具・鉸具が残っていた。

表1　68号墳前庭部出土土器

土器番号	器種	法量	技法等	胎土	色調
1	土師器坏	器高 3.8 口径 10.4 器肉 0.5	口縁部横ナデ。底部周辺は縁にそってのヘラ削り，中心部は不定方向のヘラ削り。	砂粒含有	赤褐色
2	土師器坏	器高 3.2 口径 10.8 器肉0.3～0.5	口縁部横ナデ。底部不定方向のヘラ削り。黒色はんがある。	砂粒含有	黄味の強い赤褐色
3	土師器坏	4.5 11.8 0.4～0.5	口縁部横ナデ。底部周辺は縁にそってのヘラ削り，中心部は不定方向のヘラ削り。	良	黄味を帯びた赤褐色
4	土師器坏	4.5 12.5 0.5～0.6	口縁部横ナデ底部不定方向のヘラ削り。 内面に黒はんがある。	良	暗い赤褐色

5	土師器 坏	3.8 11.2 0.4～0.6	口縁部横ナデ。底部不定方向のヘラ削り。	砂粒含有	黄味の強い赤褐色
6	土師器 坏	3.7 11.0 0.4～0.6	口縁部横ナデ。底部周辺は縁にそってのヘラ削り。全体的にゆがんでいる。	砂粒含有	黄味の強い赤褐色
7	土師器 坏	4.5 10.8 0.4	口縁部横ナデ。底部は不定方向のヘラ削り。	砂粒含有	赤 褐 色
8	土師器 坏	4.0 11.2 0.5～0.6	口縁部横ナデ。底部は不定方向のヘラ削り。口唇部にスス付着。内面に黒はんがある。	良	黄味の強い赤褐色
9	土師器 坏	4.5 10.5 0.3～0.5	口縁部横ナデ。底部は不定方向のヘラ削り。胎土が悪く器肌がザラザラしている。	砂粒含有	くすんだ赤褐色
10	土師器 坏	3.4 10.5 0.2～0.3	口縁部横ナデ。底部不定方向のヘラ削り。	良	くすんだ赤褐色
11	土師器 坏	3.5 10.7 0.3～0.5	口縁部横ナデ。底部不定方向のヘラ削り。	砂粒含有	赤 褐 色
12	土師器 坏	3.3 10.9 0.3～0.5	口縁部横ナデ。底部不定方向のヘラ削り底部に黒はんがある。口唇部にゆがみあり。	砂粒含有	内面赤褐色 外面くすんだ褐色
13	土師器 坏	3.5 11.7 0.3～0.4	口縁部横ナデ。底部不定方向のヘラ削り、底部に黒はんがある。	砂粒含有	くすんだ赤褐色
14	土師器 坏	4.5 12.0 0.4～0.6	口縁部横ナデ。底部，周辺は縁にそって，中心は不定方向のヘラ削り。底部外面にスス付着，内面に黒はんあり。	良	黄味を帯びた赤褐色
15	土師器 坏	5.2 15.5～16.5 0.4～0.7	口縁部横ナデ。底部不定方向のヘラ削り。口唇部にゆがみあり。	良	黄味の強い赤褐色
16	土師器 坏	3.5 12.4 0.4～0.6	口縁部横ナデ。底部周辺は縁にそって，中心は不定方向のヘラ削り、	良	黄味の強い赤褐色
17	土師器 坏	7.9 19.5 0.3～0.4	口縁部横ナデ。底部不定方向のヘラ削り。口縁部にゆがみあり。	良	黄味の強い赤褐色
18	須恵器 提 瓶	器高 30.0 口径 7.1 胴部径 23.1	整形良。口頸部から胴部にかけて一部、黄白色の自然釉がかかるが，十分溶けるまでに至ってない。	良	灰 色
19	須恵器 平 瓶	（口縁部欠） 残高 15.5 胴部長径13.3	胴部下半部，回転ヘラ削り整形。肩部に一条の沈線がめぐる。不明瞭な平底。口頸部から肩部にかけて褐緑色の自然釉がたっぷりかかる。	良	灰 色
20	須恵器 細頸瓶	（口縁部欠） 残高 20.0 胴部径 16.4	頸部から肩部にかけて濃緑色の自然釉がたっぷりかかる。頸部中央部に二条の沈線がある。	良	灰 色
21	土師器 高 坏	器高 18.0 口径 17.4 脚部 基部径 5.0 底部径 15.6	坏部口縁部横ナデ。底部ヘラ削り後ナデ調整。脚部一ヘラ削り↓後ナデ調整。底部は横ナデ。	良	淡 褐 色



第2図　68号墳石室内出土遺物実測図

6　第70号墳（上毛古墳綜覧荒砥村第70号墳）

イ　墳丘及び外部施設

墳丘は石室天井石の一部を露出していたが，保存状態は非常に良く墳丘全体を覆っていた篠を取り除くと碗を伏せたようなきれいな円墳であることが判る。「綜覧」には大サ132尺，高サ33尺とあり，第68号墳に比べてやや小さいがほぼ同じ高さである。

墳丘裾部西側がほぼ平坦なのに対して東側は急傾斜で東側に傾斜する自然丘陵を整形して盛土をしている事が判る。基盤層は二ツ岳軽石を含む黒色土層で，盛土の範囲は墳丘東側で奥壁中央から約13mである。

石室開口部前には外方に向かって台形状に開き，その左右及び奥の部分を石積みして区画した前庭がある。左右の石積みは50cm×60cmから80cm×90cm前後の面を持つ自然石を根石に据え，これよりもやや小さめの石を根石より上2～3段まで積み上げ，それより上部に行くにしたがってさらに小振りの石を用いて構築し，左壁で138°，右壁で142°の傾斜をもっている。この左右の石組は石室開口部左右袖壁末端に左壁で115°，右壁で88°で交わっている。前庭の床面には小礫が敷きつめられていた形跡が認められ，その範囲は周堀内側にまで及んでいた。

前庭は石室平面プランと一体となって企画されている場合が多いが，本古墳の場合も，前庭左壁の石室方向への延長線は玄室奥壁右隅と，右壁の延長線は奥壁中点と交左する線が想定でき，石室と関連させて企画されたものと考えられる。

前庭の規模は次のとおりである。　（単位cm）

奥行		巾		羨道前袖		袖高		石積高			
左石積	右石積	奥	前	左	右	左	右	左奥	左前	右奥	右前
350	350	440	650	190	150	215	215	215	245	215	155

周堀は前庭前で玦状を呈して「渡り」を設けてある。墳丘の北側及び西側は調査対象外のため詳細は不明であるが，調査を行った南側及び東側の周堀内側の線は墳丘に沿ってほぼ円周を描いていた。周堀の規模は前庭部南の「渡り」部分右側で上巾３m，下巾１m，左側で上巾4.5m，下巾1.5m，深さは0.85mであった。ただ，墳丘前左側周堀外側の線はほぼまっすぐに西へ伸びており，あたかも円を描く周堀に突き出した舌のような形で付けたされている。これが何を意味するのか，調査区域が限定された今回の調査では明らかになし得なかった。

周堀内からの遺物の出土はなく，葺石及び埴輪は特に認められなかった。

ロ　内部施設

主体部は輝石安山岩の自然石乱石積の横穴式両袖型石室で，主軸をN—29°—Eにとっている。

石室各部の寸法は次のとおりである。　（単位cm）

全長	玄室長			玄室巾			玄室高		羨道長			羨道巾		袖道高	
	左	中央	右	奥	中央	入口部	前	後	左	中央	右	袖部	入口部	前	後
765	480	前室 215 後室 260	470	上巾 95 下巾 195	260	205	?	250	280	290	300	110	95	?	?

玄室は中央部の間仕切りの石列により前室と後室とに仕切られており，その後室に被る程度に天井石２石が残っていた。玄室入口部分には框石と思われる石はなかったが，楣石が架構されておりまた，羨道部側に倒れていた２石は大きさや厚さからみて，あたかも玄室の入口部を塞ぐためのもののようであった。

床面は後室で比較的大きめ（10cm×10cm）の角礫を主体として敷きつめていたが，中には20cm×30cm程の大きな石も用いられていた。間仕切りの石は平らな面を前室側に向けてきちっとした直線を構成している。前室床面のレベルは後室に比べて約10cm程下がっており，後室のものに比べてやや小振りであるがやはり大きめの角礫が敷かれている。その下の層はロームと黒色土との混土を厚さ15cm程に突き固めて構築してある。羨道部床面は前室床面レベルより更に20cm程下がっており，舗石は認められなかった。

羨道部入口は左右両壁とも用石の長い面を前面に向けて横積みにして羨門としている。閉塞にも長形の石を横にして積み上げている。なお，石室内床面付近に10数センチもの厚さに浅間山B軽石が積っていた。B軽石降下以前，それもそれ程離れぬ時期に既に石室が崩壊していた事を示している。

ハ　出土遺物

○前庭部（第５図）

前庭からは，17個体の土師器（坏類13，高坏４）と６個体の須恵器（高坏２，坏２，短頸壺１，細頸瓶１）が出土している。その出土地点をみると，大別して前庭東半部・中央部・北西隅部及び前庭石積上の四地点に集中する傾向が指摘できる。前庭東半部には土師器坏７個体，須恵器坏２個体の計９個体の坏が，前庭東側の石組にほぼ平行するように置かれていた。また，この東側に限って，前庭部奥壁の石組上及び東の石組上に土師器が出土している。特に，奥の石組上には土師器高坏が４個体まとまり，東側石組上には土師器坏が４個体まとまっており，器種の上で明らかに区分でき，意図的な配置が考えられる。前庭石組の北西隅には須恵器高坏２個体と短頸壺１個体が出土している。さらに前庭中央部には，土師器坏１個体と須恵器破片が散乱していた。ここに散乱する破片を接合してみると，ほぼ完形の細頸瓶に復元することができた。その出土状態から見て，単に土圧による破損ではなく，土器を意図的に破砕し，その破片を前庭中央部に散乱せしめたことは明らかである。他の位置にある土器が，坏・高坏の類であり，ほぼ完形の形で出土するのとは対照的である。

○玄室（第６図）

玄室間仕切を境にして，前の部分では西袖壁近くの南西隅に，奥の部分では西袖壁近くの南西隅に，奥の部分では東壁に接した位置に集中して確認された。

南西隅には鉄鏃が集中して出土している。これら鉄鏃群の北端に刀の鋒口が認められた。また，奥の東壁沿いでは，奥壁寄り（北）と間仕切石に近いところ（南）の二か所に集中し，北の一群には，鉄鏃及び鉸具，帯金具等があり，その南に鉄鏃・小刀が出土している。なお，間仕切より奥の西壁寄りに耳環一個が確認された。遺物はほとんど東西の側壁に接した位置にあり，玄室中央部には確認できないが，本石室は発掘調査前にすでに開口しており，石室中央部の副葬品は盗掘により持ち去られているものと考えられる。しかし，本調査で確認された遺物のほとんどは，ほぼ原位置を動いてないものと考えられる。なお，人骨については明瞭な形では残っていないが，間仕切石より前の部分で，北西隅遺物群の東の位置に骨粉がかなり散乱していた。

第2表　号墳前庭部出土土器

土器番号	器種	法量	技法等	胎土	色調
1	土師器坏	器高　4.2 口径　10.2 器肉0.3～0.6	口縁部横ナデ。底部不定方向のヘラ削り。焼成よくしっかりした造りである。	良	褐色
2	土師器坏	4.5 11.7 0.3～0.6	口縁部横ナデ。底部不定方向のヘラ削り。	良	くすんだ褐色
3	土師器坏	3.8 11.9～10.4 0.3～0.4	口縁部横ナデ。底部，周辺は縁にそって，中心は不定方向のヘラ削り。底部外面にスス付着。全体的にゆがんでいる。	小石含有	黄味の強い赤褐色
4	土師器坏	3.8 11.0 0.3～0.6	口縁部横ナデ。底底部一定方向 @ に細かいヘラ削り。口縁部にゆがみがある。	良	黄味の強い赤褐色

5	土師器 坏	4.5 11.4 0.3~0.4	口縁部横ナデ。底部，周辺は縁にそって，中心は不定方向のヘラ削り。	良	赤褐色
6	土師器 坏	3.2 10.8 0.3~0.6	口縁部横ナデ。底部，中央は一定方向の，周辺は縁にそってのヘラ削り。	砂粒含有	黄味の強い赤褐色
7	土師器 坏	4.5 11.5 0.3~0.5	口縁部横ナデ。底部不定方向のヘラ削り。	小石含有	黄味を帯びた赤褐色
8	土師器 坏	4.2 12.5 0.3~0.7	口縁部横ナデ。体部一定方向のヘラ削り→。底部は不定方向のヘラ削り。口縁部にゆがみがある。	砂粒含有	赤褐色
9	土師器 坏	3.5 11.0 0.3~0.5	口縁部横ナデ。底部，中心は一定方向の，周辺は縁にそってのヘラ削り。	砂粒含有	赤褐色
10	土師器 坏	3.8 11.3 0.3~0.5	口縁部横ナデ。体部と底部の境に不明瞭な稜線あり。体部一定方向のヘラ削り→。底部不定方向のヘラ削り。	小石，砂粒含有	赤褐色
11	土師器 坏	4.0 11.8 0.3~0.5	口縁部横ナデ。底部は周にそって，一定方向のヘラ削り。	砂粒含有	赤褐色
12	土師器 坏	高器　7.5 器内0.5~0.8	口縁部横ナデ。底部，周辺は縁にそって，中心は不定方向のヘラ削り。	良	黄味の強い赤褐色
13	土師器 高　坏	器高　5.7 口径　9.4 脚部 基部径　3.9 底部径　6.8	口縁部横ナデ体部ヘラ削り。 脚部はヘラ削り後，ナデ調整。	砂粒含有	淡褐色
14	土師器 坏	器高　5.2 口径　14.8 器肉0.4~0.6	口縁部横ナデ。底部，周辺は縁にそって、中心は不定方向のヘラ削り。	良	赤褐色
15	須恵器 坏	器高　3.1 口径　11.0 器肉0.4~0.8	外面に木の葉の繊維付着。内面底部に指痕がある。底部不定方向のヘラ削り後周囲は縁にそってナデ調整。	良	灰白色
16	須恵器 高　坏	器高　11.9 口径　12.3 脚部 基部径　3.1 底部遺　10.4	坏部は右回転ロクロ成形。底部の回転ヘラ削り。 脚部には，三角形のスカシ窓が窓ある。	良	灰褐色
17	須恵器 短頸壺	器高　5.4 口径　7.3 胴径　10.6	底部は回転ヘラ削り整形。口頸部から肩にかけて，黄白色の自然釉が，うすくごまふり状にかかる。	良	灰　色
18	須恵器 高　坏	器高　15.5 口径　16.5 脚部 基部径　4.0 底部径　13.5	坏部は右回転のロクロ成形、ナデ調整→。 脚部は下から上へのナデ整形。中央の帯部上下に長方形のスカシ窓が計6窓ある。焼成は良く極めて堅緻。	砂粒含有	青灰色
19	須恵器 細頸瓶	（口縁部欠） 残高　23.2 胴径　19.8	口頸部はロクロを利用したナデ調整。胴部は，ハケ目調整。	砂粒含有	黒青色

7　第72号墳（上毛古墳綜覧荒砥村第72号墳）

イ　墳丘及び外部施設

墳丘は山林に覆われ，発掘前は天井石が墳頂付近に一部露出していたにすぎなかったが，墳丘の東側比高が約3.5mに対して西側比高は約1mと，山寄せの小円墳が想定できた。墳丘の東南側直下を大正用水が東流しているが，墳丘自体は削平を免がれていた。「綜覧」には大サ50尺，高サ10尺とあり，今回調査対象となっていた3基の古墳の中では最も小さな古墳である。

発掘調査の結果，西から東へ約9°の傾斜で下がる傾斜地に構築されており，基盤層は前記2基の古墳同様二ツ岳軽石を含む黒色土層である事が判った。盛土の範囲は東西方向で約16m，南北方向で約15mと，ほぼ正円を描く。墳丘に入れたトレンチにより，古墳構築の順序をみると，まず石室を構築する場所の地山をローム層近くまで掘り込んで掘り方をつくり，そこに壁石を置き，裏込めの石を寄せかけて，その上に土をかぶせ，固めるという工程を繰り返している事が判る。裏込め被覆を補強するための粘土の使用は特に認められなかった。また石室両側壁裏の盛土と石室奥壁裏の盛土はあきらかに土のしまりが異なり，特に奥壁裏込め石近くの盛土は非常に固くしまっており，石室天井石を，墳丘盛土の積み上げの後，後から運び上げた事が想像できた。

前庭遺構は墳丘の東南側が斜めに大正用水に切り取られていて，その存在を確認できなかったが，羨道前に入れたトレンチからはそうした施設は特に認められなかった。

周堀も大正用水に切り取られているために東側から南側にかけては確認できなかったものの他の部分では明らかに周堀が確認された。おそらく一周していたものと考えられる。このうち南西側では上巾約5m，下巾約2m，深さは現地表下で1.6mと，巾，深さともにかなりの規模である。これは墳丘西側に回るにしたがい細く浅くなり，西側で上巾約2.5m，下巾約1.5m，深さ現地表下1.3m，北側で上巾約2.5m，下巾約1m，深さ現地表下1.4mとなり，山側が浅く掘られた傾向が指摘できる。なお，その断面は鍋底状を呈している。

古墳の規模は周堀内側が南北方向で24m。石室奥壁中央から西側の周堀内側まで13.5m，周堀外側で16m，墳丘の直径は14.5m～16mであった。

周堀内からの遺物の出土はなく，葺石及び埴輪は特に認められなかった。

ロ　内部施設

主体部は輝石安山岩の自然石乱石積の横穴式両袖型石室で，主軸をN—22°—Eにとっている。

石室各部の寸法は次のとおりである。　（単位cm）

全長	玄室長			玄室巾			玄室高		羨道長			羨道巾		羨道高	
	左	中央	右	奥	中央	入口部	前	後	左	中央	右	袖部	入口部	前	後
655	390	400	400	上巾 140 下巾 190	220	125	左 175 右 170	220	255	255	260	100	90	?	?

石室は当時の表土である黒色土をローム層まで50cm～60cm掘り込み，面を水平に整地した上に奥壁及び両側壁の根石を設置している。

玄室の床面は3層から成り，まずローム層の上に黒色土を厚さ約7cm程敷きつめ，たたいて面を固くし，その上に拳大よりやや大きめな角礫を1層敷き，更にその上に拳大程の転石を敷きつめて

いる。

玄室入口部には框石が2石差し込まれるようにあり，玄室と羨道を区切っている。袖部は長方形の面を持つ用石を直立に据えて根石としている。また，框石上面より50cm～60cm上方に楣石が渡してあり，明らかに玄門を意識している事が推測できる。

羨道部は，床面に据えられた石はなく，玄室床面に比べて10cm～15cm程低い。羨道入口部は左右両壁とも比較的長形の用石を横積みにして羨門としており，これを閉塞する構造は間詰めの方式をとり，そのうちの数石が残存していた。

ハ　出土遺物（第8図）

石室はすでに開口し攪乱を受けていたが，比較的多くの物がほぼ原位置と考えられる場所から出土している。

石室内が攪乱されているという条件を加味して考えねばならないが，確認された遺物は，玄室西側西壁沿いと，北東隅から東壁沿いに集中している傾向がある。

玄室北東隅には，須恵器提瓶が1個置かれ，その南に東壁にほぼ接して小刀一振が，切先を入口側に，刃を石室中央部に向けて出土した。玄室西側では，直刀，小刀をはじめ鉄鏃・馬具及び棺金具とみられる金銅製金具（4個）等が確認されたが，このうち直刀（刀身3.7cm茎8cm）は，玄室前半部西壁に接し，切先を入口側に，刃を壁に向けて出土している。この直刀切先部の下に馬具（轡）があり，直刀の周辺に鉄鏃，金銅製棺金具等が確認された。さらに，玄室奥半部西壁寄りに小刀一振があり，その周辺に鉄鏃，耳環等が認められた。なお，耳環は東壁寄りの小刀付近，西壁寄り小刀付近，及び石室中軸線に沿って奥壁から0.7m，1.7mのところの4ヶ所から各1個づつの4個が出土している。これらのいずれかが対になるものかどうかは，現状では不明である。

第3表　72号墳出土土器

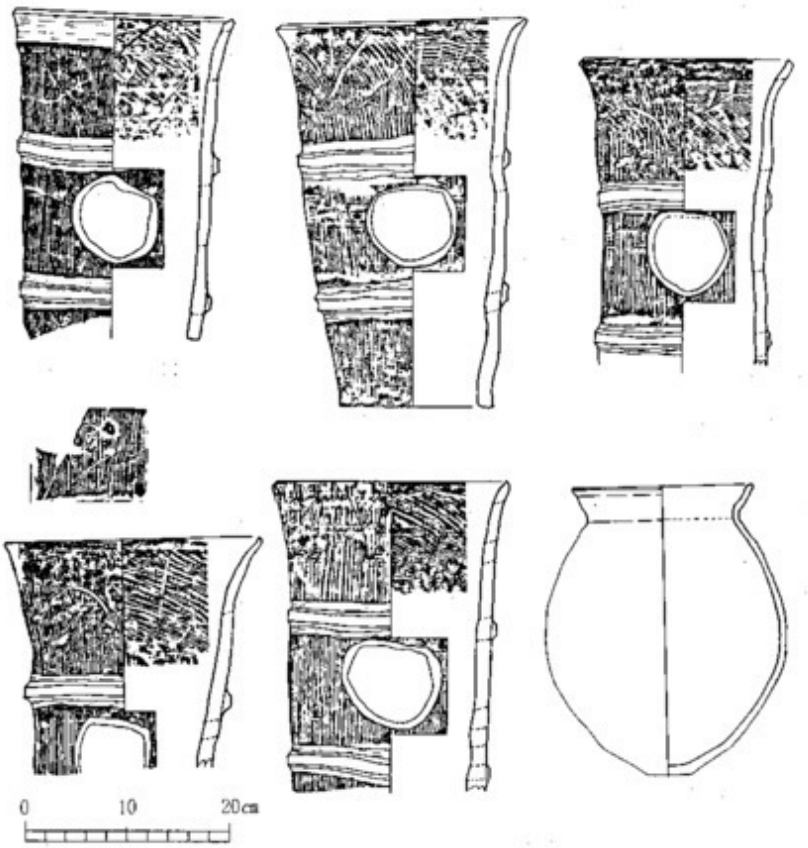
土器番号	器種	法量	技法等	胎土	色調
	須恵器提瓶	器高 21.7 口径 9.7 胴径 17.8	口頸部はロクロを利用した横ナデ調整。焼成は良くない。	良	淡褐色

8　七ツ石第1号墳（上毛古墳綜覧記載漏）

イ　墳丘及び外部施設

地表面からでは本古墳の存在は推測することはできなかったが，第70号墳周堀調査中，墳丘南西側周堀と接するような小規模の周堀が認められ発見された。墳丘は平夷されており，マウンドは認められないが，周堀内に転落した形で出土した埴輪を結ぶ弧が直径15mの円周上に乗り，周堀断面の立ち上がりから周堀内側径約12m程の円墳が想定できる。

本古墳の主体部は調査対象区域から除外されているため，周堀部6分の1を調査したのみにとどまり，内部施設及び第70号墳との切り合い関係は不明である。



第3図　七ツ石1号出土遺物

9　七ツ石第2号墳（上毛古墳綜覧記載漏）

イ　墳丘及び外部施設

地表面からでは本古墳の存在は推測することはできなかったが，第72号墳北側トレンチの西側断面に切り合いが認められ発見された。発掘調査の結果，主体部は二ツ岳軽石とC軽石を含む黒色土層の下部に在り，墳丘盛土及び周堀は特に認められなかった。

ロ　内部施設

主体部は輝石安山岩の割れ石を用いた箱式棺状石室で，密閉状態のままで良好な保存状態であった。長軸は東西方向N—72°—Eにとる。

石室各部の寸法は次のとおりである。（単位cm）

北長壁	南長壁	東短壁	西短壁	深　さ
163	160	43	20	20

石室は東西短壁各々1石，南北両長壁各々5石で，割れ石のひら面を用いた壁で構成されており当時の地山を掘り込んで構築されている。床面には10cm×10cm前後の角礫を敷きつめている。

石室の蓋は壁用石と同質の割れ石を4石使用しており，蓋石間には小形の礫をそえ，また，30㎝×40㎝前後の石を北長壁側に3石，南長壁側に2石沿え，更にその上に白色粘土を用いて閉鎖している。

ハ　出土遺物

石室は密閉状態であったが，人骨及び副葬品等は検出されなかった。

10　土壙

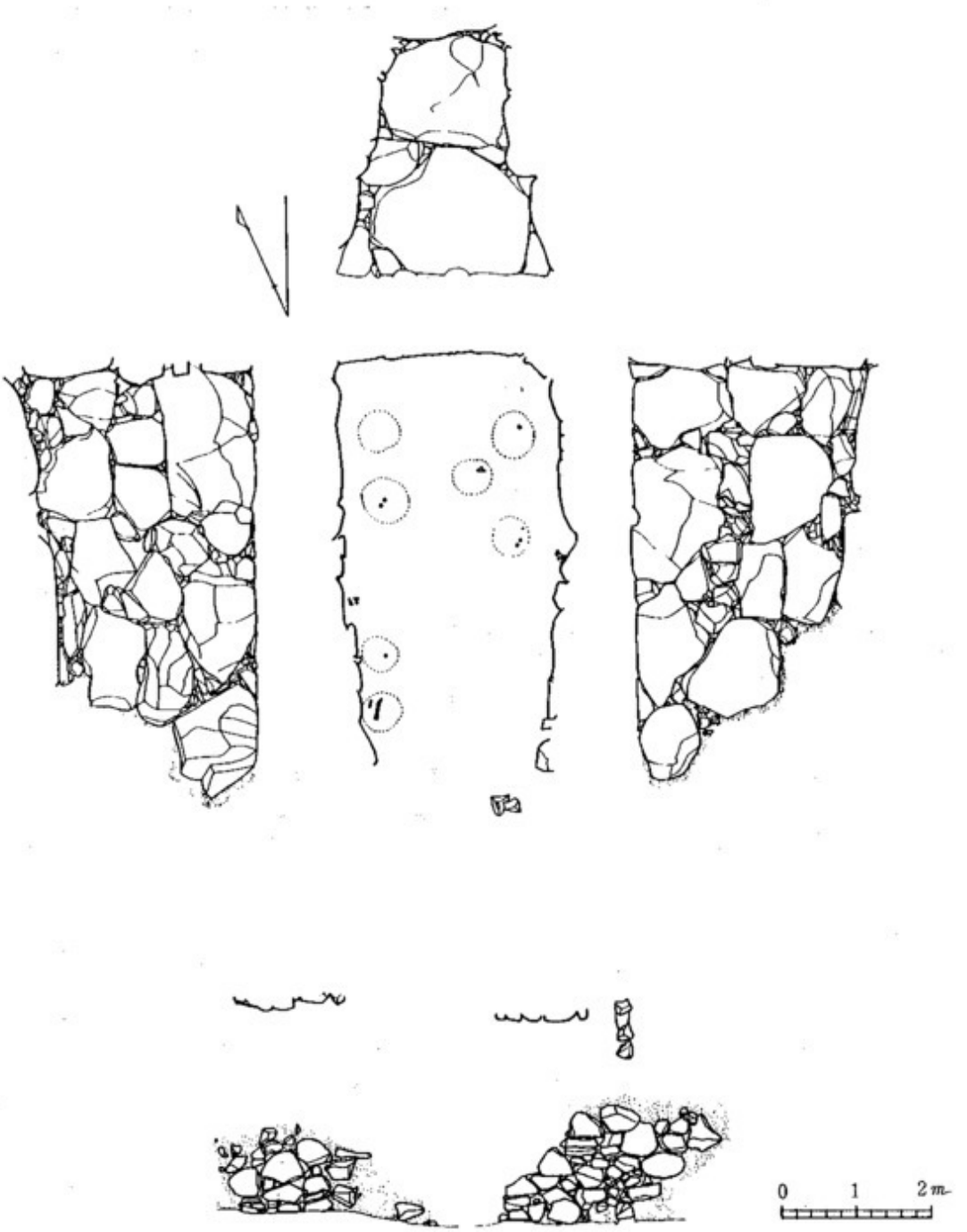
第70号墳南西の周堀外側立ち上がり部分に位置する。大きさは3m×1.5m，深さ60～70㎝の長方形の土壙で，ローム層を掘り込んでいる。遺構内の堆積土は2つに大別され，底部付近は落ち込んだロームと黒色土との混土で，上層はC軽石を含んだ黒色土で固くしまっている。

遺構内からの出土遺物はなく，その性格についても不明である。

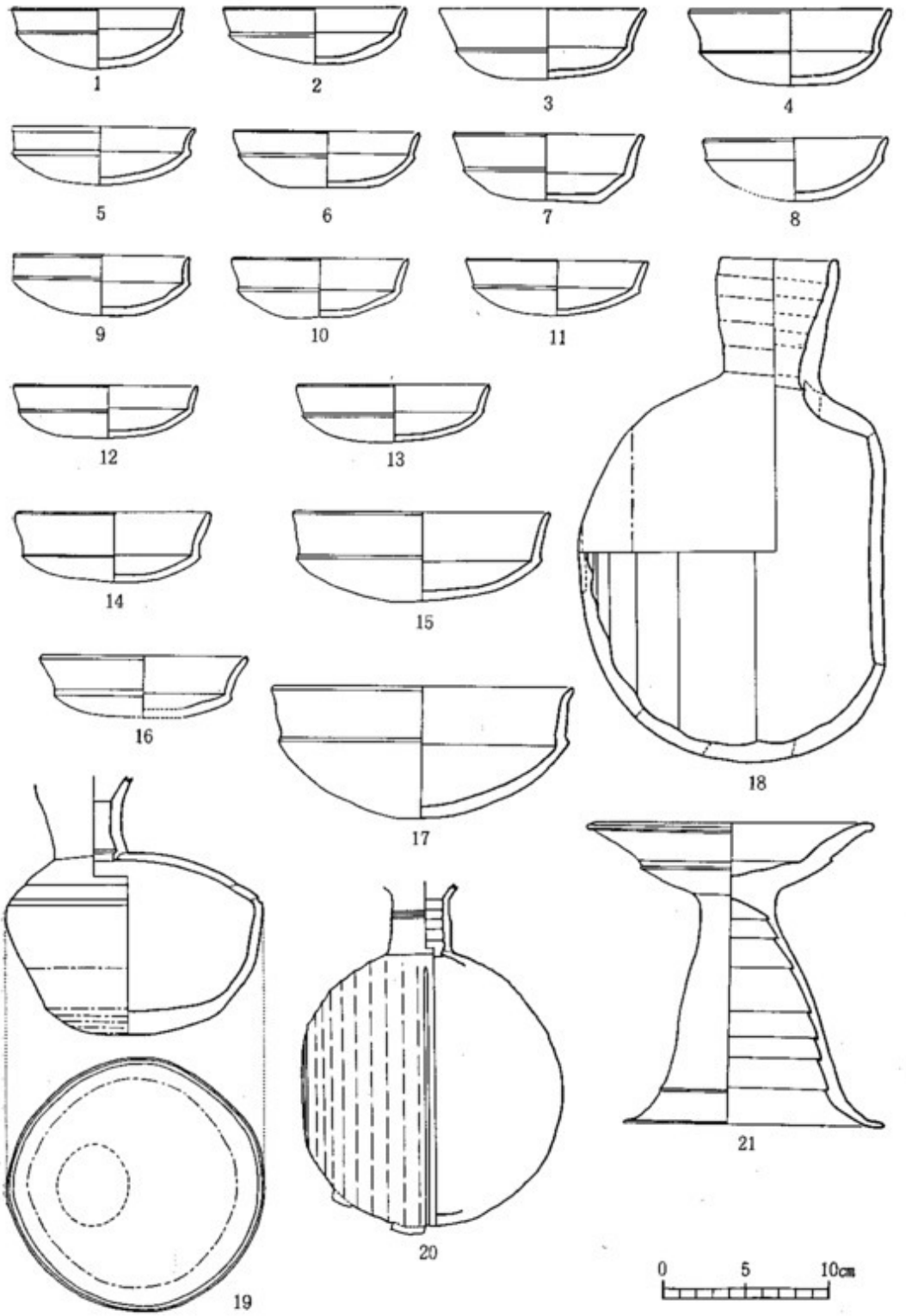
Ⅳ　ま　と　め

発掘調査を実施した結果，検出した遺構・遺物をとおして次のような点が明らかになった。

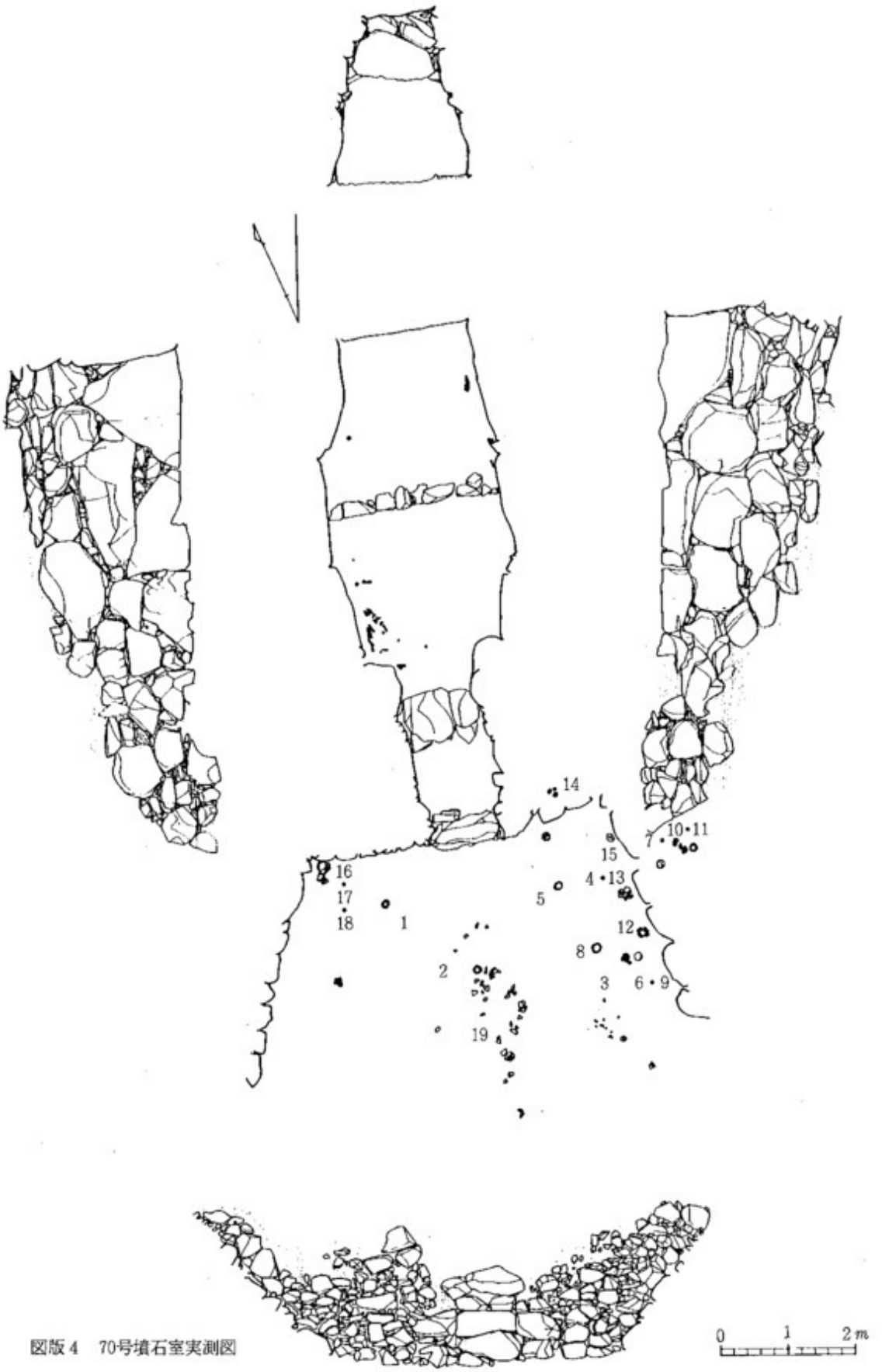
- 発掘調査予定地のうち，すでに知られていた荒砥68号，70号，72号墳の3基の古墳のほかに，今回の調査により七ツ石Ⅰ号墳，七ツ石Ⅱ号墳が加わった。
- 3基の横穴式石室の古墳のうち荒砥68号墳・荒砥70号墳は巨石巨室である。いづれの古墳とも高麗尺で企画され構築されていたようである。また，この3基の古墳は浅間山C軽石，榛名山二ツ岳のFP軽石を混入した黒褐色土層の上に構築されていたことがわかり，遺物・古墳構築の企画，尺度からして7世紀中頃のものと思われる。
- 前庭付設（68号・70号墳）胴張りのある古墳（72号・70号墳）玄門（72号墳）のある石室を調査できたことは荒砥地区の古墳に新資料を加えたことになり，古墳の変遷を知る上でも新たな資料が得られた。
- 前庭は墓前祭的儀礼の場と考えられるが，前庭における土器の配置と器種及び中央部に意図的に破砕され，その破片が散乱している状況は当時の墓前祭のあり方を考察する上で貴重な資料と言えよう。
- 七ツ石Ⅰ号墳の周堀から検出した円筒埴輪には「 」・「」の線刻が付けられており埴輪生産地を推定する上で貴重な資料と考えられる。
- 七ツ石Ⅱ号墳は，箱式棺状竪穴式石室で密閉状態で発見されたが遺物が発見されなかったしかし，竪穴式石室の資料を加え今後の竪穴式石室変遷を知る上で新たな資料が加わった。



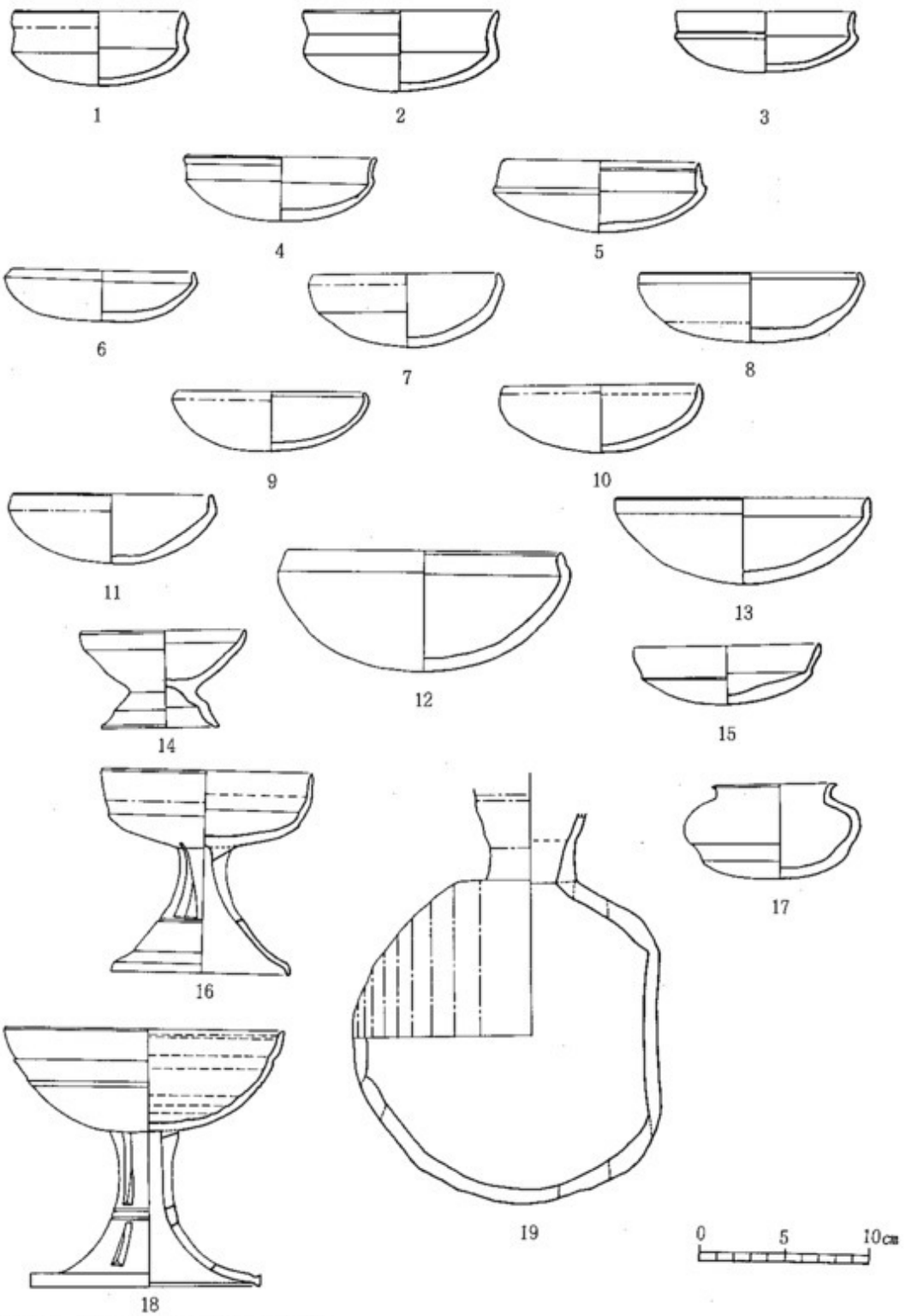
図版2　68号墳石室実測図



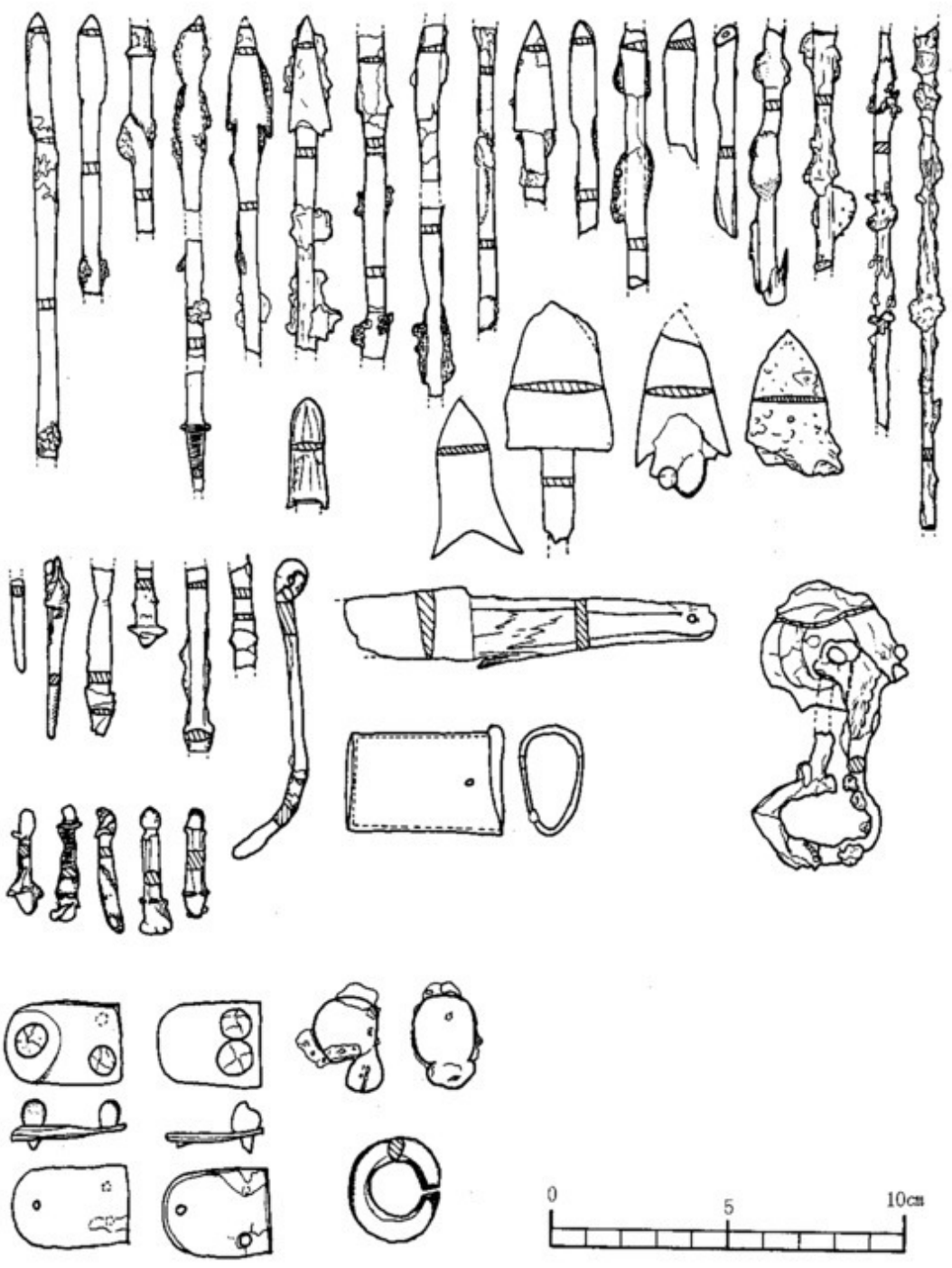
図版３　68号墳前庭部出土土器実測図



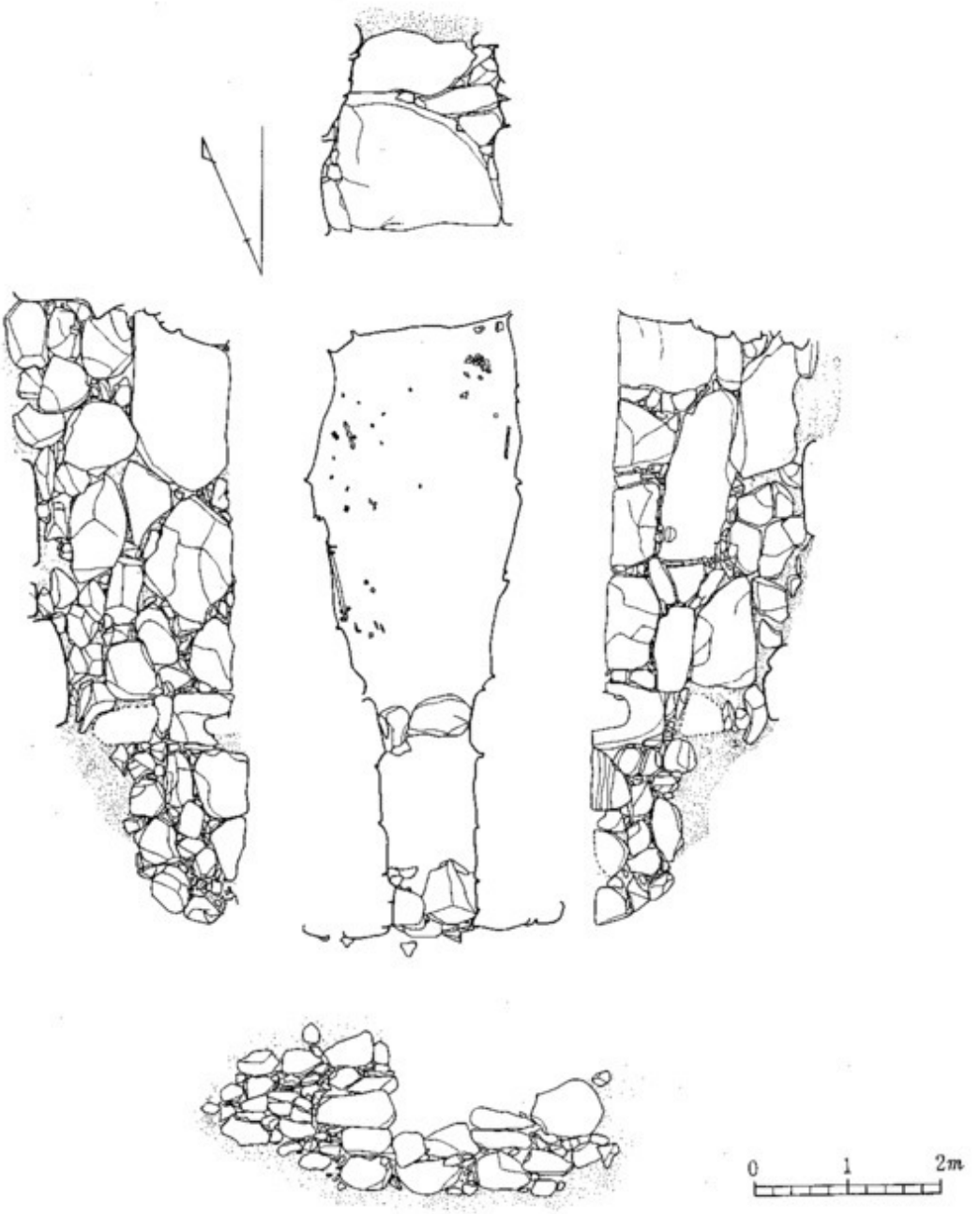
図版4　70号墳石室実測図



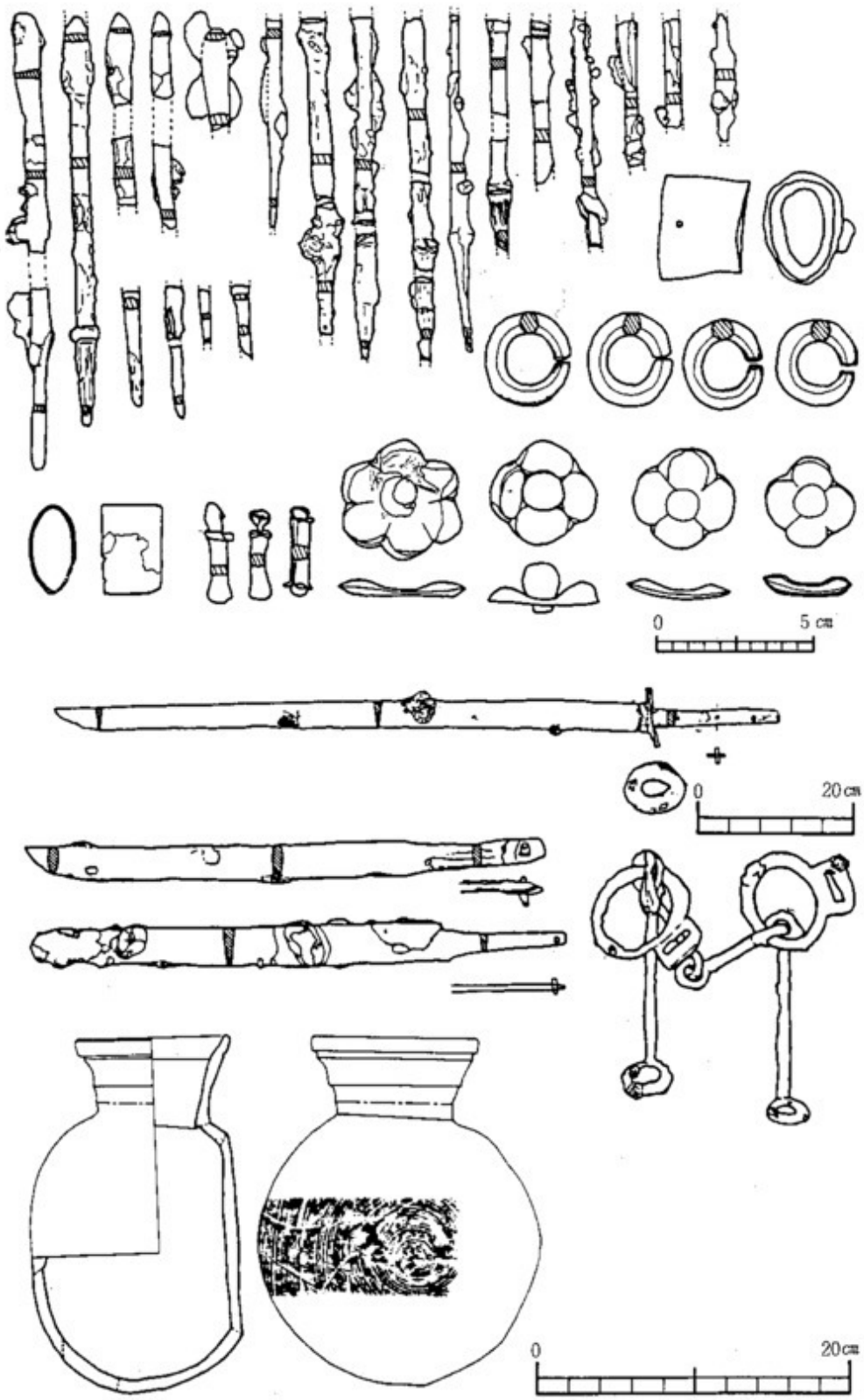
図版5　70号墳出土遺物前庭(前庭部)



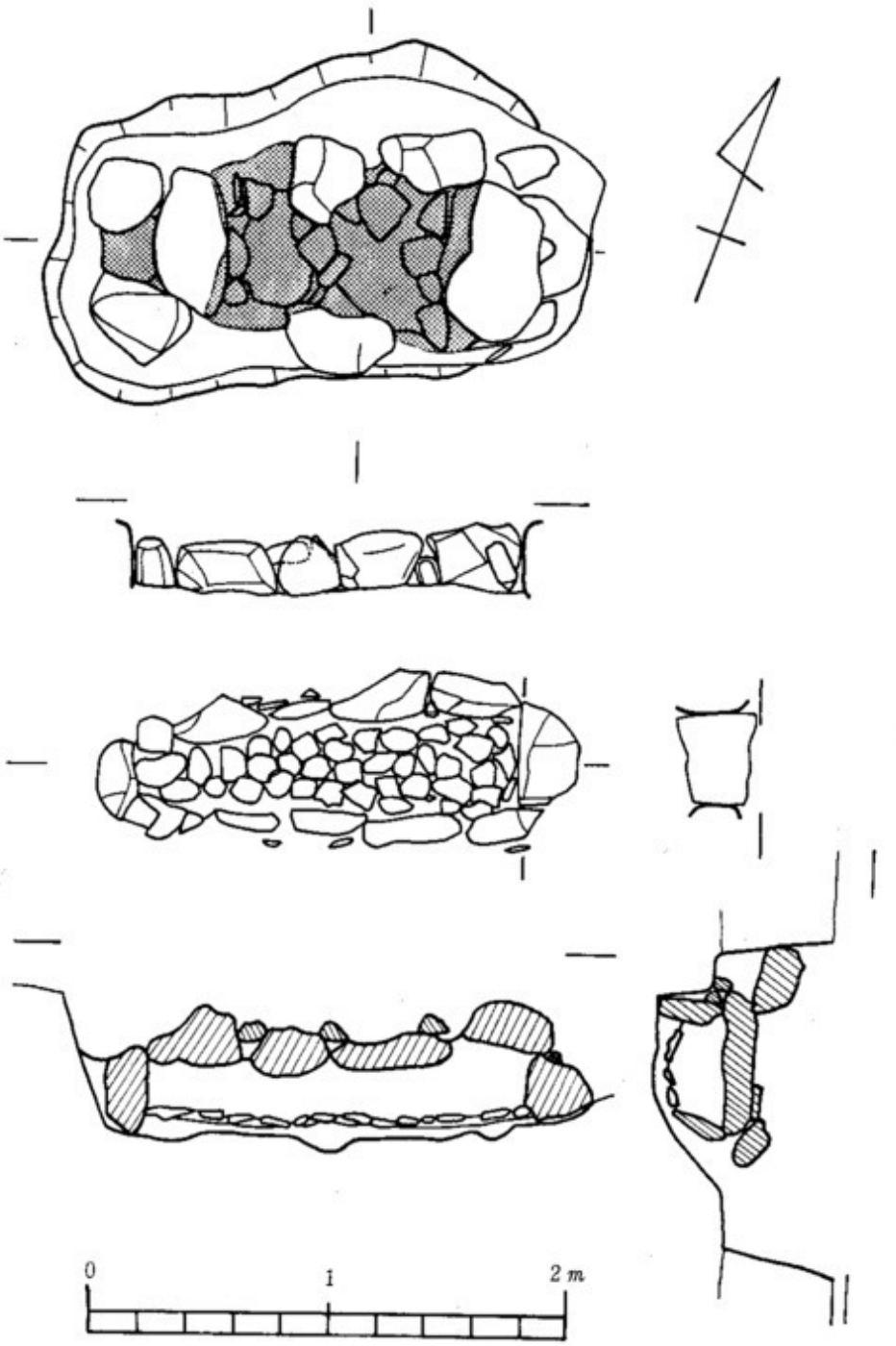
図版6　70号墳出土遺物(石室内)



図版7　72号墳石室実測図



図版 8　72号墳出土遺物(石室内)



図版９　七ツ石１号墳蓋石及び石槨実測図

図版10

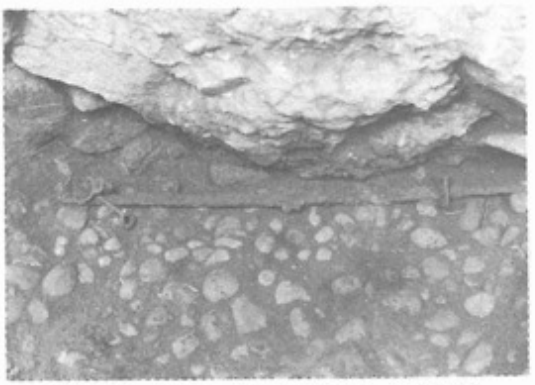
68号墳　石室内（奥壁）

70号墳　前庭左側隅，高坏短頸壺出土状況

70号墳　前庭全景（正面）

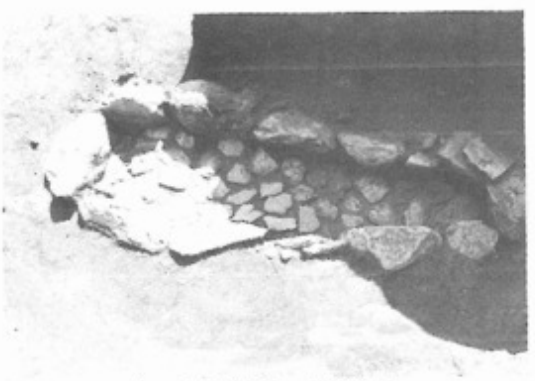
72号墳　全景（羨道前の状況）

70号墳　前庭全景(向かって左側から石積状況)



72号墳　直刀，馬具出土状況（石室内）

70号墳　石室内（間敷切）状況



七ツ石Ⅰ号墳　石槨全景

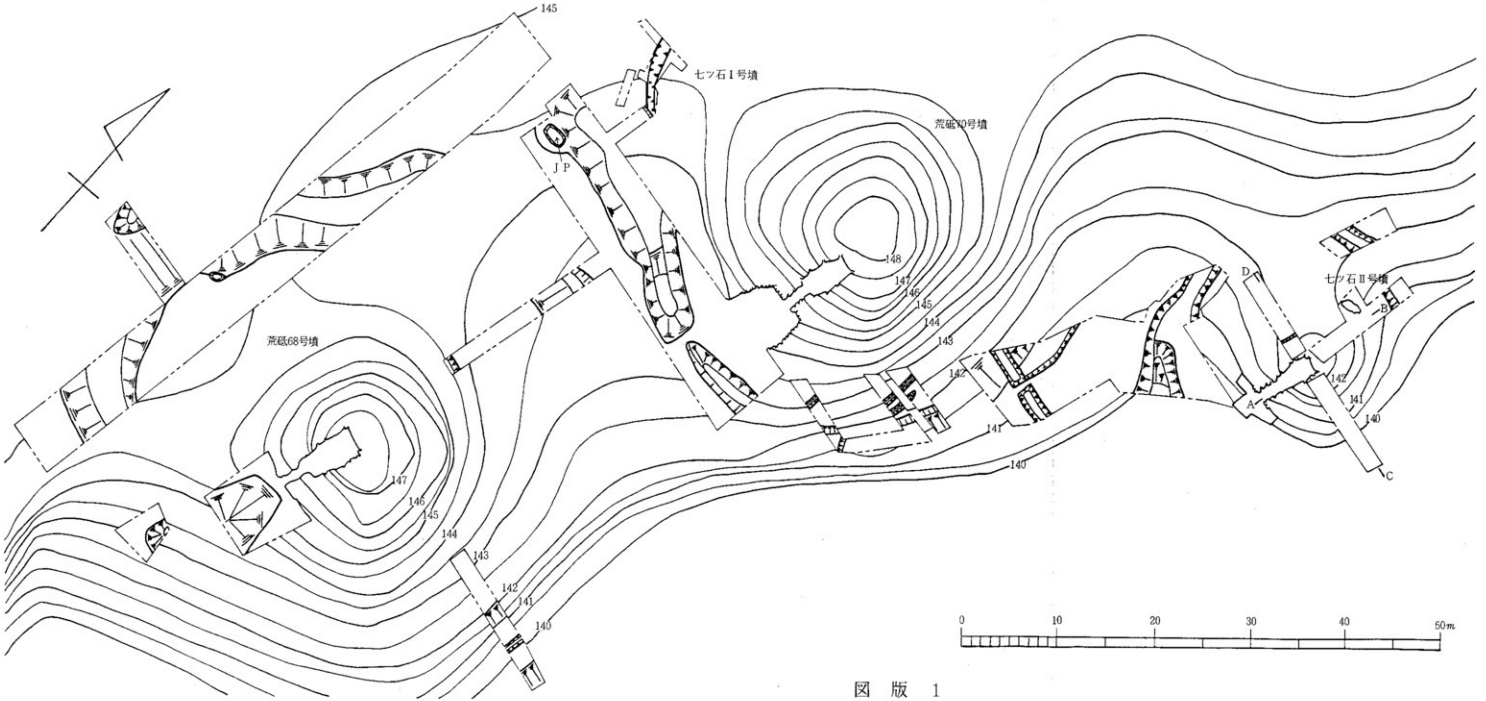

145
七ツ石Ⅰ号墳
荒砥70号墳
ＪＰ
荒砥68号墳
148
147
146
145
144
143
142
141
140
七ツ石Ⅱ号墳
A
B
C
D
0
10
20
30
40
50m

図　版　1

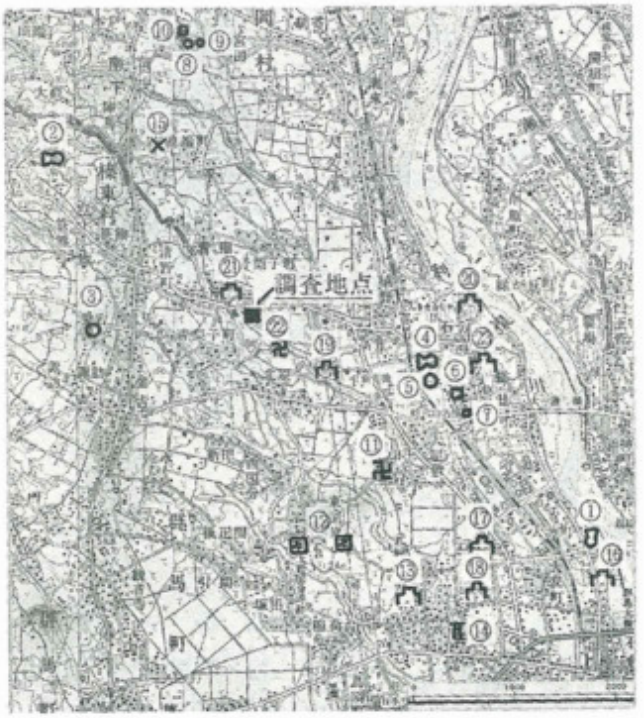
清里南部遺跡群

Ⅰ　遺跡の位置と環境

本遺跡地は榛名山の東南麓が，渋川方面から南流してくる利根川に切断される手前に位置している。前橋市街地（県庁付近）から北西約4kmの地点である。遺跡は南の八幡川と北の午王頭川にはさまれた台地上に，八幡川に接して所在し，標高は約150mである。地目は桑畑または畑地となっていた。

本遺跡地付近は，以前から縄文式土器の散布地および古墳の分布地と知られていたが，踏査の結果，奈良・平安時代の土器（土師器・須恵器）の散布も認められるにいたった。

周囲の歴史的環境（第1図）を見ると，古代では最末期の古墳を含む総社古墳群や南下の古墳群，国府跡や国分寺跡等があり，中世では蒼海城をはじめとする多数の城館址や，梵鐘や層塔を現在に伝える（伝）東覚寺跡等が認められる。近世に入ると利根川右岸に接して総社城が構築され，総社の町割も認定された。以上にみられるように，本遺跡地付近は，上野国の古代から近世の歴史を知る上で注目すべき地域といえる。



第 1 図

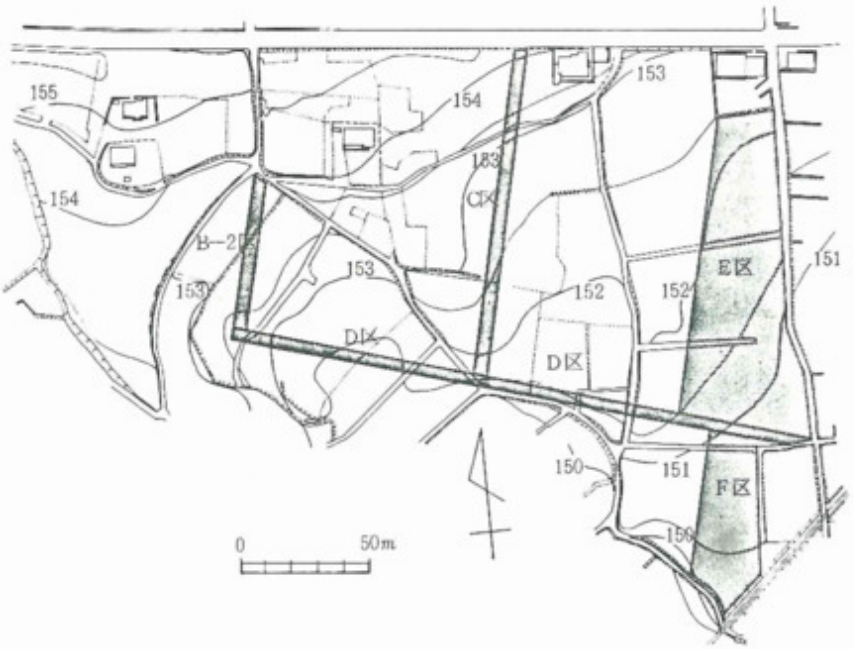
古代	1．王山古墳　2．高塚古墳　3．金古愛宕塚古墳　4．総社二子山古墳　5．総社愛宕山古墳　6．宝塔山古墳　7．兜穴山古墳　8．南下A号古墳　9．南下B号古墳　10．南下E号古墳　11．山王廃寺跡　12．国分寺跡　13．（推定）国府跡　14．総社神社　15．陣場遺跡
中世	13．蒼海城跡　16．石倉砦跡　17．大友館跡　18．村山城跡　19．檜田城跡　20．勝山城跡　21．青梨子の砦跡　22．（伝）東覚寺跡
近世	23．総社城跡

Ⅱ　発掘調査の概要

1．発掘調査の方法

事前の表面踏査で遺物の濃密散布地と認められた範囲のうち，掘削の予想される道路予定地（巾員6 m），水路予定地，畑地から水田への転換地の3つの部分を調査対象地とした。南北に走る道路予定地を西からB—2区，C区，東西に走る道路予定地をD区，水路と水田転換地部分を北からそれぞれE区・F区と命名した（図2）。

予め遺構の存在が予想されたので，重機による表土（耕作土）層の除去後，調査区全体に2 m×2 mの試掘トレンチを市松模様状に設定し（別刷付図参照），まず，調査区全体の遺跡の性格・数量等を確認することにした。この後，新たに調査方針を練り，随時遺構を拡張することにした。



第　2　図

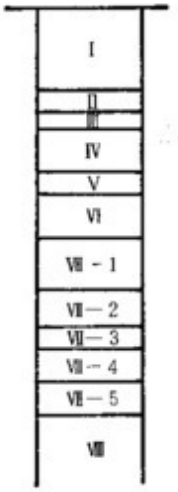
2．地層（標準層位）（注1）

谷地あるいは凹地と遺構の存在する台地上とでは，若干層序が異なるが，後者のものを図示すると左図のとおりである。遺構および遺物との関係を述べると，縄文式土器・石器の包含層はⅦ層，土師器・須恵器使用竪穴住居跡の確認面はⅤ層上面ないし，Ⅵ層上面（Ⅴ層のない所）である。

3．遺　　構

(1) 概　　要

本遺跡地の発掘調査で検出した遺構は，竪穴住居跡28，ピット19，柱穴状ピット群1ヶ所，地下式土壙2，土壙5，溝7，溝状遺構1，井戸6で総遺構数は69である。時代別には下表の



I層：耕作土
II層：B軽石を多量に含む黒褐色土
III層：B軽石の純層
IV層：二ツ岳系の軽石を混ぜる黒褐色土。やや粘質をおび焼土粒や炭化物を混ぜる。
V層：F・A純層（円地以外はほとんどない）
VI層：C軽石を多量に含む黒色土
VII－1層：粘質黒色土
－2層：粘質赤褐色土
－3層：粘質灰色土
－4層：粘質黒色土。細い白色スコリアと焼土粒を混ぜる。
－5層：粘質明黒褐色土
VIII層：淡黄褐色土

※ VII－1～VII－5層の判別不可能な場合は，単にVII層とした。

第 3 図

とおりである。

時代	総数	竪穴住居跡	ピット	土壙	溝（溝状）	井戸
縄文時代	1	0	1	0	0	0
平安時代	50	28	18	0	3	1
中世	2	0	0	2（地下式）	0	0
江戸時代	11	0	1（柱穴状ピット群）	0	5	5
不明	5	0	0	5	0	0

(2) B－2区

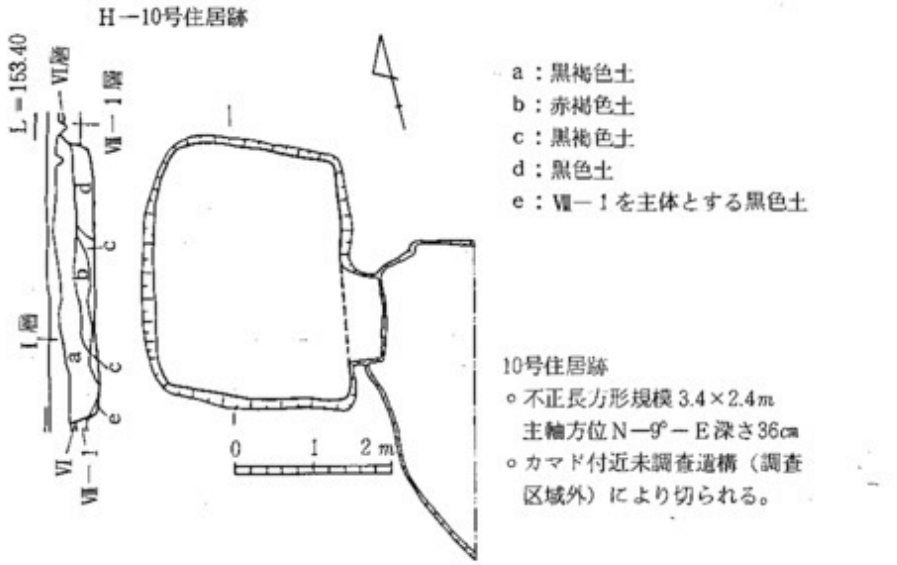
区の北端から南にかけて谷状の地形になっており，遺構は確認されなかった。

(3) C区

北から南にかけて緩傾斜地をなし，区の北部に竪穴住居跡1，南半に地下式土壙2，土壙5，溝4，井戸5，柱穴状ピット群1ヶ所の計17遺構が集中して存在した。また，C区の東西の未調査区域内にも，北部ではカマドを持つ竪穴住居跡が確認されており，南半では検出遺構と同様のものの存在が推定された。

(a) 竪穴住居跡（10号）

東壁にカマドを持つものと思われるが，ちょうどこの箇所が破壊されていた。遺物の出土はない。10号住居跡の東西の未調査地にはカマドを持つ竪穴住居跡の存在が確認されている。



第4図　H　－　10　号　住　居　跡

(b)　地下式土壙

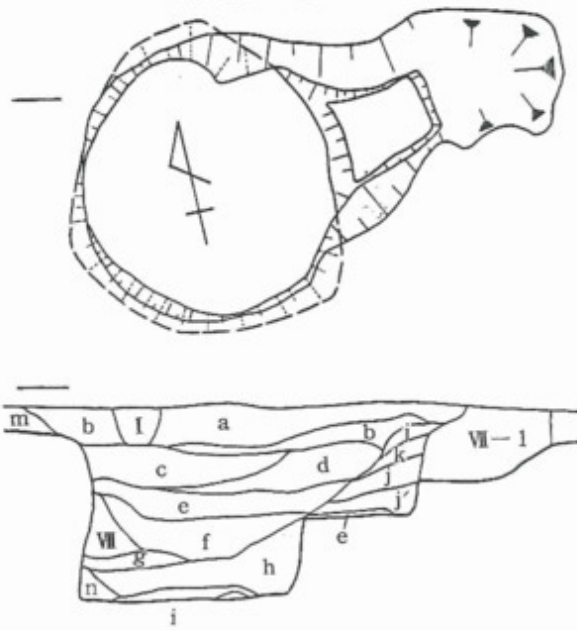
本遺構は南北に接して2基検出された。大小の差はあるが2基とも似た構造で，ともに単室構造の，地山を刳り貫いてつくった土壙である。両者とも東側に入口部を付設し地下室部との間に段差を持つが，入口部自体に段差のあるものとないものとがある。地下室部（主室）は，その床面において矩形を意図し，長軸を南北に置いている。側壁はほぼ垂直に立つ。天井はすでに落下していたが，側壁上端の状況から南北に長い舟底型またはドーム状のものが想定される。また，落下した天井は床面にほぼ密着して乗っており，構築後早い時期に落下したものと思われる。

遺物は，地下式土壙2で床面上から炭化物の小片が出土したが，その性格は不明である。他はすべて天井落下後の埋土中からの出土物で，本遺構との関係は不明である。

本遺構の性格を物語る積極的な資料はないが，中世に鎌倉周辺で営まれたやぐらと呼ばれる墳墓と似た構造を持つことが注目される。

主なデーターを掲げると下のとおりである。(70ページ参照)

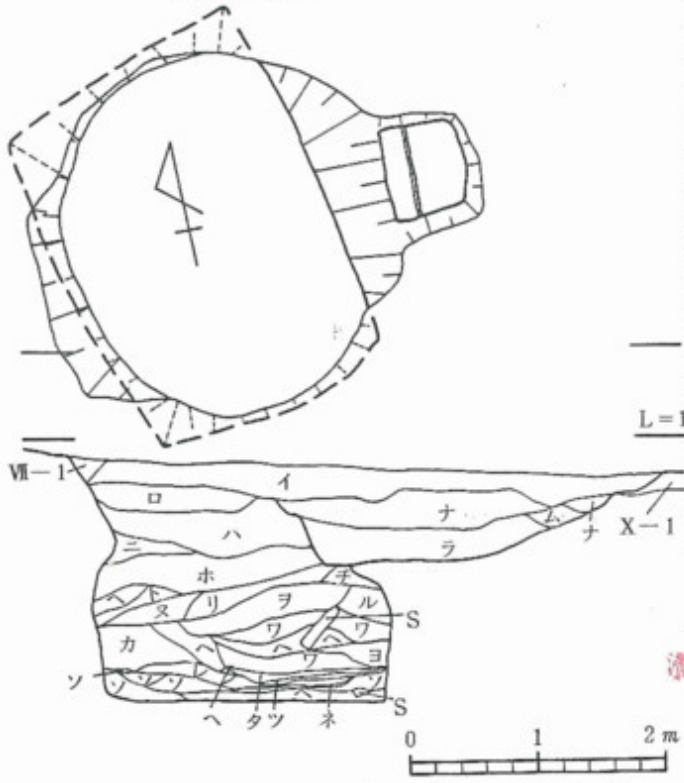
地下式土坑1号



L＝152.30

a：黒褐色土Ⅷ層が多量に入る。
b：黒褐色土Ⅷ層混入砂質でしまる。
c：黒褐色砂質土
d：黒褐色土ややしまるⅧ層少し混入
e：黒褐色砂質土
f：黒褐色土しまるⅧ層混入
g：黒褐色砂質土砂質強い
h：黒褐色粘質土Ⅷ層混入
i：黒褐色粘質土しまるⅧ層混入
j：黒褐色粘質土
j′：jに似る、よりしまる
k：黒褐色土Ⅷ層多く混入
l：黒褐色粘質土強くしまるⅧ層少し混入
m：黒褐色粘質土
n：Ⅷ層下の灰白色砂礫層

地下式土坑2号



L＝152.40

イ：黒褐色砂質土、Ⅷ層混入
ロ：黒褐色砂質土
ハ：黒褐色砂質土Ⅷ層混入
ニ：黒褐色土
ホ：Ⅶ－1層（焼土粒少し混る）
ヘ：Ⅷ層
ト：黒褐色粘質土Ⅷ層混入
チ：Ⅷ層＋Ⅶ－1層
リ：明黒褐色土Ⅷ層混入多し
ヌ：Ⅶ－2層
ル：淡灰褐色土（ソ＋ヘ）
ヲ：黒褐色砂質土Ⅷ層少量混入
ワ：Ⅶ－2層＋Ⅷ層（ヌ＋ヘ）
カ：ソ＋ヘ、Ⅷ層少い
ヨ：暗褐色砂質土Ⅷ層混入
タ：Ⅷ層＋Ⅵ層
レ：Ⅶ－1層
ソ：Ⅷ層下の灰白色砂礫層
ツ：Ⅷ層＋Ⅶ－2層（ヌ＋ヘ）ヘ主体
ネ：黒褐色土しまりなし

溝 CM－1 埋土
ナ：黒褐色砂質土 1cm大の炭化物多し
ラ：黒褐色砂質土しまる
ム：黒褐色土Ⅷ層多く混入

第5図 地下式土壙

（単位 cm）

遺構名	地下室部（主室）			入口部床面巾	備考
	長軸長	短軸長	側壁高		
地下式土壙1	2.40	2.14	0.80	0.50	天井落下。構遺確認面から地下室部床面まで1.60m。
地下式土壙2	3.00	2.10	0.90	0.70	天井落下。入口部に段差。遺構確認面から地下室部床面まで1.90m。

(c) 溝

C区において溝は4条検出された。断面の形状は溝がやや一形に近い形をしているが，全体として椀底型であった。溝1・2は井戸と接して，あるいは端部を切り合っている。井戸1の排水溝とも考えられるが不明である。溝1は地下式土壙2の天井落下後の埋土を切ってつくっている。

遺物は溝1の南部のコーナー付近に集中し，一時に廃棄されたと思われる多量の人頭大の石に混って，石臼片・陶器片等が出土した。古銭（寛永通宝）は10数枚が集石の上に乗って出土した。

単位：m（巾・深さは検出面を基準とする）

遺構名	上端巾	深さ	方位	備考
溝 1	2.0～3.0	0.3～0.6	N15°E—E20°S	北端を井戸1に接す。人為的な集石と遺物。
溝 2	2.0	0.2～0.6	E 7°N	西端を井戸1と切り合う。
溝 3	0.9～1.2	0.3～0.4	E 5°S	溝4と直交，切合関係不明。
溝 4	0.6～1.0	0.2	N14°E—N 4°E	溝1と平行に走る。

(d) 井戸

5基確認された。井戸枠等は確認されないで，すべて素堀りであった。断面の形状を見るとロート状のもの3，円筒状のもの2である。井戸5を除きいずれも，人頭大前後の石と土砂で人為的に埋めた形跡を持つ。遺物はこの部分から石臼，板碑片を中心として出土する。井戸5・6は底部に近い付近と見られる所から欠損した石臼が出土した。

主なデーターを列記すると下表のとおりである。

単位：m（大きさの最大径・深さは検出面を基準とする）

遺構名	形状		大きさ			備考
	平面	断面	最大径	最小径	深さ	
井戸1	円形	ロート状	3.60	1.00以下	1.10以上	溝2西端と切り合う。1.10mで湧水。
井戸2	楕円形	ロート状	2.50	1.00以下	1.75以上	1.75mで湧水。
井戸4	円形	ロート状	2.60	0.80	2.60前後	
井戸5	円形	円筒状	1.14	0.80	1.90前後	
井戸6	円形	円筒状	0.86	0.80	2.05前後	2.05mで湧水。

(e) 柱穴状ピット群

地下式土壙の南に掘立柱建物の柱穴跡と思われるピット群が検出された。東西6m南北9m程の範囲に分布し，なお東につづくと思われる。ピットの規模は，方形で一辺40cm深さ70

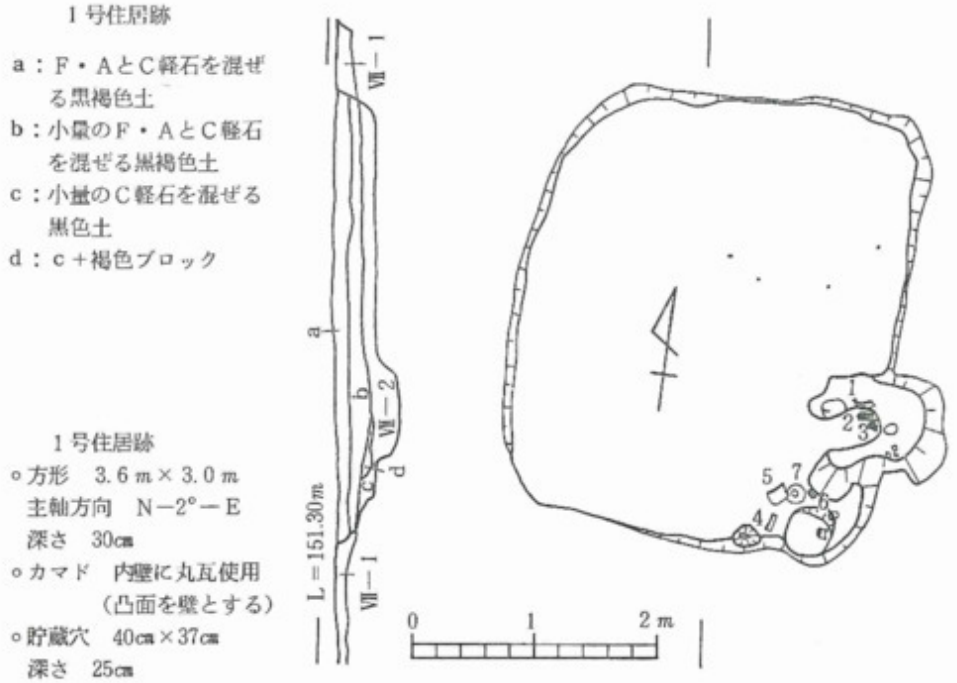
cm（ともに遺構確認面で）程度から，一辺20cm深さ10cm 内外のものまで6つのタイプがある。しかし，棟数および柱の配置を想定するには至らなかった。ピットの埋土は表土（耕作土）に似た土で，ピット内から古銭（寛永通宝）と長石釉のかかった陶器片が出土している。

(f) 土壙

柱穴状ピット群の南に4基，北に1基の計5基が検出された。形状はいずれも方形で，大は1m×2m，小は1m×1mの規模で，深さは検出面から20cm～30cm程であった。埋土は柱穴状ピット群と同様に表土（耕作土）に似た土であった。5基とも遺物の出土を見なかった。

(4) D区

この区はC区と交わる点を境にして，西半はB－2区と一連の谷状の地形をなし，遺構は確認されなかった。東半ではカマド（内壁に丸瓦使用）を持つ竪穴住居跡（1号）とE区の溝6の続きが検出された（溝は更に南の未調査地区を通って谷地に落ちるものと思われる。（溝6はE区で扱う。）



第6図　1　号　住　居　跡

(5) E区

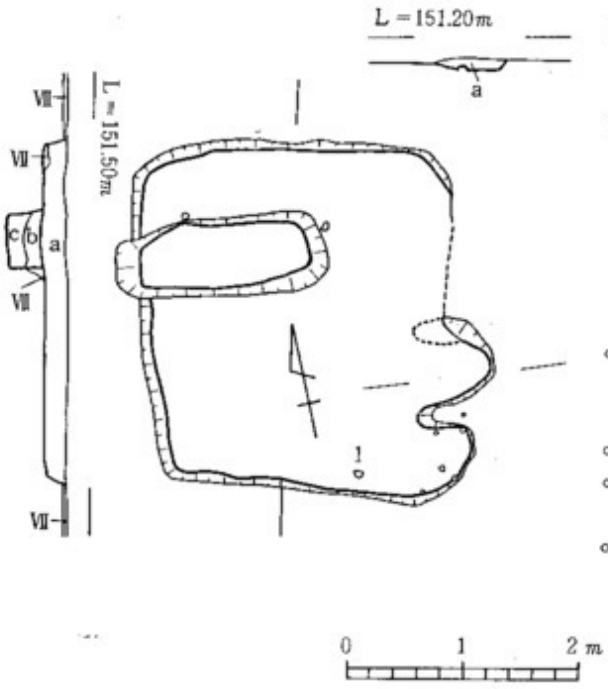
この区で検出された遺構は，カマドを持つ竪穴住居跡14，井戸1，溝3，溝状遺構1，ピット3の計22遺構である。今回の調査では確認されなかったが，E区の北端付近では多量の鉄滓・羽口等が出土し，製鉄関係の遺構の存在が推定された。

(a) 竪穴住居跡

いずれもカマドを持つ竪穴住居跡で，北と南に群在する。概して北のものは深めな竪穴で

第7図　2号，8号，26号，27号住居跡

5号住居跡



a：C軽石および二ツ岳系の軽石と焼土粒を混ぜる黒褐色土層
b：黄灰色土（Ⅷ）のブロックを混ぜるしまりのない黒褐色土層
c：C軽石を混ぜるしまりのない黒褐色土層

5号住居跡
- 方形　2.8m×2.6m
  主軸方向　N－13°－E
  深さ　20cm
- カマド　掘り残して袖とする。
- 床面下ピット　1.80m×0.70m
  深さ　30cm
- カマド手前が固く踏みしめられているのを除き、床面はやわらかい。

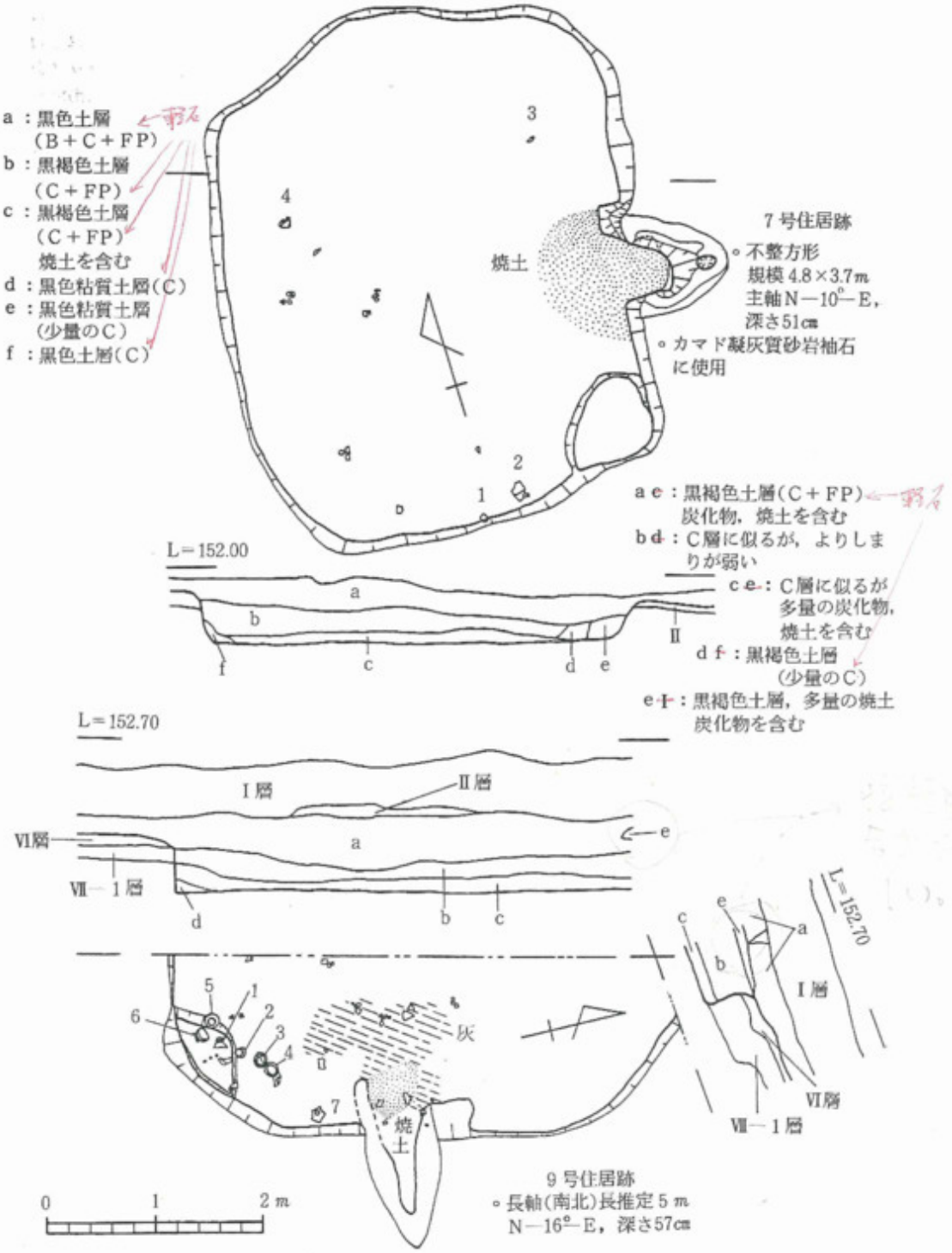
第8図　5　号　住　居　跡

6号住居跡

a：多量のC軽石と若干炭化物を混ぜる黒褐色土層
b：黄灰色土（Ⅷ）ブロック
c：焼土粒と炭化物を混ぜる黒褐色土層

6号住居跡
- 方形　4.2m×3.8m
  主軸方向　N－3°－W
  深さ　25cm
- 床面は全面やわらかい。

第9図　6　号　住　居　跡



第10図　7　号，　9　号　住　居　跡

H－11
- 方形　規模　5.5m×4.0m
  主軸方向　N－15°－W　深さ　60cm
- カマド　袖に凝灰質砂岩使用
- 貯蔵穴　不整円形　1.07m×0.85m

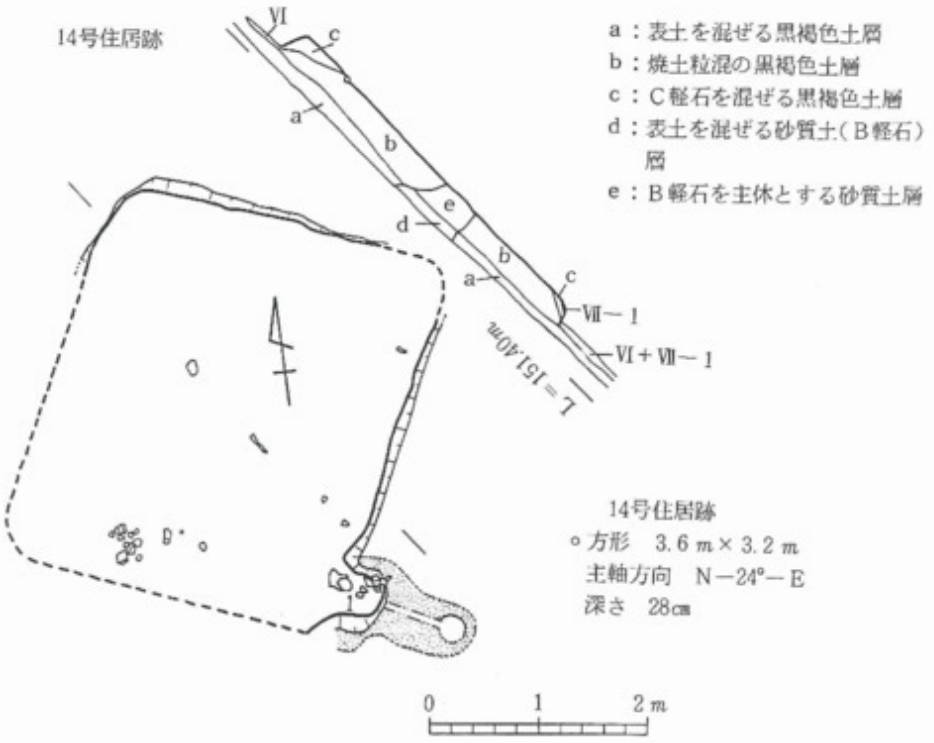
H－12
- 方形　規模　4.0m×3.3m（推定）
  主軸方向　N－12°－E　深さ　49cm
- カマド　袖に凝灰質砂岩使用
- 貯蔵穴　方形　0.83m×0.83m

H－13
- 方形　規模　4.4m×3.3m（推定）
  主軸方向　E－5°－N　深さ　57cm
- カマド　南壁西寄り　粘土を素材

H－15
- 方形　規模　5.0m×3.4m
  主軸方向　N－12°－W　深さ　45cm
- 貯蔵穴　不整円形　0.55m×0.50m

重複関係
（新）（新）（新）
15号→11号→13号→12号

第11図　11号，12号，13号，15号住居跡



第12図　14　号　住　居　跡

重複が見られるのに対して，南では浅く重複がない等の相異点が認められた。

カマドの位置は，13号住居跡の南壁西寄，14号住居跡の東南隅を除くと，他はすべて東壁南寄りにあった。

(b)　溝と溝状遺構

溝3，溝状遺構1の計4条である。断面の形状はすべてU字形であった。溝5・6と溝状遺構は埋土より見てB軽石降下後のもので，それに近いころのものと見られる。溝7は埋土からC区の溝1～4と同じころのものと見られる。遺物は溝7の底部から溝1（C区）のものと類似した陶器が出土した他は認められなかった。

単位：m（上端巾と深さは検出面を基準とする）

遺構名	巾 上端	巾 下端	深さ	方位	備考
溝　5	1.40以上	0.64以上	0.45	N45°W	ローリングしたB軽石を主体とする埋土。
溝　6	2.45	1.00	0.57	E26°N—N12°E	上に同じ。溝7と切り合う（溝7が新）。
溝　7	6.00以上	3.00以上	1.00	N 7 °W	表土に似た埋土。溝6を切る。
溝状遺構	1.45	0.63	0.37		長さ2.93m。溝5・6と同じ埋土。

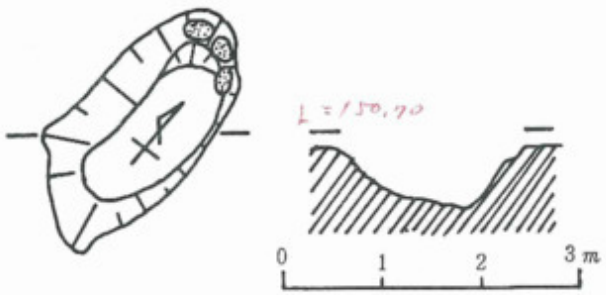
(c)　井　戸

北と南の竪穴住居群の中間に1基検出された（井戸3）。形状は平面が円形，断面ロート状形で，最大径2.43m，最小径0.75m，深さ1.79m以上（湧水で以下不明）のものと見られる。埋土はローリングしたB軽石を主体としており，溝5・6や溝状遺構と同じものである。井

戸枠や覆屋等の施設の跡等は検出されなかった。

(d) ピット

埋土から見て，縄文時代1，B軽石降下以後のもの2の計3基が検出された。前者（ピット1）は検出面で2.50m×1.50m，深さ0.50mの不整形で，埋土層中から胎土に繊維混入，羽状縄文施文の土器片が出土した。このピットの性格は不明である。後者は14号住居跡の埋土を掘削してつくっているもの（ピット2）と同住居跡の東に近接しているもの（ピット3）がある。両者はローリングしたB軽石を主体とする土で埋まっており，同じ性格のものと思われる。ピット3について見れば，検出面で直径1.00m，深さ16cmの円形で，更に底部中央付近に長径25cm，深さ14cmの柱穴状のピットがあった。両者とも遺物の出土はなかった。



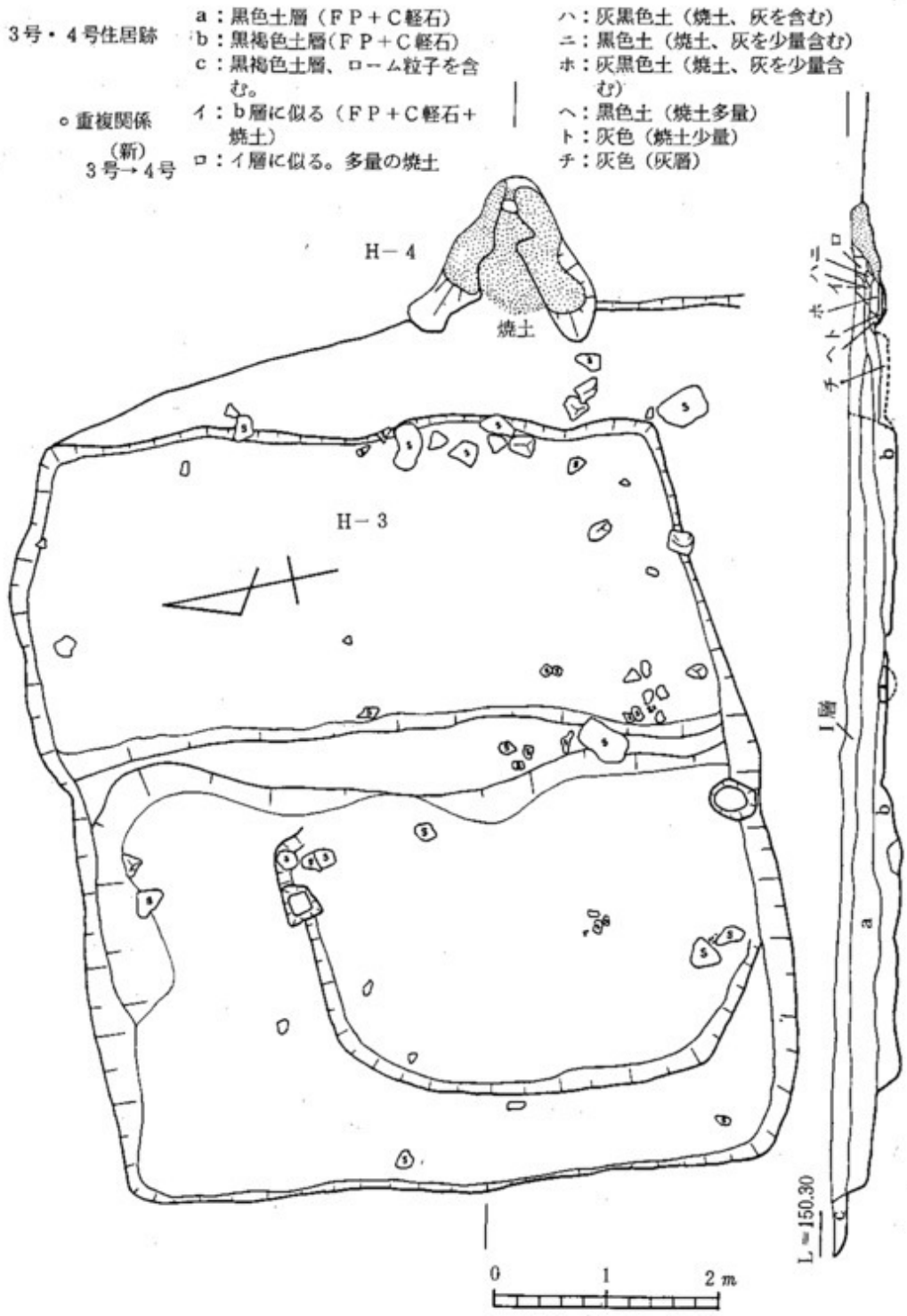
第13図 ピ ッ ト 1

(6) F 区

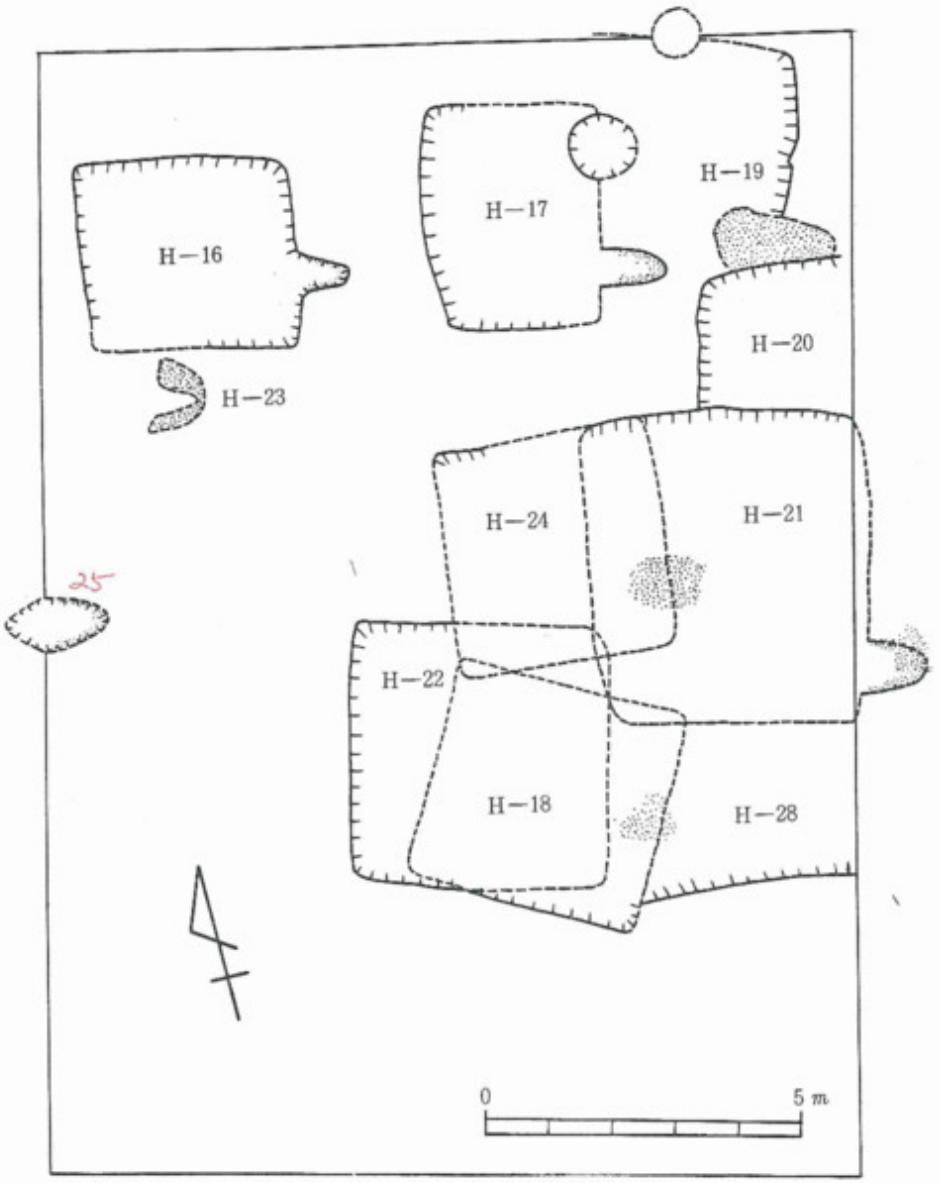
この区では，東壁にカマドを持つ竪穴住居跡13軒とピットが検出された。竪穴住居跡は13軒中11軒（16～25・28号）が約200㎡の範囲に重複しており，1軒1軒の範囲等の認定に困難を来たした。中にはカマド跡のみしか確認できないもの（23・25号），切り合い関係の不明なもの（16号と23号，23号と25号，18・21・22・24・28号の間），床面の判然としないもの等が目立った。遺物は埋土中と見られるものが大部分で，しかも所属住居跡の認定できないものが多かった。しかし，最も注目すべき遺物が出土したのもここであり，それには鉛釉陶器（三彩・緑釉），硯（風字硯・転用硯）・墨書土器・巡方等がある。他の2軒（3・4号）も互に重複していた。

ピットは柱穴状のものが大部分で，検出面で直径30～80cm，深さ30～90cmの範囲内に納まるものが大部分だった。これらの多くは，竪穴住居跡の重複地帯に多く見られた。竪穴住居跡との切り合い関係は，住居を切って作っているもの，ピットを埋めて住居をつくっているものの両者がある。埋土や埋土中の遺物（土器片）から見て，竪穴住居跡前後のものであろうと見られるが，未だ詳細な検討を行なうに至っていない。また，掘立柱建物跡として認定できるかどうか。調査時に確認するのに至らなかった。

竪穴住居跡と柱穴状ピットの存在は，F区東西の未調査地でも推定（一部確認ずみ）される。



第14図　3　号，　4　号　住　居　跡



第15図　15 号 ～ 25 号，28 号 住 居 跡

(7) ま と め

遺構を直接に埋める堆積層を基準に分類すると下の表のようになる。

層	遺構	備考
Ⅰ層	地下式土壙1・2，溝1～4，7井戸1～2，4～6，柱穴状ピット群，土壙1～5	地下式土壙2の埋土は溝1に切られる。
Ⅱ層	溝5・6，溝状遺構，井戸3，ピット2・3	溝5は溝7に切られる。
Ⅳ層	竪穴住居跡1～28，F区ピット	両者は互いに切り合っている。
Ⅶ層	ピット1	

Ⅰ層やⅣ層の遺構に見られるように，同層中でも更に前後関係が認められる。

次に，Ⅰ層から順に，各層の遺構の性格や年代等について検討して見る。

Ⅰ層のグループの地下式土壙2は，天井落下後の堆積土が溝1によって切られている。溝1は，地下式土壙2が埋没した後造られたことになり，時期差が認められる。地下式土壙の2基は南北に接して，ほぼ同じ構造で造られており，長軸の方位もほぼ一致する。同じころに造られたものと見られよう。溝1～4，7井戸1・2・4～6，柱穴状ピット群は，後述（遺物の項，Ⅱ4）するように，出土遺物の種類，出土状態等に類似性があり，ほぼ同じころのものと見られる。とすれば，地下式土壙2と溝1の関係は〈地下式土壙1・2〉と〈溝1～4・7，井戸1・2・4～6・柱穴状ピット群〉の関係になる。後者のグループが新しい時期のものと言えよう。

地下式土壙の性格・機能については，貯蔵庫・墳墓の2説を主に麹室，隠れ穴など種々言われている。(注2) 本遺跡では，構築後比較的早い時期に天井が落下したと見られるが，その天井下（床面上）から遺物の出土は見なかった。遺構の外部にも付属すると見られる遺物はなかった。このため遺物面から，地下式土壙の性格・機能を知ることができなかった。しかし，立地を見ると，相当水はけの悪い所に築造しており，貯蔵庫・麹室説は無理と思われる。また・隠れ穴としては造りがていねいである。そこで構造に着目すると，中世鎌倉周辺で営まれたやぐらに類似していることがわかる。本遺跡では墳墓とみるのが妥当と考えられる。構築時期は中世と見られる。(注3)

後者のグループでは，井戸は断面の形状でロート型と円柱状の違いはあるが，いずれも素掘りで，井戸枠や屋根等をかぶせた痕跡のないこと，円柱状部分の直径がいずれも0.80m内外の規模に落ち着く可能性がある等の点から見て，ほぼ同時期の遺構と見てさしつかえないものと思われる。後述する出土遺物の種類や出土状況も類似している。だが，断面の形状の違いが何によるのか不明である。

溝は3類型に分けることができる。大規模なもの（溝7）――上端巾が6.00m以上，中規模（溝1・2）――上端が2.00～3.00m，小規模なもの（溝3・4）――上端巾が1.00m前後のものの3者である（上端巾は，いずれも遺構検出面の巾）。特に溝7は大規模で，溝1～4（いずれもC区南半に隣接）の東離れた所を南北に走っている。機能上の違いが想定できる。特に水の流れた痕跡は見受けられないが，あるいは用水堀等を意図したものとも考えられる。溝1

と溝4は4～5mの間をおいて南北に平行に走っている。中小規模の溝はほぼ同時期で3のものと見てさしつかえないであろう。溝1には人頭大の石と共に多量の石臼・陶器等が廃棄されていたが，これは，これらの溝が日常生活に密着したものであろうことを想像させた。周囲に同時期に存在したと考えられる井戸や柱穴状ピット群のいずれもが日常生活との関連を示すものであろうことも考え合わすべきであろう。後者のグループの基本的性格はここに求められるが，具体的には今後の調査に待つべきであろう。

後者のグループの時期は，遺物から見て江戸時代と考えられる（Ⅱ 4(7)参照）

土壙1～5は，出土遺物もなく，その性格は不明である。埋土のみでは，時期が前者の地下式土壙のグループに属するのか，後者の溝や井戸等のグループに入るのかも判然としない。仮りにこれが墓壙とするならば，地下式土壙と同じ時代のものとも考えられる。板碑片が出土していることを考えた場合，これを伴う遺構もかつては存在したであろう。しかし，この土壙がそれに当るかどうかは，また別問題である。

次にⅡ層を堆積層とする遺構のグループを見る。この堆積層は，B軽石(注4)を主体とする砂質土層で，紫灰色のブロックをまったく含まない点から見て，B軽石降下後しばらくたった時期に埋没したと見られる。平安時代の最末期から鎌倉時代ごろであろうか。それまでは機能を果していたものである。どの遺構も遺物の出土を見なかった。いずれにしても竪穴住居跡よりも新しく，地下式土壙よりも古い時期のものであろう。溝5は一部が検出されたのみで，大部分が未確認である。溝6は，北東から南西に走る溝が，D区に出合う付近で南に方向をとる。F区西の未調査区域を通って，南の谷地に落ちるものと考えられる。溝5・6は一部に水の流れた形跡がある。地形は南に低くなっている。しかし，その性格，機能は不明である。ピット2・3もその性格を物語る資料を得ていない。

井戸は検出されたが，この時代の住居跡は確認できなかった。このグループより古いⅣ層の時代に，周囲に竪穴住居跡が存在することを考え合わせると奇異なことである。この原因として，①住居の形式が変化し，検出が難しい。②住居の立地が変化した，③人々が死に絶えた，④全員が移動した，⑤調査方法の不備等が考えられる。しかし，遺構の外からも全く遺物の出土がないにもかかわらず遺構は存在することを考えた場合，②の変化を思わせるのである。あるいは，この時代土地利用の一部に変化があったのかも知れない。いずれにしても，前時代とくらべて明らかに変化はあるのである。同種の調査例の増加に待つところが大きい。

Ⅲ層で直接覆われる遺構は，各区の竪穴住居とF区ピットである。これらはB軽石降下前の遺構であり，後述する遺物から見れば平安時代（国分期）のものと見られる。竪穴住居跡の主な特色・傾向を列記すると次のとおりである。①EF区を中心に住居跡の分布を見ると，北群（E区北端）中群（E区南端・D区東端）・南群の3群に分かれる。北群と南群は4軒以上の重複が見られたが，中群には全くない。また，中群は遺構検出面から床面までの深さは他群に比べて浅い傾向が見られる。南群からは，鉛釉陶器（三彩・緑釉），硯（風字硯・転用硯）・墨書土器・巡方等が出土した。②埋土中にB軽石の純層あるいはB軽石を主体とする砂質土層の堆積の認められるものがあった（2・14・26・27号）。③カマドの位置は，13・26号住居跡の南

壁，14号住居跡の東南隅を除き，他はすべて東壁南寄りであった。④カマド内壁に丸瓦を使用したものが1軒（1号），カマド袖に凝灰質砂岩を使用した例が5軒（2・7・11・12・27号），硬質安山岩を使用した例が1軒（17号）認められた。⑤貯蔵穴の確認されたのは9軒であり，カマド右側の東南隅に位置していた（1・7・8・9・11・12・15・26・27号）。⑥柱穴跡や壁下の周溝の確認されたものはなかった。⑦住居跡の方位はN—9°—EからN—13°—Eの間に集中する傾向がある。⑧長軸と短軸との比が1.1～1.3のものが全体の8割をしめる。特に比1.1が最も多い（4割）。⑨面積は10～18㎡が一般的である。

以上が本遺跡の竪穴住居跡の主な特色であるが，これを①の群との関連で見ると，群ごとに大きな違いは認められない。凝灰質砂岩をカマド袖部に利用する例は，一応北群にのみ見られるが，南群でも住居跡埋土中から凝灰質砂岩が出土しているのでもとは利用した住居の存在する可能性がある。しかし，中群ではまったく認められなかったので，もとからなかったのかも知れない。

個別的に注目される竪穴住居跡では，丸瓦をカマドに利用した1号住居跡や，床面に焼土範囲が認められた27号住居跡や床面上から完形のフイゴロの出土した2号住居がある。

F区ピットについては，区ごとの遺構概要の項目（Ⅱ 3(6)）を参照されたい。

最後にⅦ層で覆われるピット1をみると，埋土層中から胎土に繊維混入，羽状縄文施文の土器片が出土した。しかし，この土器片は遺構と直接に関連するものとは考えられず，遺構の形も不整形をなしており，遺構の具体的な年代，性格等は明らかにすることができなかった。試掘坑等の調査によるとⅦ層で他にも縄文式土器（主に後期）や石斧（分銅型）が出土しているので，付近に縄文時代の遺構の存在は予測されるところである。

4．遺　　物

(1) 概　　要

本遺跡の主な出土遺物を時代別に見ると次表のとおりである。

時　代	遺　　物（パン箱で約20箱分）	出　土　状　態
縄文時代	縄文式土器・石器	包含層，表採。
平安時代	土師器，須恵器，灰釉陶器，鉛釉陶器（三彩・緑釉），硯（風字硯・転用硯），墨書土器，丸瓦，巡方，鉄製品，鉄滓，羽口，砥石	竪穴住居床面，または埋土中。
中　世	板碑	故意の埋てん。
近　世	陶器，古銭（寛永通宝），キセル（雁首），石臼，凹石，磨滅偏平石	

これらの遺物のうち全体の80%以上をしめるのは，平安時代（国分期）の遺物である。以下，区ごとに説明する。

(2) B—2区

遺構の検出は見なかったが，試掘坑の包含層より，土師器・須恵器片が出土した。平安時代（国分期）のものが中心である。区の北端は北からの台地が南の谷へ移行する所で，この谷の始まる付近を中心として出土した。

(3) C区

この区では，1軒のカマドを付設する竪穴住居跡（10号）が検出されたが，遺物の出土はみなかった。しかし，調査範囲外の東西の畑地には平安時代（国分期）の土器が散布しており，竪穴住居跡の存在が予想される。10号住居跡も平安時代（国分期）のものと推定される。また，区の南半では，井戸や溝が故意に埋てんされ，板碑，石臼，凹石[注5]，磨滅偏平石[注6]，陶器等が出土した。板碑には梵字，銘文等は見られなかった。石臼は接合できるものはなかった。

遺構ごとの出土物は次表のとおりである。

遺構名	出土遺物（）内の数字は個数，板碑・石臼等は破片	出土状態
溝 1	板碑(3)，石臼(11)，（その内茶臼1），凹石(5)，古銭（寛永通宝12），陶器（三島手鉢第16図—1，香炉第16図—2，椀第16図—3，皿第16図—4・5，その他），キセル（銅製羅首）	集石中から出土。古銭は集石上部より出土。
井戸 1	石臼（5，その内茶臼1），凹石(1)，磨滅偏平石(2)	集石中から出土。
井戸 4	板碑(4)	上に同じ。
井戸 5	石臼(2)	1.90m前後（底部か）
井戸 6	板碑(1)，石臼(2)，陶器	板碑・陶器—集石中。石臼—2.05m前後（底部か）
地下式土壙 1	板碑(1)，石臼（1，第16図—6）	表土に近い所から出土。
地下式土壙 2	板碑(1)，石臼(1)，凹石(1)，内耳土器	
柱穴状ピット群	古銭（寛永通宝1）	ピット内から出土。
トレンチ	板碑(1)，石臼(2)，凹石(1)，磨滅偏平石(2)	
表採	古銭（寛永通宝）	

※井戸2．は遺物の出土を見なかったが，土石に井戸1同様の埋てん状態が見られた。

(4) D区

C区と交わる点を境にして，西半は谷地になっており，遺構は認められなかった。トレンチ内から主な遺物として緑釉陶器底部片（第18図—63，図版3—21）・布目瓦小片（種類不明）・茶臼片，砥石等が出土した。区東半の台地状の部分では平安時代（国分期）の竪穴住居（1号）が検出され，それに伴う遺物も出土したが，この地区はE区の竪穴住居跡群とともに一群を形成しているのでE区の項で説明したい。

(5) E区

この区では北端と南端（D区の1号住居跡は南群に属す）にまとまって竪穴住居跡群が検出され，遺物もそれらに伴うものが中心であったが，セットで残存するものはなかった。土器から見ると平安時代（国分期）のものが中心で，南群の住居跡からはカワラケ状の土師器皿（14号）や土釜と見られる土師器（6号），また，カマドに丸瓦を利用した住居跡（1号）が見られた。北群で注目されたのは，その付近を中心として多量の鉄滓，羽口・砥石が出土したことで，特に7号住居跡埋土中からの多量の出土と，2号住居跡の床面出土の羽口は注目された。

溝7底部からはC区溝1等で出土したものと同様の特徴を有する陶器が出土した。井戸3，溝5・6，溝状遺構からの出土遺物はなかった。ピット1の埋土中からは縄文式土器（前期）

が出土した。トレンチ内からは，区北端で板碑片1（梵字・銘文なし），磨滅偏平石2が出土した。また，区南半からはⅦ層中に縄文式土器・石器（前期・後期）が認められた。

以下，竪穴住居跡の出土遺物を中心に観察表を掲げる。（別刷付表参照）。

(6) F区

遺構は13軒の竪穴住居跡が検出された。そのうち11軒（16～25・28号）はわずか200㎡余りの範囲内に激しく重複していたが，大部分の遺物はここから出土した。この竪穴住居跡の大部分は平面および地層断面の観察よりしても切り合い関係と床面が不明なため，遺物の所属する住居のつかめないものが多かった。遺物の大部分は埋土中からの出土で，平安時代（国分期）のものが中心であった。注目すべき主な遺物に，鉛釉陶器（三彩・緑釉），墨書土器，硯（風字硯・転用硯），巡方等がある。多量の灰釉陶器も出土した。

他の2軒（3・4号）の住居に関る遺物はすべて埋土中から出土したものであるが，重複地帯と同様の傾向を示す遺物なので，以下重複地帯の遺物の観察結果を器種ごとに数点ずつ述べることにしたい。（16号のみ床面からの出土遺物が確認できたので，これは住居単位で扱う。）（別刷付表参照。）

(7) まとめ

以上区ごとに遺物の概要を述べたが，ここでは遺構との関係を有する遺物を中心に時代ごとに見ていくことにする。

縄文式土器・石器はE区とF区を中心に，表採およびトレンチ内出土遺物（Ⅶ層）として前期より後期のものまで見られたが，確実な遺構は認められなかった。唯一の遺構と思われるピット1（E区）もどのような性格を持つものか不明である。E区の東側が微高地になっているので，あるいはここに縄文時代の遺構が存在するのかも知れない。

竪穴住居跡に伴う遺物は大部分が平安時代（国分期）のものであった。F区では奈良時代に属すと見られる土器片も認められたが，それも若干量であり，遺構との直接的な関連は確認できなかった。土器の器制・器形・諸特徴等と，前述した切り合い関係を勘案して竪穴住居跡に時を与えると次表のようになろう。(注7)

区	住居番号	年代	備考
D	1	10世紀前葉～10世紀末	図示以外の土器小片も考慮。カマド内壁に丸瓦を利用。
E	2	9世紀後葉～10世紀中葉	床面上から羽口（完形）。
F	3	8世紀終末～10世紀末	3号 (新)→ 4号
F	4	8世紀終末～10世紀末	3号 (新)→ 4号
E	5	11世紀前半	
E	6	11世紀前半	土錘出土。
E	7	10世紀前葉～10世紀末	高台皿の出現。埋土中に多量の鉄滓・羽口・砥石。
E	8	10世紀前葉～10世紀末	26号 (新)→ 8号 (新)→ 2号
E	9	8世紀終末～9世紀前世	埋土中上位層に鉄滓・羽口。

C	10	不　明	遺物の出土なし。
E	11	8世紀終末～10世紀中葉	15号 →(新) 11号 →(新) 13号 →(新) 12号
E	12		床面遺物不明。埋土中に8世紀終末～10世紀中葉の土器を含む。
E	13		
E	14	11世紀前半	カワラケ様の土師器皿出土。
E	15	8世紀終末～9世紀前葉	15号 →(新) 11号
F	16	8世紀終末～9世紀前葉	
F	17～25	8世紀終末～10世紀末	三彩，緑釉，硯，墨書，巡方，灰釉。
E	26	9世紀後葉～10世紀中葉	26号 →(新) 8号
E	27	不　明	遺物なし。2号 →(新) 27号
F	28	8世紀終末～10世紀末	17～25号と同地帯の重複。

一応時を与えたが，各竪穴住居跡出土々器の器種の少いこともあって誤りも多いと思われる。さしあたっての問題点は，遺構の切り合い関係と遺物の年代との間の矛盾である。遺構の切り合い関係から，26号→8号→2号→27号の順に新しくなることが確認されているが，遺物の年代をみると〈9世紀後葉～10世紀中葉〉→〈10世紀前葉～10世紀末〉→〈9世紀後葉～10世紀中葉〉→不明となり，8号→2号の年代観に矛盾を生じている。これは，遺構の切り合い関係が正しくとらえられているとするならば，年代の比定を間違えているか，もしくは，床面レベルのほぼ等しい住居跡の重複であるので，遺物と遺構の所属関係をとり違えているかのどちらかであろう。今後の検討に譲りたい。

次に竪穴住居跡の分布のようすから群としてとらえ考察してみる（別刷付図参照）。これを年代と主な遺物（土師器・須恵器を除いて）を中心にまとめると下表のとおりである。

群	住居番号	時　代	主な出土遺物	備　考
北　群（E区北部）	2・7・8・9・(10)・11・12・13・15・26・27	8世紀終末～10世紀末	2号床面に羽口。7・9号埋土中に多量鉄滓。	西側の微高地にも存在し，C区（10号）まで続くか。
中　群（E区南部＋D区）	1・5・6・14	10世紀前葉～11世紀前半		4軒中3軒は11世紀前半と見られる。
南　群（F　区）	3・4・16～25・28	8世紀終末～10世紀末	三彩・緑釉・硯・墨書・土器・巡方・灰釉等	東西にも竪穴の存在を確認南群の周囲でも緑釉出土。

非常に限られた範囲の調査であるが，この表にもとづき次の点は言えよう。

1. 北群と南群はほぼ同じころに始まり，同じころに終ったと見られる。これを引き継ぐ形で始まり，本遺跡最後の竪穴住居跡になったのは中群のものである。（北群と南群に4軒以上の重複が見られるが，中群にはまったくない。この変遷と関係ないだろうか。）
2. 南群に見られる三彩・緑釉・硯・墨書土器・巡方は北群・中群に全く見られず，灰釉もほとんどない。南群の特殊性がうかがえよう。
3. 北群の西側微高地，南群の東西の未調査地区についても，竪穴住居跡の存在が予想され，

1・2の記述がそのまま当てはまる竪穴住居跡群の存在が考えられる。

4. 鉄滓・羽口は，すべての群に何らかの形で見られるが，全体の95%は北群で確認され，この付近に製鉄関係の遺構の存在が予想される。

この製鉄関係の遺構は，7号住居跡（埋土中全体に多量の鉄滓・羽口・砥石）と9号住居跡（床面より4層中目に鉄滓・羽口を中心として一層をなす。この層まで床面から50cm，上層のB軽石を多量に含む層から10～20cm。第10図）から見て，中群の5・6・14号住居跡と併行して存在した可能性もある。また，北群2号住居跡は，その床面より羽口が出土したことから見て製鉄関係の遺構の可能性もあるが，前述したように比定年代に混乱が見られる。仮りにこれが製鉄関係の遺構とし，前述の比定年代が正しいとすれば，本遺跡で最も早い時期に現われた製鉄関係の遺構となる。しかし，比定年代の混乱からすれば予想される製鉄関係の遺構と同時期に存在したことも想定できる。

次にC区南半に中心をおく溝・井戸や地下式土壙の遺物を検討する。遺物の年代を見ると，板碑に見られる中世的なものから，古銭（寛永通宝）の近世のものまである。板碑は全て破片で梵字・銘文等は認められないが，いずれも薄い石材を使用し，中には浅い線の一部が認められるものがあるので，室町時代以降のものと見られよう。凹石はそのスリバチ状の穴の内面が磨滅し，磨滅偏平石はその偏平な上下の面が磨滅しており，黒色の付着物の認められるものもある。凹石と磨滅偏平石は石臼と一連の機能を有するものと考えられ，同じ時代のものと見られよう。陶器[注8]は三島手の鉢に代表されるように，江戸時代以降のものであろう。以上の年代をまとめると，室町時代から江戸時代の遺物と考えて妥当と思われる。

これらの出土状態を見ると，板碑・石臼・陶器等の大部分は，溝1・井戸1・井戸6に顕著に見られるように，多量の石塊とともに，それに混って出土している。これらは意図的に廃棄されたものと見られよう。石臼についてだけ見ても，C区の南半だけで24個体分出土し，完形のものが一つもなく，すべて破片であった。これらの遺物の廃棄は，同時に溝や井戸の廃棄に伴うものであった。以上のような遺物と遺構の廃棄は，普通の状態では考えられないことであり，何らかの異変を思わせるものがある。そして，それは遺物から見て江戸時代のある時期である。

以上の出土状況と，様相を異にするのは，地下式土壙と土壙である。地下式土壙は2基とも天井落下後凹地に土砂が堆積し，その最上部に近い所に若干の遺物が見られたが，意図的な廃棄とは認められなかった。落下した天井下（床面上）には遺物が認められなかった。また，地下式土壙2は天井落下後の埋土を溝1に切られている。このような地下式土壙の様子は，前述した溝や井戸と時代差を示すものと考えられる。また土壙は埋土中にも遺物の出土を見なかった。

以上の記述をまとめる意味で，遺物の種類，出土状況の類似，遺構の切り合い関係，あるいは遺構のまとめ（Ⅱ 4(7)）を援用して，遺構に大ざっぱな時を与えると下表のようになろう。

遺　　構　　名	時　代	備　　考
溝1～4，井戸1・2・4～6，柱穴状ピット群	江戸時代	石臼・陶器・寛永通宝等の出土。多量の石塊出土の傾向あり。
地下式土壙1・2	中　世	埋土が溝1に切られる。出土板碑の使用された時期と重なる可能性もあり。
土壙1～5	不　明	遺物の出土なし。

ところで，E区南半にも溝・溝状遺構と井戸がある。最大の規模を持つ溝7は底面出土の土器が溝1と似たものがある。埋土も同じである。同じ時期ごろのものと見られよう，溝5・6や溝状遺構と井戸3からは出土遺物もなく，多量の石塊の出土等の人為的に廃棄された様子も認められなかった。これはC区南半の溝や井戸の状態と異っており，時代差を示すとも考えられよう。埋土でもC区のものや溝7と異なっている。ここでは遺構のまとめ（Ⅱ 4(7)）の平安時代末ないし鎌倉時代と見ても特に矛盾のない点を述べて置くに留めたい。

以上，本遺跡では縄文時代から江戸時代まで様々な遺物が出土したが，周囲の未調査区域にも同様な遺物の散布が確認されていることを，遺物のまとめの最後に付記したい。

5. 結　び

本遺跡は縄文時代から江戸時代までの複合遺跡であった。遺構が確認できたのは，縄文時代・平安時代・中世・江戸時代の各時期であった。このうち，縄文時代の遺構（ピット）はその性格が不明であり，中世（地下式土壙）と江戸時代（溝・井戸・柱穴状ピット群）については，周囲の今後の調査や類例の増加に待つところが大きい。また，平安時代末ないし鎌倉時代ごろと見られるⅡ層に覆われた遺構（溝・溝状遺構・井戸・ピット）についても同様である。ここでは，平安時代の竪穴住居跡について，その意義および性格の一端についてふれたい。

竪穴住居跡はすべて平安時代（国分期）と見られるものである。畑から水田への転換地のEF区でその分布を見ると，北群・中群・南群に分けることができる。北群と南群は8世紀終末～10世紀末，中群は10世紀前葉～11世紀前半と見られる。ここで注目されるのは，南群の出土遺物（主に埋土中であるが）に鉛釉陶器（三彩・緑釉）・硯（風字硯・転用硯）・墨書土器・巡方等の特殊な遺物が見られることであり，また，中群の1号住居のカマド内壁には丸瓦が使用されていたことである。

本遺跡では調査範囲が極めて限られており，竪穴住居跡が存在すると思われる範囲のごく一部を調査したのみであった。そのため，本稿では上記の特殊な遺物の性格について具体的な論評をさしひかえねばならないが，ここで注意させられるのは，南方2～3㎞の所に国分寺跡や推定国府跡のあることである。本遺跡の竪穴住居跡の性格を上記の遺物に求めるとすれば，これらとの検討が今後必要であろう。とすれば，同時に本遺跡を含む周辺の地域の重要性があらためて浮かび上がることになる。いずれにしても，周辺の同時代の遺跡との関連の検討なくしてその性格・意義は知り得ないであろう。

最後に，今回遺構は確認されなかったが，北群付近に製鉄跡の存在が予想されることを付記して置きたい。

（注１）　地層（特に浅間山噴出Ｂ軽石，同Ｃ軽石，榛名山二ツ岳噴出軽石，同火山灰）の認定に当っては，群馬大学教授新井房夫氏の御教示を得た。

（注２）　中田英　1977　「地下式壙研究の現状について」『神奈川考古』第２号

（注３）　半田堅三　1979　「本邦地下式壙の類型学的研究――特に関東地方を中心として」『伊知波良』２では，その機能を，「中世仏教を背景に発生した墓地の内部で機能している施設の一つで，再葬の際第１次葬の施設等も含め広い意味の墓であろう。他にも供養堂としての性格についても考慮すべきかも知れない。このように中世仏教とのつながりを認めると，鎌倉地方に特有のヤグラと類似した遺構ということになる」とし，その年代について，「地下式壙の型態・機能が確定し普及を見るのが鎌倉時代後半であろうか」とし，「中世につくられた」ものとしている。

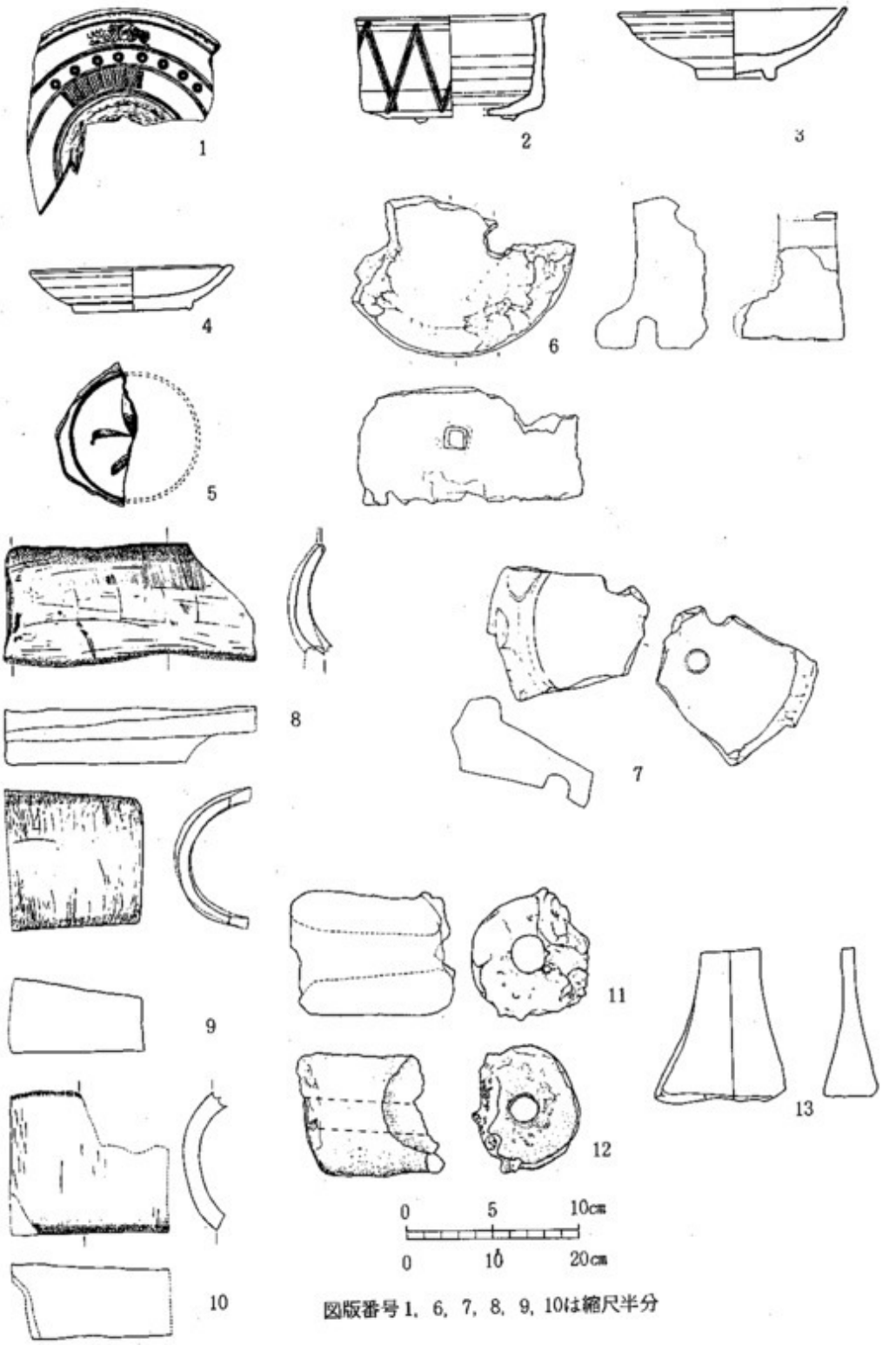
（注４）　天仁元年（1108）降下
石川正之助・井上唯雄・栃沢直昭・松本浩一編　1979　「特集・火山堆積物と遺跡１」『考古学ジャーナル』№157。

（注５）　直径７㎝，深さ２～６㎝前後のスリバチ状の凹を持つ自然石。凹の内面は磨滅している。凹は１石につき１～３個と様々である。石の大きさも特に一定していない。

（注６）　15㎝×12㎝，厚さ４㎝前後の偏平な自然石（転石）で，上下の平らな面が著しく磨滅している。中には偏平な面に黒い付着物を有するものがある。

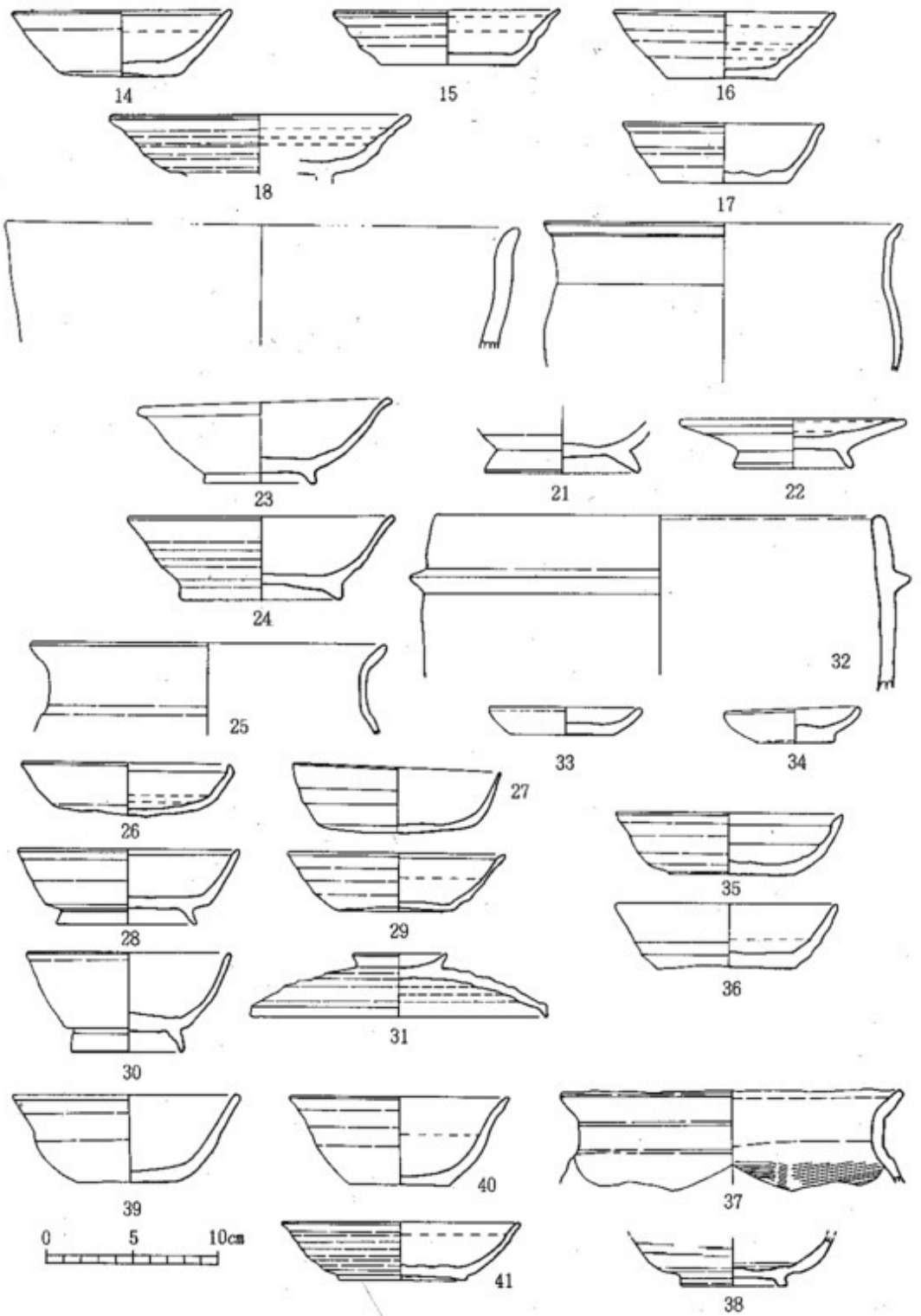
（注７）　井上唯雄　1978　「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究』第８号と，群馬県教育委員会　1979　『上野国分寺隣接地域発掘調査報告――奈良平安時代の竪穴住居跡等の調査』を参考にさせていただいた。

（注８）　陶器については，遺物整理中に群馬県埋蔵文化財調査事業団事務局の大江正行氏の御教示を得た。

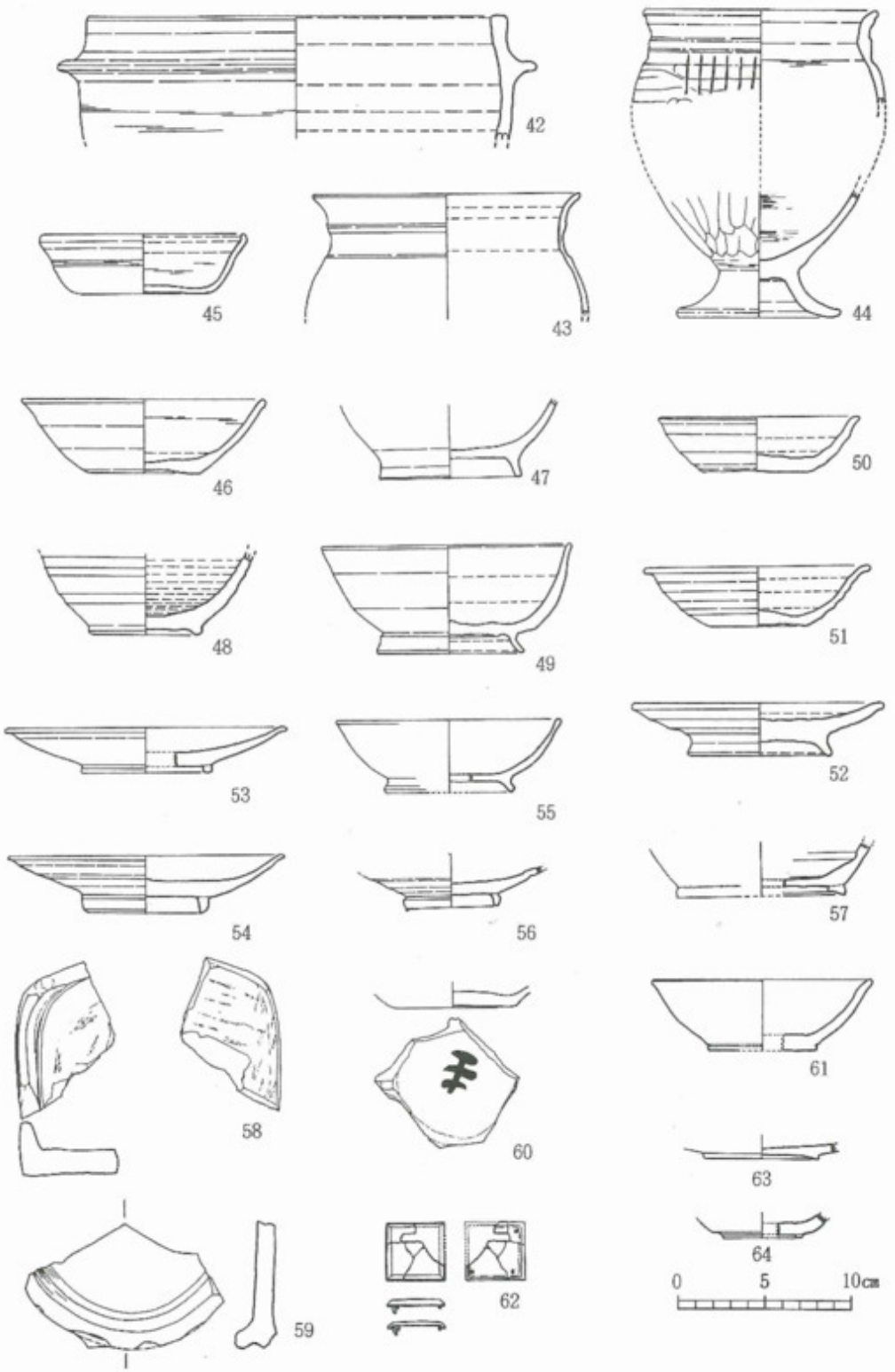


図版番号1, 6, 7, 8, 9, 10は縮尺半分

第16図　(溝14～5・7，地下式土壙16，1号住8・9・10・14)



第17図　（2号住11・15～17，7号住12・20～22，8号住13・23・24，5号住18，6号住19）



第18図　（9号住25～31，14号32～34，15号35・36，16号37・38，26号住39～41，17～25号・28号重複42～64）

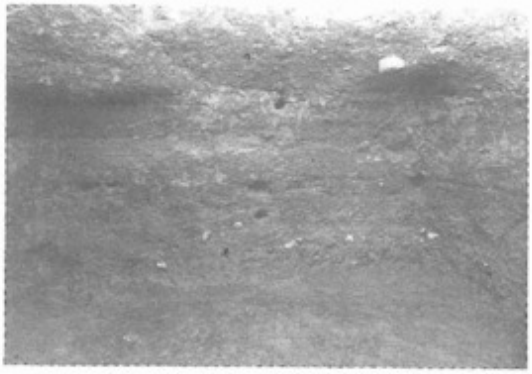
図版 1

(1)　発掘調査予定地（東より望む）

(2)　発掘調査予定地（西より望む）

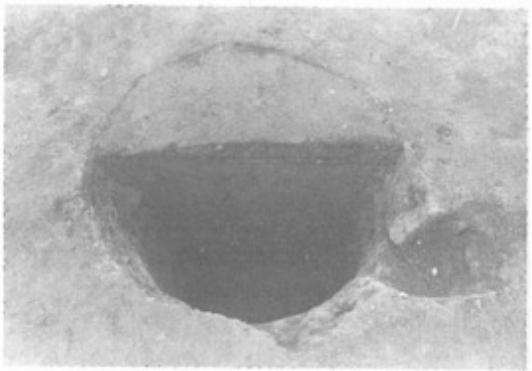
(3)　地下式土坑 2 号

(4)　地下式土坑 2 号階段正面



(5)　地下式土坑 2 号北壁部

(6)　地下式土坑 2 号北西部



(7)　井戸跡― 6 号

(8)　井戸跡― 1 号　溝跡― 1 号（写真上）
2 号（写真下）

図版 2

(9)　1号住居跡，カマド部分

(10)　2号住居跡，カマド部分

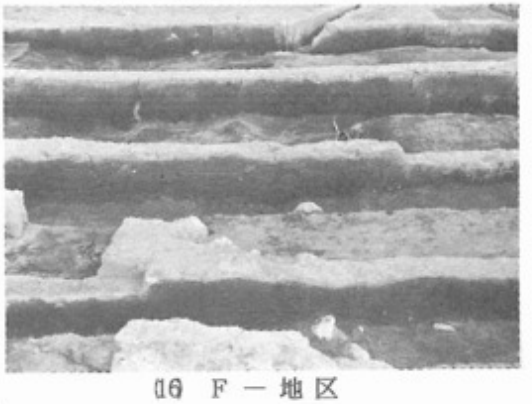
(11)　7号住居跡，カマド部分

(12)　重複住居跡，11号，12号，13号，15号（一部）

(13)　重複住居跡，2号，8号，26号，27号

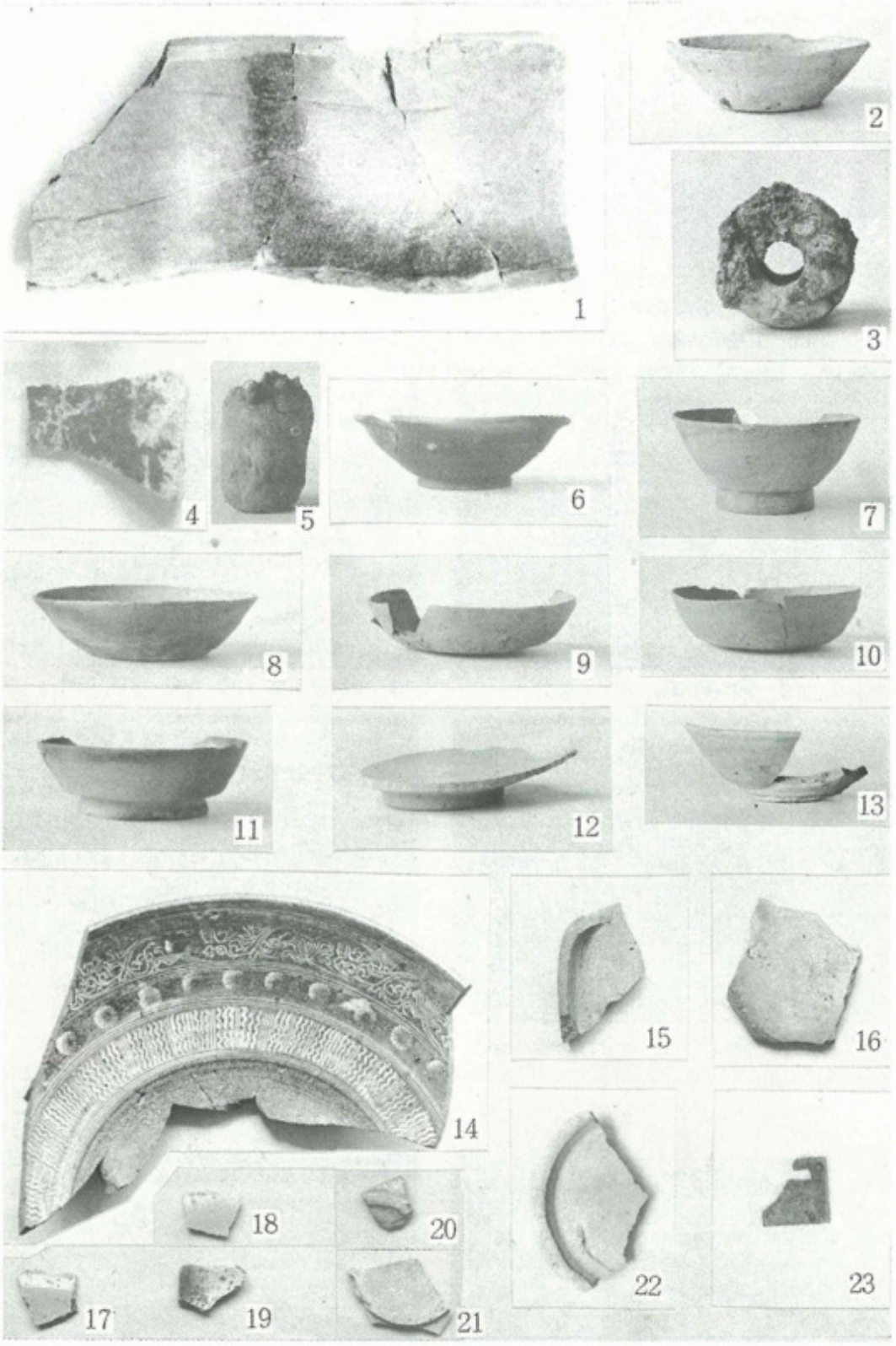
(14)　重複住居跡，3号，4号

(15)　F一地区全体



(16)　F 一 地 区

図版 3



（1号住1・2，2号住3，7号住5，8号住4・6，9号住7～11，重複12・13・15～19・22・23，溝114，F区グリット内20・21）　D区グリット 21

富田遺跡群
西大室遺跡群
清里南部遺跡群

昭和55年3月31日　印刷
昭和55年3月31日　発行

発行　前橋市教育委員会
　　前橋市大手町二丁目11番1号
印刷　有限会社 原田印刷所